破壊の翼、癒しの瞳

アルティメット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破壊の翼、癒しの瞳

【Ｎコード】
Ｎ６６５６Ｉ

【作者名】
アルティメット

【あらすじ】
主人公である勇人はルックスもそこそこスタイルもそこそこ強さもそこそこ

一般的な人たちよりほんの少し上プラスしたぐらいのそんなほぼ一般人の主人公だ。

そんな主人公がある日
行商人アリスより手に入れた地図を片手に
未開の遺跡を訪れる

そこには超古代人型兵器が眠っていた

勇人はそれに気づかず遺跡を後にする。

超古代人型兵器
行商人アリスとその用心棒レナ
いろいろな係わり合いのある人物たち
そして主人公の勇人

そんな人物たちが織り成す
魔法あり、美少女ありの
物語です・・・・・・

第００１話　『起動』

「ここが最後の部屋だな」

誰かに確認するわけでもなく、自分に言い聞かせるために勇人は確認する。

途中で見つけた壁に遺跡の地図らしきものが描かれてあったため簡易的ではあるが、メモをとっていた。

簡易メモと今の場所を見比べ、間違い無いかを確認する。

メモに走り書きで書いた古代文字と、目の前の扉の文字が合致する。

「くそっ！古代文字ぐらいちゃんと勉強してこればよかった。」

勇人は古代文字が読めない。

１６歳のため、大学にも通っていないので
独学でしか学べない、ある意味仕方ないことではあるが
本人はかなり悔しがっていた。

地図によれば３５箇所の部屋があるが、すでに３４箇所を回っており目的の場所へたどりつけていない。

かなりの無駄足である。

「さて、中にはどんな物がはいってるかな?吉とでるか凶とでるか・・・」

ほこりだらけの扉を開け中に入る。

部屋の広さは八畳間程度の広さだ。

ところどころに蜘蛛の巣が張られ、明かりは手元の懐中電灯のみ
無駄に部屋を行き来していたためか、すでに電池の残量は少なく
灯りの力は心もとない。

そのためか、非常に不気味な雰囲気である。

中央には、真っ黒い大きな柱が立っていた。

柱の中央には、勇人にもわかる言葉で
『ＪＺＡ－０８０』
と書かれていた。

「ここも柱だけっ!!だまされた!!」

大金を使い、行商人から遺跡への地図を手に入れ
わざわざ足を運んだため、かなりの怒りが発生する。

行商人曰く、まだ未開の遺跡なはずなので
もしかしたらお宝があるかも?だということだった。

だが、全ての部屋を周った結果、お宝らしき物は見つからなかった。

その怒りは当然のごとく、目の前の黒い柱にぶつけられる。

かなりの怒りがたまっていたらしく、とび蹴りである。

「あんの行商人っ！絶対探し出してやる」

怒りで我を忘れている勇人は、部屋の探索も十分にせずにそのままの状態で部屋をでる。

通常ならば、遺跡をできるにも迷いそうな造りだったが全ての部屋を回った勇人にとって、その心配は皆無であった。

迷う様子も無く、颯爽と出口へ向かう勇人。

背後には、先ほど勢いよく蹴った柱がひとつ。

そこには誰もいない。居ないはずだったが誰もいなくなった部屋で、小さな声で・・・

「みつけた・・・私の・・・・・・」

次回へつづく

第００２話　『始動』（前書き）

第００２話　『始動』

もぬけの殻となった部屋に、ひとつの柱。

声の主は柱の方からしていたようだった。

なんの変哲も無いただの柱。

金属製の怪しい黒さを放つ六角形の柱である。

「やっと・・・やっと・・・・・・」

第２声が発せられた。

やはり、柱の方から声がしている。

か細い女性の声だと認識可能できた。

声がすること以外は何も変化の無い部屋。

古代文字で描かれた、何かわからない文字が壁一面に広がり

ほぼ全ての壁はクモの巣で覆われている。

手の平サイズの大きなクモが一匹、俊敏な動きで獲物を待ち続けるが

右奥の角部に居るため、声の主ではなさそうだ。

この奥深い部屋では、当分食事にはありつけそうも無いので不憫に

思えてくる。

なぜ、ここを安息の地として選んだのか、クモの気持ちはわかりそうにない。

声の主がこのクモだというならば、ある意味世界的スクープである。

しかし、声の方向は間違いなく柱側から発せられているために、その可能性は完全否定だ。

クモが動作を停止し、暫くの間無音が続く。

静まり返った部屋。

その沈黙を打ち破るかのごとく、柱からキーの高い高音が発せられた。

ＦＡＸの受信音のような音だが、ワンクラス上の高音だ。

音と同時に、黒かった柱が、紺色へと変わっていく

『ＪＺＡ－０８０』と書かれた黄色い文字も、金色と表現したくなるような色へと変貌をとげていた。

さらに変化は続く。

音はさらに高い高音へ移行。

柱の色は、紺色と白の色変化を繰り返し、まるで人間の鼓動のようなタイミングで変化を続ける。

金色の文字はさらに発光を続け、閃光とも呼べるほどの光度の高い色へと変化していく。

その変化は暫く続いた。

３０秒ほどしただろうか、新しい変化が現れだした。変化というよりは変形だ。

六角形の柱の頂点、そこから6分割され、徐々に上の隙間を広げていく。

その隙間からは青白い光が放たれ、隙間はどんどん広がっていった。

柱が開き、３０。、６０。と角度が増加。中央には青白い光の塊が見て取れる。

倒れてきた柱の一部、6分割された欠片達は、完全に倒れきり、９０。寝た状態となっていた。

しばらくすると、中央の青白い光も、閃光から光へ、さらに光から灯へと変化していく。

次第に見えてきた発光の主。

それは・・・・・・

第3話へつづく

第００３話　『行動』

激しい発光を繰り返し、完全に姿が変わってしまった黒い柱。
その中心部には、小さな光の球体がひとつ、ゆらゆらと揺らめいている。

発光は徐々に弱くなり、球体だったものも徐々に変化を遂げていく。
球体から円柱へ、さらに複雑な形への変形、人型と呼べる形へ
人の形へ移行したそれは、さらに変化を続けていく。
背中の部分が大きく飛び出し、巨大な翼が現れ出した。
人型の部分が１５０ｃｍほどの小柄なサイズにも関わらず
羽のサイズは固体のサイズを軽く凌駕し、２メートルを超える勢いで
続いて、中型の翼、小型の翼が出現、色は完全な白色である。
３枚構成で、合計６枚の羽が神々しく、天使を安易に連想させる。
巨大な翼を大きく広げ、羽ばたかせる。
開いた状態で翼を停止。
純白だった翼が、先端から徐々に灰色へ、さらには黒色へと染まっていく。

背中の付け根まで黒く染まった翼は、艶の目立つ漆黒の翼へと変わっていた。

漆黒の翼を備え持つ声の主、それは小柄な少女、しかもかなりの美少女である。

直立状態で、床に付きそうなぐらい長いツインテールを、大きな髪留めでとめて

服装はフリル付きのドレス、生地の量はかなり少なめで、肌の露出がかなり目立つ。

その中でも特に目立つ部分は二の腕部分で、原因はＪＺＡ－０８０と書かれている大きな文字にあった。

ゆっくりと閉じた瞳が徐々に開く、その瞳は吸い込まれそうな妖しさを持つ、金色の瞳であった。

その視線は少し寂しげでもあり、楽しげでもあった。

さきほど聞いた高音が、少女の髪留めから発せられる。

その音は暫く続き、その間少女は直立不動。まばたきすら行っていない。

「外部データ取得完了。言語補完に異常無し。」

「視界良好。ピント調整機能補正完了。」

「各関節嵌合部異常無し。レスポンス良好。」

「外部参照ライブラリ異常無し。」

次々と少女は言葉を発していく。全ての事柄が異常なしであり、良好らしい。

「・・・ミッション・・・開始」

大きな翼で守るように自分を覆い隠す。

『ピッ・・・ピッ・・・ピーーーー』

聞きなれた高音が、途切れ途切れに鳴り出した。

漆黒の翼が眩い閃光を放つ、密閉空間であるはずのこの部屋一体に強力な風まで起こり始めた。

目を開けていられそうも無いレベルの青白い閃光が部屋一面に広がる。

音が途切れ、光、風もおさまり、平穏な状態へ

ただ少し違うのは、先ほど居た少女。

金色の瞳を持つ、黒い翼の少女が姿を消していた。

真っ暗だった部屋全てが明るく照らされている。

明かりの正体は天井にあるようだ。

天井にはポッカリと開いた大きな穴。

２メートルは超える大穴で、穴の側面は焼けた様な表面となっている。

穴の先。焦げた匂いを潜った先には、太陽が姿を覗かせていた。

第４話へつづく・・・

第００４話　『行商人　アリス』

行商人を探すべく、勇人は街を歩いていた。

７大陸の一つ『ベルリア』の主要都市『アネツィア』だ

アネツィアは水を資本として、成り立っている国で

その象徴として国の中央に、超巨大な噴水が建設されていた。

設置ではなく、建設という表現をしたのは

そのサイズが巨大すぎるためである。

かるく５０ｍは超えていて、噴水の頂上から滝のごとく水が噴き出している。

国のどこからでもその水が確認できるほどの巨大さで

その噴水を囲むようにして、街の形が成り立っていた。

噴水を幹とし、道を枝とすれば、そこに並ぶ家々は葉として納得できるような形である。

その街で、勇人は行商人『アリス』を探していたのだ。

探す、といってもすでにどこにいるかは検討がついている。

アリスは行商人と名乗っている割には、ほとんど自分の店にいるのだ。

遺跡からかなり歩いたため、勇人の怒りはかなりおさまっていたがアリスには一言言っておかないと気がすまない。

怒りが完全におさまる前に、店に入るために早足で歩いていた。

早足で歩いたためか、予想より早く店の前に着く。

店はシンプルな形ではあるが、ピンク色のイルミネーションやピンク色の看板などが、シンプル差を消し去っていた。

看板には大きな文字で『世界９大商人のお店』と書かれていた。

若干１９歳にして、商人会の最大の栄誉である世界９大商人に選ばれたのだから

その実力は折り紙つきだ。そのアリスから提供された情報だからこそ、勇人は憤怒したのである。

ピンク色の扉を開き、店の中へ入る。

中は概観とはまったく別物で、時空でも変わってしまったのかと思えるほどの変化の仕方だった。

ロウソクの明かりで照らされる黒い壁。そこには得体のしれない瓶が所狭しと並んでいた。

他にも、髑髏のオブジェや魔物の敷物など、普通では手に入らない商品が並んでいる。

その中でも特に目立つ独特のオーラを放つ品物があった。それは蒼龍の角である。

表示価格は９９９９万ゾルで、世界に名を連ねる大富豪でさえも、購入するには躊躇する金額だ。

価格のプレートの横には、満面の笑みで角を持っているアリスと、横たわった蒼龍を撮った写真が置いてあった。

アリスの後ろには筆頭用心棒であるレナの姿が見て取れる。おそらくレナが蒼龍を倒したのだろう。

蒼龍は恐ろしく巨大で、この国の噴水と並べてみてもサイズは同じぐらいかそれ以上だと言えそうだった。

いつものようにカウンターへと足を運ぶ。

そこには、肩肘をついて睡魔と闘う美少女の姿があった。

勇人は目の前に立つが、睡魔と戦闘中の彼女の目には映っていなかったようでノーリアクションを突き通していた。

「おい、アリス」

「ほへっ？」

気の抜けた声で目の前の訪問者を確認した。目はまだ虚ろで、はっきりとは確認できていない様子だ。

目を擦り、暫く勇人を見つめ続ける。大きな澄んだ瞳を向けられた勇人は思わず目を背けてしまう。

「ゆうたん？はやかったねぇ。手ぶらということはダメだったのかにゃ？」

「ああ、珍しくガセだったぞ。わざわざその件で文句を言いに来てやった。」

「はにゃ？・・・ちゃんとした情報だったはずなんだけど・・・」

「未開の遺跡というのは本当だったが、宝はなかった。」

「ＪＺＡやらＣＰ３やらわけのわからない番号が書かれた柱だけだったな。」

「無駄足だぞ。どうしてくれる」

気の抜けた正確のアリスを目の前にして、怒りがほぼ最小値まで下がり

ぎりぎりで怒りの姿を保てる状態にまでなっていた。

店に入るまでは、店の中で叫んでやろうとさえ思っていたのだが、

その気もなくなってしまった。

１９歳にしては若すぎる容姿を目の前にして、叫ぶのは少々大人気ないと認識されられてしまったのだ。

アリスは１２歳といってもまったく違和感の無い顔の持ち主で、大人だと認識される唯一の道具が、紺色のローブから顔を除かせている豊満な膨らみであった。

一部分だけ無駄に発達したのか、身長も低く、言動も幼い彼女の年齢に疑いを持ってしまう。

勇人の言葉を聞いた後、腕を組み何か考えごとをしているようだった。

暫く沈黙が続いたあとに、何か閃いたのか、獲物を狙う猫ような目つきを勇人へ向けてくる。

「ねぇ！もしかして他にＥＢ４とかなかった？」

「ん？・・・あった気がするな。何かわかったのか」

「ほんとにっ！ほんとにほんと？」

「本当だって。他にもいろいろあったな。」

「すごい！大発見だよ！そこの蒼龍の角なんて目じゃないくらいのっ」

目をきらきらさせて勇人へ歩み寄ってきた。

ほんの少し動いただけで、唇と唇がふれてしまいそうなぐらいの近距離だった。

アリスの説明によると、その番号は古代文明の超兵器の番号らしく今では比べ物にならないぐらいの技術を総結集して作られた兵器だという。

隕石などの影響でその文明は滅んでしまったということだが、それの手がかりとなる大発見らしい

「よぉし！レナ！！」

「はい、お呼びでしょうか」

「その遺跡いこっ♪」

「了解」

主人の命令を受け用意を始めるレナ。

アリスのための荷物と、自分の荷物を早々と纏め上げる。慣れた手つきだ。

「ちょっとまて・・・俺は？」

「もっちろん♪案内役ってことで」

満面の笑みと好奇心を帯びた大きな瞳が勇人の拒絶を認めてはいない。

断る理由もないし、本当にお宝であったとすれば勇人のお手柄である。

報酬を受け取らずにはいられないし、同行しなければそれも得られなくなる。

しぶしぶながら、勇人はアリス達を案内して再度遺跡へと足を運ぶこととなった。

題5話へつづく・・・・・・

第００５話　『時空の扉』

再度遺跡へ向かうことになった勇人。

遺跡までの道のりは遠く。険しく。危険だ。

この間も何度か死の危険にさらされていた。

例えば、危険ＬＶの高いモンスターとの遭遇などがそれにあたる。

危険ＬＶ１８のワイルドベアや、危険ＬＶ１５のギガントウルフなど

並みの人間では瞬殺されてしまうほどの、凶暴な魔物に出くわしていた。

勇人は戦闘技術において、かなり秀でた能力の持ち主であり

闘気と魔力を使い分けて、時には合わせて闘える。

並みの大人でも自在に使い分けて闘うのは用意ではなく。

使い分け可能というだけで、かなり戦力が増加するのだ。

合わせて使用可能だとさらに戦力が増加する。

戦闘は勇人の得意分野だが、この世の中は広い。

目の前に居る金髪のポニーテール、黒いひらひらの衣装に身を纏った少女レナは

並みの大人より闘気と魔力の総量が１０倍以上もあるという

一見ただのかわいい少女なのだが、闘いという一点において、勇人ではどんな方法を使ってもかなわないだろう。

勇人でも、並の冒険家には負けないほどの実力を持っているのだが

レナは規格外の強さで、２２歳という若さで蒼龍を一人で倒せるほどの実力派だ。

見た目は普通の華奢な少女だが、背中に背負った武器を見れば普通ではないということが用意に想像できる。

背中に設けられた鞘には、２メートルほどの刀身がまばゆい光を放っていて

一見、細い腕では支えられるはずも無い、幅広の剣を主力の武器として使用していた。

背負って移動するだけでも困難なはずの巨大な剣だったが

今は表情ひとつ変えずに直立しているし、実際に戦う場面となればレナは片手で用意に剣を振るい、魔物を屠るのだと言う。

それを聞いただけで闘気の総量が想像を絶する量だとわかる。

常に闘気を開放して、細い腕や足の筋力を補っているということにつながるからだ。

蒼龍を倒したという事実のみでも、レナの武器の破壊力の高さが想像できる。

蒼龍のうろこは通常の武器では傷ひとつつかない。

さらに極めつけは常時展開式の魔法障壁だ。

魔法障壁によって、蒼龍はいっさいの魔法を受け付けない。

たとえ、禁魔法を使用したとしても、一切のダメージは与えられないだろう。

だが、レナはそれを倒した。実力で、魔法を使わず、純粋な破壊の力のみで

勇人が聞いたところ、本人曰く、

『切断ではなく、潰すんです。潰し切り♪うふふ』

とのことだった。そのときの笑顔が忘れられない。笑顔の裏に隠れた何かが・・・

それを思い出して、妙な寒気がした勇人だったが、アリスの一言で思考をもとに戻すこととなった。

「ゆうたん♪時空転移するからさ、頭貸して」

「えっ！？」

おもむろに近づいたアリスが、右手を頭に乗せようと手を伸ばしてきた。

しかし、かなりの身長差のため、もう少しのところで届かない。

「もう！しゃがんでよぉ。とどかないでしょぉ」

「ああ・・・わかった。」

しぶしぶだが、手が届く用にしゃがんでやることにした。

頭を貸すとは何のことか想像もつかない。

右手を頭に乗せる。その手はほんのり暖かかった。しばらくその温もりを感じていたが

「よし、もういいよ。ありがと」

「おぅ・・・なにしたんだ？」

「あっ・・・気にしないで記憶とか探ったりしたわけじゃないから」

「なにっ！？記憶探ったのか！！」

「えっ・・・あっ！？さ・・・探ってないって・・・ほんとにほんとだよ。」

ばればれの嘘をつき、目をきょろきょろさせる。

勇人の脳から直接情報を読み取り、そこまでの道のりや状況を把握

したのだ。

アリスは、時空管理魔法と、情報操作魔法が得意中の得意で

先にあげた時空管理魔法は、商人としての幅を広げるために必要だった。

異次元世界を利用して商品の保存をしたり

超々高度魔法である転移魔法を使ったりと

商人としてはこれ以上に無い必要不可欠な能力だった。

情報操作魔法は、情報屋としての幅を広げるためだ。

つい先ほど見せた記憶の読み取りを限界まで昇華させ

人間だけではなく、犬や猫、鳥などからですら読み取ることが可能だ。

モンスターからでさえ、いとも簡単に読み取ることができる

この二点において、アリスは天性の才能を秘めており

若干の１９歳にて世界９大商人の座に登りつめたのだった。

「まあいい・・・いらん情報流したら、ただじゃすまさんからな」

「あはは・・・じゃあいこっか、ここに・・・こうやって・・・こうやってっと・・・」

「ここで、こうすれば！！えいっ！！」

半ば話しをごまかしながら、小さな腕を可能ながり伸ばして、縦に切り下げた。

手の軌跡を追うように、次元の裂け目、ワームホールが姿を現す。

ワームホール内は暗く、深く、とても怖い

一度はまったら抜け出せそうに無いと思えるほどの黒さと怪しさだった。

その虚空に現れた一つの裂け目に、真っ白で小さな両手をかける。

そのまま頭を裂け目の中にうずめ、何かを探っているようだ。

完全に中に入ってしまった頭は、こちらの時空では視認できなくなるようで

後ろから見れば、完全に首の無い状態だった。

時空の裂け目はこちら側で開放したために、視認可能だったが

レナが立っている方向から見たとき、すなわちアリスの目の前

レナの方からは時空の開放は行っていない。とすれば次元の裂け目が見えないはずで

レナから見た光景を想像しただけで、勇人は鳥肌が立った。

「よぉし！つながったにゃ♪」

猫の物まねをして、手を顔の横に持ってくるアリス。

物まねなんかはどうでも良く。目の前の景色が変わっていることに興味がわいた。

「ふにゅぅ・・・ねこのリアクションは無視？そんなことばかりしてると、次元の狭間へほおり投げちゃうぞぉ。にゃはは」

冗談とは思えない目つきで、勇人を見つめてくる。

アリスは実際に、何人か次元の狭間へ捨てたことがあるのだ。

数日後にはちゃんと救助していたが、出てきた当事者は廃人のように震えていたのを覚えている。

その次元の裂け目、先ほどまでは黒く、ただただ怖さだけを写していた物だったが

注意して見ると勇人の見慣れた光景へ変化しているのがわかる。

ほんの数日前にいた遺跡が、不自然な背景として映し出されているのだ。

その場所は遺跡の入り口で、すぐ横には勇人が倒したギガントウルフが倒れているから間違いない。

数日かけて歩かなければ、たどり着けないはずの遺跡

道中にも危険がいっぱいで、訪れるだけでも死と隣り合わせな場所そこへの扉が、今目の前に現れているのである。

勇人からすれば、とんでも無い能力だが、普通にやってのける辺り、やはりアリスは天才なのだろう。

次元の狭間に捨てられないためにも、その能力に感謝して、ゲートを潜る。

レナ、アリス、勇人の順で

用心はしていた・・・していたはずだが

勇人がゲートをくぐり終わり、ゲート自体が自然な景色へと戻ろうとしていた矢先だった。

はるか上空からサタンバードが急降下。勇人に目掛け鋭い爪を振りおろしにかかってきた。

背後からの攻撃だったために、避け切る暇を一切与えない。

やばい、そう思った瞬間だった。激しい衝撃を覚悟して、目を瞑る目を瞑ったが、勇人への激しい衝撃は一向に与えられることが無かった。

恐る恐る目を開けてみると、目の前に大きく鋭い爪が停止していた。

その爪は、メッキされた金属のような光沢を放っており、勇人の驚きの顔を映しだしている。

目の前で、大きな巨体が、ひとつの支柱によって支えられているのが分かったからだ。

勇人のすぐ隣、金髪が風になびく少女が目に付く。

支柱の正体。それは真っ白なとても細く繊細な人差し指。

全体重をかけた本気の一撃を、ただの一指し指のみで支えていた。

最高の一撃をとめられたサタンバードは、恐怖で小刻みに震えていた。

追い討ちとしてレナの鋭い眼光が獲物を捕らえた。

ただの睨みのはずだったが、後退させるには十分な恐ろしさだったようで。

慌てて逃げ出すサタンバードが哀れに思えてくる。後ろ姿が非常に情けない。

一瞬垣間見えたレナの実力に、勇人は真の強者とは何かを思い知らされた。

闘気は大人の１０倍以上と聞いていたが、それはまったくのガセで勇人の見解では軽く３０倍は超えていると、認識できるほどの力強さと迫力だった。

このことでレナやアリスには、どうやってもかなわないことが、身を持って証明され

二人には絶対歯向かわないでおこうと、心に決め、遺跡へ向かう勇人であった。

次回へつづく・・・・・・

第００６話　『謎の追跡者』

いきなりの魔物の洗礼があったものの、いとも簡単に遺跡へ着いてしまった。

数日前に来た遺跡そのままで、古めかしい遺跡に懐かしさを感じた。

全体的には土色で構成されており、正面入り口には、火を灯していたと想像できそうな灯篭のような柱がある。

その横には、勇人が倒したギガントウルフの死体が転がっており死臭を放っているため、日がたっているということを証明させている。

「これって、ゆうたんが倒したやつ？」

「ん？ああ、苦労したぜ。おかげで大怪我したし、治癒魔法使えなかったらやばかったかもな」

「ふ～ん、ゆうたんてさぁ、もしかしたら後処理しないタイプ？」

「後処理？何の話だ？」

「えっ！？知らないの。冒険者の基本だよ」

「知らんな。」

「うっそ～！！基本中の基本だよ！！嘘だよね」

「知らん。」

「ほんとにほんと？」

「おう」

あっけに取られている顔のアリス。本当に信じられない様子だ。

顔の横にはポカーンと言う文字すら浮かんできそうである。

だが、本当に勇人の知らない知識であることは確かで

冒険者の基本中の基本だということも確かだった。

「じゃあさ、手本見せたげる♪」

すっと右手の指をギガントウルフの目の前に、指をパチンと一回だけ鳴らした。

中級炎魔法だ。目の前のギガントウルフが真紅の炎に包まれ大炎上。

死肉からでる油で火の勢いは増し、さらに炎の威力は増してゆく

暫く燃え続き手の先から順に、炭と化し、灰と化した。

「だめだよゆうたん。ちゃんとこういう風に後処理しとかないと♪

じゃないと、さっきみたいに魔物が集まってきちゃうんだから」

「そうなのか？」

「そうですよ勇人さん。後処理は魔物への手向けとしても必要なのですから・・・」

「おおぅ・・・気をつける。だがな、アリスみたいな大火力魔法使えないぞ。せいぜい低級炎魔法だけだ。」

「それなら大丈夫ですよ。今度私がみっちり教えてあげますから、うふふ」

いろいろ含んでいそうな笑顔を見せ、中級炎魔法のレクチャーを買ってでたレナ。

戦いだけでなく、魔法の扱いにも長けているので、先生としてはうってつけだが

意味深な笑顔のために、こころ良くお願いする気にもなれない。

おそらく、後々アリスから請求書が回ってくるに違いない。『レナの授業料』としてだ。

勇人は炎属性の魔法が苦手であり、さらに強くなるためには炎属性の習得は必須項目。

かなり考えはしたが、最終結果は

「じゃあ今度教えてくれ。授業料は安めでたのむ」

「了解です♪」

そんなやり取りをしながらも、少しずつ遺跡の内部へと足を踏み入れていった。

遺跡の内部は真っ暗で、足元さえも見えないほどの暗さである。

「わぁお、暗いねぇ。レナ」

「はい」

目を瞑り、闘気を体内に練り上げる。

練り上げた闘気は全身から体外へ、白い灯りとなって漏れてくる。

長い髪の先端から、足の先まで、全身が光を放ち、その優しい光が壁を照らしてくれた。

闘気であるはずなのに、穏やかな表情で温かみを感じさせる光だった。

勇人が来たときは、得意な雷魔法を応用し光の玉を使って灯りとしたが、明るさには天と地ほどの差があった。

同じ方法で照らすことも可能なのだが、普通なら闘気がすぐ底をついてしまう。

レナのおかげで視界も前回より格段に上がったためか、新たな発見も多い。

入り口近くにあった建物の地図以外にも、壁一面に壁画が多くみら

れ。

天使のような絵。悪魔のような絵。仮面を被った人。見慣れた魔物の絵など

遺跡を作った当時の文化がわかる重要な資料たちが、ありとあらゆる場所に描かれていた。

古代文字も多くみられ、考古学ファンにとってはまゆつば物の遺跡である。

宝にしか興味のない勇人には、まったく関心の持てないものであったが

アリスは違う。目をきらきら、きょろきょろさせている。

古代文字を普通に読むことの出来るアリスにとって、これ以上面白い文章はないだろう。

「にゃはぁ・・・すごいねぇ。これは大発見だよ」

文字を読めない勇人とレナは同時に首を傾げる。

「たとえばね。これは当時の神様の絵みたいなので、これが王様の絵で、こっちが民達。

これは魔物の絵だね。この時代にもいたみたいだよ・・・このぷにゅぷにゅ」

指で示した先には、もっとも危険ＬＶの低いとされている魔物が描かれている。

弾力が心地よく、ペットにして飼っている人もいるぐらいのポピュラーな魔物。

枕にしてもよし。布団にしてもよしのまったく人への危害を加えないうえに

餌を与えてやるだけで、なついてくるほどの魔物だった。

その時代でも同じだったようで、壁の絵にはところどころに描かれていた。

「にゃははぁ・・・おもいろいなぁ。あっちの方も見てみよ♪」

楽しそうなアリスに対して、勇人は妙に険しい顔をしている。何か悩んでいるような様子だ。

「勇人さん。どうかしたんですか？」

「ん？・・・ちょっとな・・・気づかないか？あっちの方」

歩いてきた方向。遺跡の入り口の方面に横目で視線をやる。

「あら？気づいてましたか。さすがです。」

「さすがですって・・・気づいてたのか、ほおっておいていいのかよ」

「だいじょぶだと思いますよ。殺気は感じられませんし、それに、こんなに簡単に気づかせてくれるぐらいです。素人ですね」

「それはわかる。だが、おかしくないか？」

「なにがです？」

「こんな辺鄙な場所に、一人で、しかもつけて来てる。」

「たまたま・・・じゃないですかね。どちらにしろ害はなさそうですから、向かってきたら処理しますよ。迅速に、的確に」

「それは心強いことで、じゃあ処理は任せるけど、いいか？」

「どうぞ♪私のお仕事ですから」

天使のような笑顔を向け本気で笑った。勇人に無駄な心配を増やさないため、できるだけの心遣いだった。

だが、レナが言うように、着けて来ている者は素人で、さらには殺気などまったく無いことは事実であった。

「あぁ！！見つけた！！これだよこれ！！やっぱり合ってた♪」

遠くの方で、ジャンプをしながら二人を手招きする。

アリスの前には石版がある。勇人も見るには見たが、古代文字のために理解できなかった石版だ。

呼ばれた場所へ向かう。その刹那。追跡者の気配が無くなり、妙な

寒気を勇人に与えることとなった。

次回へつづく・・・

第００７話　『石碑』

楽しそうに手招きをするアリスの前には、石版があった。

石版といってもごつごつした岩では無く、質感は大理石を思わせる。

表面は黒く金属のような艶を放っており、その妖しい輝きは当時の技術高さを物語っていた。

数百年はたっているのにもかかわらず、真四角の形は崩れず、文字もくっきりと彫刻されている。

「なんて書いてあるんだ？」

「うんとねぇ・・・知りたい？」

「おう」

「じゃあさぁ、はい」

手の平を上にして、両手を勇人の前へ、上目づかいで物ほしそうな視線を向ける。

「なっ！金取る気か！」

情報量。目には見えないが貴重な情報であれば、金が必要なのはあたりまえ

数百年まえに全世界のデータを管理していたテクノバンクが、何者

かによって破壊され

人間の頭の中と紙で残っていた情報以外は全て消失。それ以降貴重な情報には金が必要な世界になっていた。

「くそっ！じゃあいいよ」

今までの経験では、法外な価格を押し付けてくるに決まっている。

本当は知りたかったが、持ち金はほとんどなく。今後払える可能性も無かった。だから断る。

「って♪冗談だよ！そんなに貴重な情報でもなさそうだし

ゆうたんには、ここの情報提供者として知る権利があるしね。本気にした？」

本気もなにも、先ほどの目は間違いなく貰う気の目で、普段の目ではなく商人モードの目だった。

すんなり払っていたら間違いなくアリスのサイフに勇人の金が入っていたことだろう。

「・・・ほんとはとりたかったくせに」

「なにか言った？」

小さな声で、限り無く小さな声で言った愚痴であったが、かすかに聞き取れたようだ。地獄耳である。

「じゃあ上から順に読んでいくね」

「たのむ」

『破壊の翼　英雄の手により　この地に封ず　封印解くべからず
新たな世界を望まなければ

始まり　終わり　それは隣合わせで　とても近く　遠い存在　終焉
の時は今では無い

悠久の時の中で　始まりと終わりは一つの意思に』

「だってさ♪なんかさぁ、意味深だよねぇ」

腕を組み、首を上下に振って一人で頷いている。

「『終焉の時は今ではない』の今はいつを指しているんでしょうか
？」

「昔のことじゃないか？これ作った当時の」

「では、この当時、世界を終わらせることが？」

「できたのかなぁ・・・わからん」

二人は首をかしげて、石版の意味を考える。だが、わかるはずもな
く答えには行き着かない。

「けど、ひとつだけわかったことがあるな」

「なんですか？」

「ここに、破壊の翼ってのが封印されてる。またはされてたってことが」

石版曰く、この地に封ず。この遺跡に『破壊の翼』が封印されているか、されていたということになる。

破壊の翼とは何？

英雄とは誰？

終焉の時は何時？

一つの意思って？

何もわからない。わかったのは封印された事実のみ。

だが、それだけでも大きな情報で、ここに来た意味があった。特にアリスには

「じゃあさ、封印に関係してそうな部屋行くか？一番でかい柱の所」

「ですね。立ってもしかたないですし」

「あっ！まってよふたりとも！まってってばぁ～」

一番大きな柱。それは、六角形の柱であり、ＪＺＡ－０８０と書か

れた柱

勇人を先頭に、そこへ向かう、天空にぽっかりと穴が開き、蜘蛛が待っているその部屋へ

次回へつづく・・・・・・

第００８話　『前兆』

「確かここだな、一番大きな柱の部屋は」

「六角形の柱だよね」

「おぉ。ＪＺＡ－０８０って文字もある」

「にゃるほどぉ。」

この部屋に入るのは二度目で、アリスへの怒りが芽生えた場所でもあった。

まさか、再度訪れることになるとは思っていなかったんだが

大発見だとか、すごいだとか言われたらこないわけには行かない。

本当に大発見なのであれば、自分はそれの第一発見者であるわけで

ここに来ることは、後々のアドバンテージとなるのは目に見えているわけで、あるわけで

「あれ?何かおかしくない?部屋の中明るいよ」

「ほんとですね。勇人さんが来たときはどうでした。」

「俺が来たときは暗かった。ライトみたいなものもなかったはずだが・・・」

「じゃあ、さっきつけて来てたやつかなぁ？」

「アリスも気づいてたのか？」

殺気も無く。気配が大漏れの追跡者。それの存在にアリスも気づいていたようだ

話を聞く限り、同じように素人だと思ったらしく、レナに任せておけばいいと判断したらしい

「いきなり気配消えたし・・・追跡やめたと思ってたんだが」

「私もですね・・・気配出していたのはわざとだったんでしょうか」

目の前のわざとらしい変化。扉から挿す明るい光は、俺が来たときには無かったはずで

立ち去るときも無かったはずだ。この洞窟内で明かりといえば、自分が出した魔法の明かりでしかなかったわけで

この変化は先ほどの追跡者がいる可能性を十分に秘めていた。

不審者がいるかも知れない、だが部屋に入らないと何も進まない。

俺も男だ、先陣を切って先にはいるぐらいの勇気はあるし、プライドもある。

この中では戦闘力が一番低い俺が、先に行くという矛盾は心の内に秘めておいて

闘気を全身に纏い、あらかじめ保険をかけて中に入る。
そこには、予想外の光景が広がっており、思わず「そんなばかな」と典型的な台詞を吐いてしまった。

「どしたの？」

「不審者は居なかったが、柱が・・・柱じゃない」

「えっ？言ってる意味がわかんにゃいんだけど」

「そのままだ、柱だったものが柱じゃなくなってる」

「へ？」

説明してやったが、説明は説明になっていなかったようで
アリスの頭の上には『？』マークが浮かんでいる。

俺は手で部屋に入るよう促して、アリスを部屋の中に招きいれてやる
そのときのアリスは、まだ頭の上に『？』マークを浮かべていたが
警戒を忘れていないようで、目に見えるほどの強力な魔力の障壁が張られていた。

レナも同様で、強力な障壁を張り、相変わらずの闘気の光を放ちながら、アリスと並んで部屋に入ってゆく

「あれ？柱・・・ほんとになくなってる」

「不審者も、居ませんね。」

「うん、しかも天井に穴開いてるし」

俺から奪った記憶で、この部屋の状況を把握したアリスだったが

まだ頭の上には？マークを浮かべている

アリスから俺の記憶を譲り受けていたレナも同様に頭の上には『？』マークだ

ただの黒い六角形の柱だったはずの物が

綺麗に六等分されていれば、だれだって『？』マークを浮かべてしまう

それほどに、奇抜な変化で予想していなかった変化。

まったく意味がわからない。

「なにがあったんだ・・・もしかして俺のドロップキックのせいか？」

「うーん、それは違うとは思うけど」

「ですが、勇人さんが以前にここを訪れたことによって、起こった可能性は否定できませんが」

「結局は俺のせいか？」

「かも？」

六等分された柱は、厚みが５センチほど。

全てをあわせてやれば、中に空間が出来上がる

それを蹴ったところで、この柱にダメージがあるようにも思えない

だが、天にあいた大穴は、柱を中心としてなりたっており

柱からの何かで、大穴を空けたことは明確である。

この変化を与えた犯人が、俺である可能性はかなり高かった。

「ねぇレナ」

「はい」

「この穴かなり深いけど、レナなら空けれる？」

「やってみないとわかりませんが、ちょっと難しそうですね」

「だよねぇ、私も穴は空けれるかもだけど、こんなに綺麗には無理だよ」

「じゃあ、人間以外が？」

「かも・・・光線とかぁ？」

次の部屋行くか？そう提案しようとしていた時だった。

後ろから足音が聞こえだす、いままでの追跡者の気配ではない別の者の足音が

槍を背中に突き立てられ、肉をえぐられていうような感覚。そんな殺気を向けられる。

冷や汗と油汗が滲みでて、体中に危険信号がはしる。振り向けない。恐ろしい。

振り向いた瞬間。目が合うだけで殺される。そんな光景が脳裏に浮かび振り向くことができない。

アリスとレナも同じで、二人の額には冷や汗がにじみでて、臨戦態勢へ

アリスは、全身から魔力を出し、体全体をさらに強力な障壁で守らせる。

その魔力はやがて魔力の鎧となる。右手にはすでに高度炎魔法の詠唱を終えた炎が握られている。

レナは、右手を剣にかけ、全身から発せられていた光は

両手両足から発せられるようになっていた。集中させたせいか、光の鋭さは、先ほどの光度を軽く超えている。

魔物と闘うときとはまったく違う表情で、二人とも完全な本気だということが伺える。

俺にはどうにも出来ない世界。干渉してはいけない世界が目の前にあることを理解させられた。

「あんたたちが封印解いちゃったんだぁ・・・どうしてくれんの？」

一言一言に、竜族以上の殺気と迫力が込められている。

声は幼い女の声。それなのに、それなのに。

耳元で、大きな声でしゃべられているようなそんな感覚

攻撃されたら間違いなく死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

頭の中が真っ白になり、逃げること、生き延びることだけに脳の力を全て注ぐ

「ねぇ・・・どうしてくれんのよぉ」

台詞を全て言い終わるのと同時に、右横にいた金髪の少女が残像だけを残して消える。

それは、勇人に追える速さではなく。完全に消えたと思える速度だった。

「あら？向かってくるんだ。しらないよ。どうなっても」

振り向き、その両目に焼き付けた新参者の姿は、かなり小さな少女であった。

次回へつづく・・・

第００９話　『斬撃』

目の前に写った人物それはただの少女だった。

大きな釣り目は笑みを浮かべるかのように細くなっており

白い下地に健康的な色で添えられた唇は少しつりあがっているためか

少し笑っているようにみえる。

髪は赤色のショートカットで、少女のイメージにピッタリ

髪染めで染めたような色ではなく、もとからその色だったと思えるほどに髪全体が真紅色だ。

服装は、まさに格闘化といった風貌の服。へそだしルックで、胸を隠している服はかなり生地が少ない。

適度に膨らんだその箇所を見ることで、女だということを明確にさせていた。

へそだけではなく、太ももも見せている。かなり機動性を重視していると見た。

武器の様なものは持っていない、強いて言えば拳にはめられたブローブ。

皮を生地として、関節以外のあらゆる部分に、魔法金属特有の光を放つ金属があしらわれている。

第二関節より先は皮も金属もなく、細い指があらわになっていた。

こんな可憐な少女が、身も凍るような、死を予期させる殺気を放っているのだ。

まさかと思ったが、殺気の出所は間違いなくその少女で、強力すぎる殺気のためか直視することができなかった。

そんなすごすぎる少女に向かうは、金髪のポニーテールの美少女。

手足から閃光を放ち、会話の一瞬のスキを付いて俺には見えない速度で大きな剣を振りかざす。

剣筋は見えなかったが、地面が深く激しくえぐられていることから、下からの斬撃だということがわかる。

瞬きをする間も与えずに、赤髪の少女の体はかなりの速度で吹き飛ばされた

斜め上方向へ飛ばされ、一枚、二枚、次々と壁を破っていく

何枚の壁を破っただろうか、かなりの遠い所で瓦礫の中に埋まってしまった。

「やったか？」

「・・・まだ・・・・・・ですね」

暫くの間沈黙が続く、３人は警戒をやめず瓦礫の先を見つめている。

「やって、くれたわねぇ。」

小さな、とても小さな台詞が聞こえる。

「まさか、あんたがこんなに強いとは思ってなかったわ。油断禁物ね」

瓦礫の山がガラガラと音を立てて崩れ、中から小さな少女の肢体があらわれた。

髪の上には瓦礫の破片が、白い肌は砂で汚れ、服もところどころ破れていた。

肩の部分はもともとそういうデザインの服だったかの様にへ綺麗に破れて無くなっている。

そこには目立つ大きな文字で『ＣＰ３』と書かれていた。

「うわっ・・・無傷、だね」

「ですね」

そう、完全に無傷としかいえない状況。これは想像もしていなかった状況だった。

レナの渾身の一撃を喰らってもなお無傷なのだ。正直言葉を失ってしまう。

俺だったら今の一撃で１００回ぐらいは死ねるんではなかろうか。

「しかも、最悪の状況だよぉ、肩にＣＰ３って書いてあるよね・・・
あれが本物なら闘ったら私たち・・・」

肩のＣＰ３の文字、ここに来る前にアリスから聞いた情報によると
それは古代兵器の開発コードだそうだ。人型の兵器だとは聞かされていたが

ここまで精巧だとは思っていなかった。完全に人間にしか見えない。
だが、少し不可解なことがある。なぜなら、その兵器たちははるか昔に破壊されているはずだからだ
なのに、なぜ目の前にそれらしき物が存在するのだろうか。わからない。が、この状況は間違いなくやばい。

そんなことを考えているときだった。ふと、先ほどの石版の文字が頭の中に浮かんでくる。

『破壊の翼　英雄の手により　この地に封ず　封印解くべからず
新たな世界を望まなければ
始まり　終わり　それは隣合わせで　とても近く　遠い存在　終焉の時は今では無い
悠久の時の中で　始まりと終わりは一つの意思に』

という言葉が。

封印。もしかして、破壊されたということは事実では無く。封印されていただけだとしたら

その封印がもし、解けたのだとしたら

ありえる。

俺はこの眼で、しかとＣＰ３と書かれた柱を確認している。

それは三角形の柱だったと記憶しているが、形なんかどうでもいい。

この部屋の柱の変形から考えると、そのＣＰ３とかかれた柱も同じような状況になっていても不思議ではない。

ということは？ここのＪＺＡ－０８０も封印されていて、それが解かれたからこんな形になってるということか

他の柱は？全部で３５個の柱があったはずだ。それの全ての封印が解けたのか？

すべての兵器の能力がこの目の前の少女のような高さだったら・・・

終焉の時が・・・・・可能性はある。

レナはこの世界でもかなりの猛者だ。それが敵わないとなると

目の前の標的の強さは神がかった強さに違いない。現にレナの一撃で無傷なのだ。

そんな兵器が、３５体もいるのだとしたら、

その動作目的が世界の破壊だったら、とめられる人間はかぎられてくる。

残念ながら、俺はその中の数には入らない。目の前の状況に震えるしかないのだ。

ここは、逃げるが得策。だが、どうやって逃げる。

かなり遠くへ吹き飛ばされていたとしても、瞬きをしている間に目の前まで来るだろう。

逃げ方。やはり道はひとつしかない。一瞬の間に遠くへ良く方法。

「アリス。逃げるぞ」

「だね。でもどうやって」

「お前の時空転移だよ。」

「あっ！なるほどぉ」

時空転移。それしか逃げる方法は無かった。

一瞬にして別の場所へ、なんなら時空の狭間に行くのでもいい

これが確実で、間違いない方法。少しの間時間を稼げば、時空の扉は簡単に開くのだ

「あ～あ、もう服が台無しじゃない。どうしてくれんの？

しかもいきなり切りかかってくるなんて、バカとしか言いようがないわね。

あたしはあんたたちに危害を加えるつもりは無かったんだけどなぁ。話をしたかっただけなのに

けど、こんなことされたらただでは置けないわよね。だから予定変更だよ♪」

ニヤリと口を吊り上げる。のそのそとゆっくり、確実にこちらに向かってくる。殺気をさらに化物じみたものにして

「どれだけ時間を稼げばいい？」

「う～んと、とりあえずは時空内に逃げるから、１５秒だね。」

「早いな。」

この調子で向かってくるなら、逃げる時間は稼げそうだ。

なんとか死なずにすむ。そう思っていた。思っていたのだが・・・

ドスン。

音とともに体に衝撃が走る。

それと同時に腹部に妙な暖かさを感じはじめる。

何があった？周りを見渡しても何の変化もない。

赤毛の少女ものそのそと同じような速度で歩いてきているし
アリスは時空の扉を開けるため詠唱中、レナは赤毛の少女を凝視している。

「あら、人間って意外と脆いんですのね」

新たな声が背後から聞こえだす。か細いおとなしそうな声が

「さよなら・・・」

次回へつづく・・・

第０１０話　『深紅』

さよなら。

その言の葉を発した人物は、まさに俺の真後ろに存在していた。

おしとやかさがにじみ出る風貌の少女。話の語尾には、ですわなどといいそうな雰囲気をかもし出していた。

今のこの現状。それがなければよかったのだとしみじみ思う。それぐらいかわいいのだ。

この現状を見れば誰だってこの少女がおとなしい性格で、可憐だとは絶対思わない。

その状況の当事者。少女と俺。少女にいきなり触られていた。というか抉られていた。

フリルがふんだんにあしらわれた肘までの服の袖から真っ白な腕が伸び

まるでグラデーションを描けたかのように、先端にいくほどに赤く染まっていく、赤く染めた染料は俺の血。

水色のフリルつきワンピースも赤い斑点があしらわれており、いままで見たことのないようなデザインになっている。

床にも同じように赤い斑模様が描かれていて床とおそろい衣装に変化していた。

俺の右脇腹だった部分も床に点在していた。

これだけの怪我だ。気絶してもしょうがないほどの激痛が走るはずだ。

だが、不思議と痛みは感じない。絶え間なく流れ続ける深紅の滝。

それが俺へ絶対的な死を認識させるには事足りる材料ではあった。

目を瞑ると過去の記憶が蘇る。走馬燈って本当にあるんだなぁと関心させられた。

学校での牛乳爆弾事件、離婚寸前ギリギリ事件、似非秘法事件など印象深い内容から

日常の他愛もないギャグや、好きな本のことなどピンからキリまでの内容が

スライドショーのように写しだされ、楽しい。悲しい。いろいろな感情が渦巻いていた。

目を開くが視界もすでに狭まっており、何が目に映っているかも認識ができない。

レナやアリス。後ろの少女が何かしゃべっているようだが、それもすでに認識できなかった。

痛みを感じないためか、睡魔が襲ってくるような感覚。

それは絶対的な力を持っておりどうやっても抗うことはできない。

学校での授業中幾度も睡魔と闘い勝利してきたが、今度の睡魔はチート級の強さだ。

その絶対的な強さによって俺の連勝記録がとまってしまうのが悔しかった。

睡魔ではないんだろうな。新たな戦跡表を作らないといけないなぁ。名前はどうするか・・・

暫く考えた。時間に余裕もない。だが決まった。

これで決定だ。０勝１敗。その戦跡表のタイトルは・・・

『死』だな。

次回へつづく・・・

第０１１話　『地獄？』

俺は、激しい腹部の痛みによって目を開いた。

開いたのだが、目に映るものは漆黒の闇であり、開いたかどうかはっきりとはわからない。

わかったことはあの世でも痛みって感じるということ。

幽霊みたいになるわけだから、痛みなんてないもんだと思ってたが、そんな甘くはなかったみたいだ。

青髪の少女によって抉られた脇腹、そこが幾度にもわたり抉られる感覚。それが永続的に発生している。

痛い。痛すぎる。まさかあの世に言ってもなお傷が残っているとは思わなかった。

魂が浄化されるまで、この痛みと共存しなければならないのだろうか。そう思うとぞっとする。

目が見えないため脇腹の状況を確認するべく、右腕を動かそうとしてみた。

だが、右腕はピクリとも動かない。左腕も同様でさらには両足も同じような状態に陥っている。

脳から与える情報は、ある部分でシャットアウトされていて受信不能にでもなっているようだ。

口は動くような感覚はあったのだが、声も発することができないし、視認も出来ていないので

本当に動いているかどうかはわからない。

激しかった腹部の痛みがさらに増し、激痛に顔を歪めたいところなのだが

動かすことはできず。完全に体は自由を失っている事がわかる。

こんな状態なんだ。おそらくここは地獄なんだろう。

いままで悪いことをしたつもりは無いが、善意的な行動を取ったことがあるかといえば無い。

プラスマイナス0なら地獄なのか?それとも知らない間に悪いことをしていたのだろうか

激しい痛みに耐えながらも、過去を洗いざらい考え出してみた

ひとつ思い当たる事がみつかった。

－0．1程度の評価にしかならなさそうだが

妹が楽しみにしていたおやつを取ったこと。それが唯一俺の認識している悪だ。

その程度で、いや妹からすれば、その程度ではなかったのかもしれない

朝6時から並んでやっと手に入れたケーキだっていってたし
けど、全部食ったわけじゃないんだぞ。ちょっとつまみ食いしただけだ。1／3ほど

良く考えたとしても俺の中ではその程度であって、それ以上でもそれ以下でもなかった。

こんなことで地獄に落ちるとは、よっぽどの善人じゃないと天国には行けないんだろうな。

天国行きたかったなぁ。

妙なこじつけで納得してしまった俺は、この痛みといかに共存するかを思案し始める。

これからの地獄ライフで、この痛みとも仲良くしていかなくてはならなさそうだからだ。

痛みを快感に変えてみる・・・・・・どっちかというとSだから無理

じゃぁ、痛みを無視・・・・・・できるわきゃない

地獄で医者を探してみる・・・・・・いるのか？というか動けるのか俺は

このまま動けないなら俺は死んだほうがマシだ。そう思いかけたが死んでいることを思い出した。

じゃあどうしろっていうんだよ。どうしようもないのか？

「よし！これで大丈夫だ！！」

途方に暮れていた俺のすぐ近く、おそらく右側から男の声がした。

聴いたことは無い声。かといって悪意のある声でもなさそうだ

誰だ？鬼か？悪魔か？それにしてはやさしそうな声だったが

大丈夫ってなんのことだ。俺かそれとも声の主であるそいつか

いろいろ考えている最中もがさがさ音がなりつづける。

不気味で仕方が無い。しかし何も出来ない

ここで何かされたら一貫の終わりだな。死んでるから関係ないか・・・

そう思っていただが、関係大有りだったようだ。

俺の首筋につめたい何か、おそらく指だと思うがそれが接触してきたのである

鬼か悪魔が俺を食いにきたのか。短い地獄ライフだったなぁ

抵抗も出来ないしこの激痛からおさらばできるのであれば、それはそれでいいかも知れない

良いかも知れない・・・が何か違和感を感じてならない。

・・・・・・・

わかった。

脇腹からの激しすぎる痛みが無くなっている。

正確には和らいでいっている。徐々に、だが確実に

どういうことだ説明してくれ。そこの人よ

なんで痛みが無くなっていく。

大丈夫って俺のことだったのか？

横にいる男は実は医者で、俺を治療してくれてたとかそんなことか？

いや、違うな。

体が動かない説明がつかないし

目の前が真っ暗なことも説明がつかない。

なにもかもがわからない。

もしかして俺、死んでなかったりするのか？

死んでないなら大ラッキーだな

死んでたとしても、痛みが無くなってそれはそれでラッキーだ

ちょっとはこれからの人生?に希望が見えてきた。そんなことを考える余裕も出てきた。

余裕が出てきたためか、首筋に触れられた指らしきものもあまり気にはなっていなかった

正確には気にしないように努力していたのだが

添えられていた指らしきものが離れた瞬間、チクッっと小さな刺激が首筋から発せられる。

何か注射みたいな物をされているらしい。不純物的なものが注入される感覚がわかる。

なんかやばそうな雰囲気を醸し出している。注入が終わり針と思われるものが抜かれた。

それと同時に突如襲ってくる

その眠気が、死を覚悟したあの時と類似していて少し恐ろしい。

やっぱり悪魔か何かか?

わからないわからないが、眠気には抗えず眠る以外に他は無かった。

眠っている場合ではないんだが、どうしようもない

今度さめたときは、目の前は雲ひとつない青空であってほしい

そんなことを思いながら、眠気大魔王の力に屈し、眠りについてしまった。

次回へつづく・・・

第０１２話　『生の代償』

小鳥がさえずる声。

包丁が使われるトントンという音。

味噌のいい香りと焼き魚の匂い。

さらには、まぶしい日差しと

朝としては、最高の目覚めが俺を待っていた。

目を開くと視界は良好で、見知らぬ天井が写っていたが、見えることに感動を覚えた。

死んでなかったんだな。

己の運と、生命力に感謝して生をかみ締める。ほんとに良かった。

これで、台所に裸エプロンのかわいい女の子でも立ってれば、最高のシチュエーションなのだが

そんな淡い期待をしながら、包丁の音が聞こえる方向をみてみた。

人物自体は視認できないが、朝日によって作られた影によって女性だと認識することができる

エプロンもしているためか、へんな妄想が頭に浮かんできた。

「よぉ少年！生き返った見たいだな。」

視界が真っ暗だったときに聴いた声だ。

方向は俺の右側。台所からは反対の方向。

どんな女性がどんな格好で出てくるのか気にはなっていたが

妄想どおりの女性が出てくるわけもないだろうから。妄想を一時中断し男の声の方をみることにする。

そこには、大柄でぼさぼさ頭の男がコーヒーを片手に、高級そうな椅子に腰掛けていた。

こいつが俺を治してくれたんだろうが、どうみても医者には見えない。

普通なら医者の服は白衣であって、髪も短くて然るべきだと思うがその男の風貌はまったくの逆で、頭はシャンプーしているかわからないぐらいのぼさぼさのまま

服も白衣ではなく真逆の黒衣、指も太く、とても繊細な作業なんて出来そうにはない。

こんなやつが俺を治したってことか？信じられない

だが、現に傷は塞がっており、傷跡ひとつ見当たらないし、俺は生きている。

とりあえず、感謝の言葉を向けるべきなのだろう。

簡単ではあるが、治してくれてありがとうと俺は言った。

「ん？ありがとうって、逆に俺がありがとうだ。試したかったことができた。

少年が生き返ったのはただの副産物であって、実験が成功した証でしかない。

俺は感謝してるんだぜ。丁度良いタイミングで少年が死んでくれてたまたまミリアがアリスのファンだったってこともあるんだが死んでくれたこと自体には感謝しないとな！ありがとうよ！少年」

と逆にありがとうと言われてしまった。

何がなんだかさっぱりわからない。

死んでくれてってことは俺はやっぱり死んだことになるわけだ。けど生きてる。

目の前の男が直してくれたということも会話の内容でわかる。

俺が死んだことによって何かの実験が成功したこともわかった。

何の実験だよ。

「あぁ実験の内容？知りたいの？知りたいよねぇ」

当たり前だ。生き返ったこと自体に感謝はしなければならないが勝手に実験台にされたことはどうも不に落ちない。

「ん～まぁ簡単な実験なんだがな。なかなか実験台がなくてな。まずだなぁ、時空法則をキャンセルして、時空素を逆回転させてだな。

約１２０００Ｔほど戻ったところで氷結して固定。

更にエイドの法則とロレンツ技術を応用して、

ナノサイズの魔動器具の中に永続唱魔をぶちこんで、少年の中に注入した。

っとそんなとこだ。」

内容がさっぱりなんだが。ほとんどの単語が知らない単語だ。

知っているのは魔道器具ぐらいであって。エイドの法則とかロレンツ技術とかはさっぱりわからない

「あぁ～やっぱりわからないよなぁ

つまりは、時間を戻して少年の体を生きてるときの状態にしてそれだけだと、すぐ時間が再生されて死んじゃうから

魔道器具使って、それを維持してると。それだけだ。
維持できたのは少年の体質のおかげでもあるんだがな。」
ん?ということは・・・俺自体は時間止められてるってことか?
「ん~ちょっと違うな。短い時間の中で再生と逆戻しを繰返してるってとこか
喜べよ少年!!おかげで少年は不老不死になった♪」
は?不老不死だと・・・確かに聞いた説明だけだと、それっぽいんだが
何のリスクもなしで出来る内容でもない。手放しで喜ぶわけにはいかなさそうだな。
「おぉ!さっしがいいねぇ。そういう子は好きだな。俺は」
おっさんに好きだといわれても何もうれしく無い。リスクってなんだ?
「そんな険しい顔するなよ。気をつけてれば死ぬわけじゃない。
だけど、ちょっとだけ金がかかる体にはなったかな
ん~ちょっとってこともないか・・・・・」
金か。貧乏な俺にとってある意味最悪な状態かもしれない。

今は無一文であるはずで、この治療費も払えない状態なわけで
というか金がかかるってなんの事だ？
「魔道器具っての注入したって言ったよな
それの起動のために必要なものが魔力で
常に唱えておく必要があるわけ。で使う魔力は少年の持ってるやつね
だから、少年がどんな状態においても、魔力がちょっとづつ無くなってく
しかも、常に減り続けてるから寝ても回復しない」
ちょっと待て、だったら魔力が尽きたら
時間が再生されて俺死ぬんじゃないか？
「そう、そこでだ！！俺様特製の魔力水を飲んで貰うわけだ
それが一本１５０ゾル。安いだろ？
これを飲めば一日に必要な魔道器具の消費魔力が補えるって寸法だ」
なるほど。そういう商売なわけだなこのおっさんは
命には変えられないし、魔力水を永続的に買い続けなければならんわけだ

命は助かったものの。今後の壁が見つかった。一日１５０ゾルは稼がないとだめなわけか

一本だけでみれば確かに安いんだがな。毎日だとかなりきついぞ。どうするかな

いろいろ思考を巡らせて見る。魔物狩りだと不安定だし。ギルドの依頼も収入が不安定だ。

定職に着いたほうがいいのかも知れない。とりあえず学校を中退することだけは決めた。

次回へつづく・・・

第０１３話　『冥土？いやメイド』

「そうだ少年。アリス達には連絡しなくていいんかい？」

そうだ。アリス達だ。あいつら生きてるのか？

「アリスは少年と違って傷ひとつ無かった。レナは少しだけ怪我してたが、治癒魔法で何とかなるレベルだ。

今はピンピンしてるはずだから、普通に仕事してると思うけどな。」

生きていてくれたのか。本当に良かった。

あの状況でどう助かったのかはわからないが、とりあえず無事だということで自分のことかのように安心した。

でもどうやってあの状況から助かったんだ？絶対絶命の状況だったと思うんだが

実際俺も助かったわけだし、なんとかしたんだとは思うんだが、レナがあの二人をなんとかしたのだろうか？

「詳しくは聞いてないが、たまたま居合わせたミリアが何とかしたみたいよ。

アリスとレナ。死体の少年を連れてここへ帰ってきたんだ。少年の死に顔には正直びっくりしたがな。

あっ！！写真でもとっときゃ良かったか！！失敗、失敗」

自分の死に顔。そんなんみたいと思わない。仮に写真撮ってたとしても見せて貰おうとは思わないだろうな。

とりあえず、アリスやレナが心配してるだろうから連絡がてら店に向かうことにでもするか

それからあの人間兵器の二人。あいつらをどうするか話合う必要もあるだろうしな。世界がどうかとかなりそうだし

いろいろやることはありそうだ。体のことも含めて。

そう言えばおっさんの名前を聞いてなかった。今後深い付き合いにもなりそうだしなんて名前なんだ?

「俺か、俺の名前はブランジュだっ!!よぉく覚えて置くように

それからさっきからちょくちょく名前が出てるミリア。それが今あそこで料理してる俺の助手だ。

もうちょっとしたら朝飯できるだろうから。アリスんとこ行くなら食ってから行けな。」

このおっさんの名前はブランジュで、ここへ連れて来てくれたのはミリアさんか

料理してくれてるって行ってたな。影から想像して美人っぽいし。

助手だってことだから、魔法水買いに来るときおっさんだけを見ることは無いわけか

ここに来るための楽しみとなってくれればいうことはない

とりあえずお礼だけは言っておかないといけないな。助手してくれてある意味助かった

へんな妄想もしてしまったことだし。これは勝手に俺の中で謝っておこう。

とりあえず、飯食って腹ごしらえして、今後のことを考えて

それからアリスたちと相談して、どうするべきか考えるとするか

「おぉそうだ少年よ！！アリス達には少年のこと墓作って埋めとくって言っといたから

リアクション十分に楽しんでこいよ！！！！！」

やはり。そんな気がした。さっきからおっさんはニヤニヤしてたんだ。

何か裏はあると思ってたが、そんなことだったか。

一瞬でいろいろネタが浮かぶ、確かに面白そうだ。

「ご飯できましたよ♪」

奥からかわいい声が聞こえる。ミリアさんの声だ。予想と違い若い声だ。

「飯だっ！！さぁ少年食えるだけ食え！！」

お言葉に甘えてテーブルに座る、メニューは白いご飯に味噌汁

大根おろしが添えられた秋刀魚とまさに王道の朝飯だった。

少し想像と違ったのはミリアさんだったが、これはこれでニーズのある風貌である。

助手ってきいてたから、大学生以上の女性だと思っていたんだが筋違いだったようで

アリスに勝るとも劣らない幼さだった。年齢は、１２～１４ぐらいに見える。

アリスと違うところは胸の大きさで、あるのか無いのかわからないぐらいだ。

しかもエプロンだけかと思いきや、メイドの衣装に身を包んでいた。

おっさんの趣味だろうか・・・・・・

「違う。違う。これはミリアが勝手に買ってきたやつで。俺には断じてそんな趣味はない。」

それならいいんだが、このおっさんの風貌でメイド好きだったらかなり引くぞ。

「だから違うって、なぁミリアなんか言ってやってくれよ。」

「あっはい！！この服は私の趣味なのですよ！！料理と言えばメイドですよね♪」

っと小さい少女は言ってのけた。たしかに間違って無い気はするが。一般家庭でといわれると間違ってる気がするぞ。

萌え好きにはたまらないんだろうが、俺はそんな趣味ないからな。こんど俺の友人を連れてきてやろう。かなり喜ぶと思う

そんな趣味の無い俺は、少女を見るのをやめて目の前の真っ白い米を口に運ぶことにする。

次に味噌汁。豆腐とワカメ、揚げとスタンダードな味噌汁だがなかなかうまい。

秋刀魚の焼き加減も丁度よく大根おろしの辛さも丁度良かった。

「どうです？おいしいですか？」

これは、おいしいという他無い。非の打ち所のない完璧な朝ごはんである。

生き返って早々こんなおいしいご飯にありつけるとは俺もなかなか幸せなのかもしれないな。

「おいしいですか！おかわり沢山ありますから！じゃんじゃん言ってください♪」

そいうと台所の法へちょこちょこと小走りで走っていった。

おっさんを見るとなぜか遠い目をしている。なんでだ。

「うんしょ。うんしょ。なかなか重いですね。」

次に出てきたとき。それは想像もしていなかった状況だった

さきほどのおっさんの表情も納得できる光景。いつもこんな感じなんだろう

大きな皿。直径５０ｃｍほどの皿に秋刀魚が数えきれないほど乗っていた。

それを俺が食ってるテーブルの上にズドンと置く。皿なのにズドンだ。ドカンでもいい。

「今日目覚めるって聞いてたので、昨日沢山捕ってきたのですよ！！」

目の前にある秋刀魚タワー。数えたら何匹いるのだろうか。ざっと数えるだけでも１００匹は超えている。

「さぁ～じゃんじゃんくえよしょぉねん。せっかくミリアがつくってくれたんだからなぁ」

棒読みで気持ちの入ってない台詞を吐いてくる。

ミリアさんはミリアさんでテーブルの反対側へ座り、両肘をついて俺を見つめて、

端の位置と皿の位置を確認、秋刀魚の補給はいつでもＯＫ迅速にっ

て感じだ。

現に食い終わって骨と頭だけになった秋刀魚は存在意義を無くし、すぐに新しい秋刀魚に入れ替わる。

２皿、３皿と食べていくが、ミリアさんの様子と秋刀魚タワーを見る限りは終わりを迎えることはできなさそうだ。

ミリアさんはこのままわんこそばスタイルを突き通すつもりのようでわんこそばのように皿に蓋をして止めることは、蓋が無いために出来そうにない

俺の胃袋がもつ間は、この状態が続きそうだ。せいぜいあと１０尾ぐらいだとは思うが・・・

このままだと今日新たに俺の戦跡表にタイトルが刻まれることになると思われる。

『一食最大秋刀魚何匹?』ってのが

次回へつづく・・・

第０１４話　『銀髪の』

「いってらっしゃいです♪」

笑顔で俺を送り出してくれるミリアさん。

結局俺は秋刀魚タワーを食べきることはできずに

記録１８でストップしてしまった。これはこれでかなりがんばったほうだとは思うんだが。

まだまだあるのに・・・っとミリアさんは半分涙目になっていた。

食いきれると思ってたんだろうか

油がかなり乗っていた秋刀魚だったために、満腹感と油感が俺の胃袋の中に渦巻いている。

正直吐いてしまったほうが楽だと思うが、そうそう都合よくは吐けないもんだと思い知らされた。

残ってしまった秋刀魚郡はアリス達への土産だとか言って、袋に包んで渡された。

運よく同じアネツィア内だったために渡されたのだが、手土産にしては重いし相応しく無いなとは思う。

捨ててしまうのも勿体無いので持って行くことにはするが、アリス達に渡したあとはどうなるかわからない。

とりあえずは、この重い荷物をあいつに渡せば俺の使命は終わるので早々に渡してやりたかった。なんせ重いんでな

じゃあ行ってくる。それだけ行ってブランジュ宅を後にする。

同じアネツィア内だと言っても、ブランジュ宅とアリス店ではかなりの距離があった。

ざっと５ｋｍはあり、それなりの時間はかかるのだ。

車とかあればいいんだがあいにくブランジュは持ってないらしい

持っていたとしてもあの性格から送ってくれそうにも無さそうで、意味の無い期待はしないことにする。

ちょっと歩いてみたが俺の体自体に違和感は無い、それよりか快調に動きすぎて以前より良くなっているぐらいだった。

この体はおっさん曰く、闘気は使っても問題ないが魔力はなるべく使わない方がいいと言っていた。

理論状使っても問題ないんだが、魔力が尽きると時間が再生されてしまうために、乱発はするべきではないとのことである。

使える魔術自体は少ないし、高位魔術なんかは今のところ使えないので尽きる心配は無さそうだったが

保険としてこれからは、低級魔法ですら使わないようにしようと心に決めた。死にたくないしな。

使ったらペナルティとして食事抜きとかそんなの考えてみるか・・・
しょせんは俺ルールだけど、ないよりはマシだ。

当たり前だが、アネツィアの町自体はなにも変わっておらず以前のままで

途中ですれ違う人々も、俺に不快な視線を向けることはなく、対応も以前のままだったので安心した。

見慣れた景色を眺めながら、暫く歩きこの町のシンボルである噴水のところまで来る。アリスの店はすぐそこである。

５０メートル以上上空から落ちてくる水の塊。それは途中で４本の滝となり貯水部まで落ちてきている。

他にもあらゆる場所から落ちてきて、メインの柱、噴水の基礎となっている部分は水で隠され見ることはできない。

メインの４本の滝からは毎秒１ｔ以上の水が落ちてきているというから、滝のサイズの規模が数字でわかるだろう。

その目の前、一際大きな水しぶきを上げる部分に、妙に気になる少女が立っていた。他の人と雰囲気が違う。

滝からの水しぶきを完全に受け、服は濡れているし、髪も濡れていてずぶぬれ状態

噴水の頂点を凝視して、周りのことは何も見えていないような状態で、前や後ろで子供たちがはしゃいでいるが見向きもしない。

印象的なのは長い髪で、銀髪のツインテールだ。

床につく寸前の長さの髪の先からは、ぽたぽたと水滴が落ちているから結構な間そこに居たことがわかる。

生地の薄い白色のフリル付きのドレスは透き通っていて、少し目のやり場に困る仕様になっていたが

俺も男なのでその姿をしっかり目に焼きつけ、ノーブラだという情報を手に入れる。

透き通っている服は背中がむき出しのデザインで、そこから見える濡れた肌に妙な色っぽさがあって

少女が正面を向いたらどんな状態か、もしかしたら・・・などと少し現実的な妄想をさせた。

秋刀魚を入れた袋を持っている右手が、秋刀魚の重さで食い込んできたため、左手に持ち替え下を向く

再度少女を確認すると、さきほどまで直立不動だったのだが、なぜかこちらを向いていた。

残念ながら、完全にこちらを向いたわけではなく、半身だけこちらへ向け、顔をこちらに向けているため

期待していた妄想どおりの光景は、見ることはできなかったが、ふと目が合う。

目は金色の瞳で吸い込まれそうな魅力がある。なぜか心拍数が上が

ってきた。

鏡で見ないとわからないが、おそらくは頬も赤くなっているだろう。
目を逸らすと負けた気がするので

暫く見つめ続けていると、少女はニコッと笑みを浮かべ再度噴水の
頂点を見つめだした。

不思議な感覚にとらわれた俺は、妙な少女の濡れた姿を目に焼きつ
け、本来の目的をはたすことにする。

もうちょっとでアリスの家だし、急ごう。アリス達のリアクション
も楽しまないとだめだしな。

次回へつづく・・・

第０１５話　『寝呼娘』

銀髪少女を横目に、俺はアリスの店へ向かう。

向かうといっても噴水の貯水部が見える範囲にある店のためにほとんど歩くことはない。

道中にクレープの屋台があり、お土産にでも買って行ってやろうかと思ったが

財布の中身は空っぽで、さすがに盗むわけにもいかず、秋刀魚以外の手土産は無しで店に向かう。

遠目でもわかるアリスの店は相変わらずピンク一色で、周りの店とは違う雰囲気を醸し出していた。

こんな店にもかかわらず、客は入り口から普通に入るし、普通に出てくる。しかも結構な量の客がとめどなく。

さすが、世界９大商人の店といったところだろう。年商とかちょっとしりたいな・・・相当な額だと思う。

あの年で、と考えると尊敬すべきなんだろうな、一応年上なんだし、敬語を使うべきかもしれない・・・いや、必要ないよな

なんせ長い付き合いだし、逆にぎこちなくなりそうだしな、うん、必要ない。

それよりか、どんなリアクションを取って俺を楽しませてくれるの

だろうか。楽しみでしょうがない。

せっかくだから、死人の立場を利用して無言で直立作戦を立てていた。

どうせ店のカウンターで眠そうにして睡魔と格闘中のはずだし

カウンターの前に直立不動していれば何かと面白いリアクションを取ってくれるはず

面白いのよりは嬉しいリアクションのほうがいいんだがな、たとえば生きてたんだ♪などといいつつ抱きついてきて、さらにはちょっと涙ぐんでくれるといい

ついでにあの豊満なマシュマロ二つを俺に押し付けてくれたりなんかしたら、もう言うことはない。至福のひと時を送れそうだ。

身長差でマシュマロの接触部分は、俺の大事なところになりそうなので、しゃがむべきか、直立しておくべきかは迷いどころだ。

レナに関しては、生きていてくれたんですねと言われ満面の笑みを期待したい。妙な含みのないちゃんとした笑顔をだ。

俺が死んでるのは確定していたはずだから、そんな期待は裏切られそうな気もするが、ちょっと楽しみである。

ピンク色の扉を開け、雰囲気がガラッと変わる店に入る。相変わらず怪しい雰囲気だ。

商品のラインナップは多く、店の目玉となっていた蒼龍の角はすでに売れていたようだ。

変わりに目玉商品として紅龍の角が置かれている。俺が死んでいる間に倒しに行ったのだろうか

レイアウトは蒼龍のときと同じで、商品の横には写真が置かれている。写真の奥に写っているのは確かに紅龍だった。

価格はおどろきの１２０００万ゾルで蒼龍のそれを超えていた。理由は明確で紅龍の方が倒しづらいため。

常時展開式の魔法障壁は蒼龍と同じで、純粋な破壊力をもって倒す必要がある。

皮膚の硬さは蒼龍より若干劣りはするのだが、紅龍というだけあって紅い鱗には灼熱の炎が纏っているのだという。

まずその炎を何とかしてから、蒼龍と同じように破壊力のみで倒すということらしい。俺には到底無理な作業だ。

レナの紅龍と戦う姿を想像しながら、いつものように寝ているであろうアリスのもとへ

案の定アリスはカウンターで自分の腕を枕にして机に倒れこんでいた。

睡魔には負けたようで寝息を立てて、ちょっとよだれも垂らしている。よだれがなければ可愛い寝顔なのだが。もったいない

寝言でうにゃぁとかそんにゃぁなどと言ってみたり、笑ってみたり、怒ってみたり、寝ているのに忙しそうだ。

どんな夢を見ているか想像もつかないが、かなりの表情変化が見て取れる。1分間で6種類ぐらいは見れたんではないだろうか

気持ちよく寝ているアリスを起こしてやるのも気が引けるが、ここは起こさないわけにはいかない。

左手に持っている秋刀魚は、すでに焼かれていていつだめになるかわからないし、なにより重い。

さっさと受け取って貰いたいし、このままこれを置いてかえるわけにもいかないので、そっと起こしてやることにしよう

なにがいいか・・・定番の鼻ティッシュ・・・・・・面白そうだな。俺のS心に小さな火がともりだした。

ちょうどポケットに入っていたティッシュをこより状にする。すこし妙な笑みを浮かべているだろうが

ここは奥のほうのアリス用カウンターのため、特殊な客以外はこっちにはこない、そのため一般客に侮蔑の目でみられることはので

周りの目を気にせず、アリスの右の鼻にこよりティッシュを投入。できるだけ奥に突っ込んでやる。

「あっ・・・あぁん。やっ・・・・あぁぁ」

妙な声を出してくるが、まだ起きようとしない。なかなか強情なや

つだ。

S心はともし火から炎へと進化を遂げる。ふっふっふっと変な笑い声も知らない間にでていた。我ながら気味が悪い。

だが、なかなか起きないので、右だけではなく左の鼻にもティッシュを投入してやる。見た目かなりの問題あり状態だ

問題顔の美少女アリス。写真を撮ってやりたいが、あいにくとカメラを持っていない。

「はぁぁ・・・ふっ・・・へあぁぁ」

両鼻にティッシュを挿されたアリスの声は鼻声で、フィルターがかかっているかのようだ。

片手で器用に両方のティッシュを動かしてやると、さらに淫らな声をだし、悶えてくる。

「あぁぁ・・・はぁぁ・・・はっ・・・はっ・・・くしゅん!!」

「うわっ!?」

「ふにゅぅ・・・・・・ふへへ。」

・・・鼻水が俺の手に付いた。最悪だ。しかもアリス起きてないし。

くしゃみしたのに起きないってどういうこと?最後捨て笑いみたいのもあったしなんで起きねぇんだよ。

手に付いた鼻水をティッシュでふき取り、だらしなく垂れてきているアリスの鼻水もふき取ってやる。

この程度ではアリスは起きないようで、新たな作戦が必要なようだ。

さてどうするかな。

次回へつづく・・・

第０１６話　『反応、レナ』

「アリス。そんなところで寝たら風邪を引きますよ。いま、毛布持っていきますね」

どう起こすか、そればっかり考えていた俺は、
意表を付かれてドキッとする。
奥からレナの声がした。しかもこっちにやってくるっぽい。

折角いろいろ考えていた作戦が狂ってしまった。
アリスを起こすどころか、レナに先に合ってしまうとは

アリスの反応のおかげで、俺のＳ心はかなりの業炎をたぎらせているというのに・・・残念だ。
緊急で作戦を練り直し、新たな作戦を練りだす。

決まった。

その名は、アリスを見に来た亡霊作戦。

アリスの前でアリスを見ながら虚ろな目でもしてよう。
時間も無いしそんなもんしか浮かばない
ベタだなぁとは思うが、ベタで十分だろう。

とりあえずは、近くにあったごみ箱に
アリス生産の鼻水ティッシュを投げ捨てて、カウンターの前に立つ。

暫くすると奥の方から金髪の少女が現れた。
怪我をしたと聞いていたが、横目で見た感じは完治している。よか

った。

俺は虚ろな目でアリスを見ることに徹しているため
視線を完全にレナに向けることはできなかったが
レナは俺を確認したはず、驚くというよりは
わざとらしく平常心を装っているように見える。

宣言どおりに毛布を持ち、アリスの背中にかけにやってくる。
アリスを見ている俺の視界にも、しっかりレナの姿が写るが
レナはこちらのほうを見ようともしない。
そのまま毛布をそっとかけて、無言のまま奥の部屋へ戻って行ってしまった。

なぜだ?まさか俺見えてないのか・・・そんなはずは。

奥の方、倉庫と仮眠室があったはずだが
がさがさと何かを探るような音がし始める。
物が落ちる音などもする。どうしたんだろうか

また暫くして、この部屋へレナが戻ってくる。
両手には何か握られていて
眉は下に垂れ下がっており、いつもの精細な表情ではない。

まさかと思って二度見してしまったが、
手に握られていたのはとんでもないものだった。
こんな反応をレナにされるとはなぁ

右手には悪霊退散とかかれた液体が握られている。それも結構大きな瓶。
左手には十字架にニンニクをぶら下げたものが

にんにくの数は１０個ほどで乱雑に針で穴を開けられ
突貫工事で作成されたことが見て取れる。

目だけはキリっと一点こちらを見つめてはいるが
なぜか涙目になっている。
眉は以前のままで下降気味だ。

俺悪霊かよ・・・それかドラキュラ？。ひでぇなぁ。

じりじりと間をつめ、次第に足元に闘気を集めだした。
光はどんどん膨れ上がって光の靴下が完成する。
悪霊討伐が開始されそうだ。

このままだと・・・やばいよな俺。

「なぁレナ、ちょっとまて・・・」

リアクションは十分に楽しめた。
それどころか身の危険を感じ始めたので
生きていることをばらすとしよう。

二の句を告げようとした時
レナは一瞬で間をつめ
悪霊退散と書かれた瓶を俺の頭目掛けて振り下ろす。

視認はできた。反応もできる・・・・・・はずだった
しかし、防御が間に合わない・・・・・・秋刀魚のせいで

いわゆる普通の一升瓶。
悪霊退散と書かれた文字側が俺の頭頂部を捕らえる。

バリンという瓶が割れた音と共に脳天に激しい衝撃が走る。
それと同時に一瞬気を失ったが、すぐに意識は戻ってくる。
これは・・・やばいなぁ

割れた瓶の中からは、粘りの強い赤い液体が飛び出してきて
頭は勿論、服も赤く染まる。

赤い液体のためか血にも見えないことはない。
頭は多分・・・・・ちょっと俺の血も

たたきつけてくれたレナはすでに十分な間合いを取り
十字架を両手で持って、こちらに向けてくる

「なんで・・・こないで・・・きえて・・・きえてよぉ！」

足はがくがく振るえ、
完全に俺のことを悪霊か何かと勘違いしているようだ。
幽霊関係は苦手らしい、知らなかった。けどそんなレナも新鮮味が
あって良い。

「だからレナ、ちょっと待てって、俺生きてるから」

説明しないとこの状況は終わらなさそうで
仕方なく説明しだす

レナの以外な一面を見れてよかったのは良かったが
頭に予想外の衝撃を受けてズキズキするし
服も赤く染まり洗っても落ちなさそうで、服の再利用は不可能だと
思われる。

奇跡的に秋刀魚は無傷で、赤い液体を避け
食べるのには問題なさそうではあるが
こいつがなければ瓶の白羽取りが披露はずなので
さんまに対するトラウマが追加された。

「近づかないでっ！！おねがい・・・おねがい・・・・・・」

十字架にぶら下げたニンニクを投げてくる。
弾をなかなか切らさないためか
わざわざ皮を剥き一片ずつ投げてくるあたり、非常にレナらしい。
声はどんどん小さくなる一方で
体の振るえもとまりそうにない。
よほど怖いようだ。

少し声を大きめにして、レナにも聞こえるように言ってやる。

「レナ。俺生き返ったんだよ。だから話を聞いてくれ。な、頼む」

「こないでぇぇぇぇ！！いやぁぁぁぁぁ！！・・・・・・」

いやぁぁと顔を可能な限り赤くして、声を張れるかぎり張って出した言葉
その台詞が最後の言葉だった。新たな言葉は出てこない。
近づいてみると、レナは泡をふいて気絶していた。
まさかこんなことになるとは、人間が泡を吹く姿なんて始めてみた。

泡のせいで落ちた口紅の奥には青い唇が見えている。
顔も血の気が無く、薄い化粧のせいか青白く見える。

そんなに俺が怖かったのか？
知り合いだし、ちょっとは話ぐらい聞いてくれてもいいだろうに。
正直かなりショックだぞ。

ガクッと肩を落とすが、目の前のレナをどうにかしないといけない。
泡を吹き、白目で、壁に倒れこんでいる。
ぱっと見でかなり危険な状態である。
視聴者にはお見せできない光景だ。

そのまま抱きかかえ、奥にある仮眠室へ運ぶ。
運ぶ道中に振動で一度目を覚ましたが、俺と目が合い。再度泡だ。

無事簡易ベッドまで運び、近くにあった毛布をかけてやる。
本来ならば寝顔可愛いなぁと言いたいところだが
泡を吹いて、白目の状態のレナにはどうも言う気にはなれない。

ここに居ると、起きたときに泡を吹いてしまいそうなので
泡エンドレスを避けるため、看病も無しに部屋を出ることにしよう。

だがその前に、口から溢れている泡を拭き取ってやって
白目のままの目も、自前のまぶたで隠してやってから
安らかな寝顔のレナにして、可愛いなぁとだけ言ってみる。

満足した俺は、このことで先ほどの悪霊ショックを拭い去り
アリスの所へ戻ることにした。

次回へつづく・・・・・。

第０１７話　『反応、アリス』

看病したいと思う気持ちを押し殺しながら戻ってくると
机で寝ていたはずの、アリスの格好が変わっていた。

寝ぼけ眼で、机の正面、どこともわからないところを注視している。
その姿は人形のようで、元から置いてあった置物にも見えないことも
もない。
身長の低いアリスのために、オーダーメイドされた机と
本当にオーダーメイドされたか疑わしくなるような
足が中に浮いてしまうほどの高い椅子に
アリスの服の色はとても調和していて、不自然さを感じさせなかった。
唯一の不自然な部分は、唇からだらしなく垂れてきている涎ぐらいか。

アリスが起きてしまったので、全ての作戦は泡と化した。
レナがあんなことになってしまった後なので
どうでもいいと思いながら歩を進めると
床が、ギィと古めかしい音をたてる。

この店は築年数それほど経っていなかったはずなんだが
その音で目の前にいる人形は、首だけをこちらの方面に向けてきた。
目は寝ぼけ眼のままで、視点は俺を捕らえていない。

「あれぇ？ゆうたん？？」

さすがにあの騒ぎの後だ。
いやぁぁぁ！！という、街中に響いてそうなぐらいの大音量の声の中

それで寝ていたら、この女はかなりの神経の図太さということになる。

眠たそうにしながらも
普通に認識してくれたようで
疑問詞を飛ばしてきてくれた。

「いきかえった・・・んだよね?。」

「おう。」

「そっかぁ」

少し台詞は違う物の、今のところ想像していた内容と
ほぼ同じようなリアクションだ。
目は寝ぼけていて、視点はまだ俺を捕らえていないものの
目を細めて満面の笑みをくれる。かなりうれしい。

抱きついては・・・こないな。残念。
考えていた、たわわに実る二つの存在の感触。
アリスの正面に陣取るそれの
マシュマロのような感触が霧のように無残に消えていく。

「やけにあっさりしてるな・・・
普通もうちょっと疑問に思うだろうよ。
普通人は生き返らない。」

「う~ん、だってブランジュでしょ。
墓作っとくっていってたわりには、すごく嬉しそうだったもん。
これは何かするなぁと思ってたんだ。ネクロマンサーだしねあの人。

」

「予想範囲内ってことか」

「生き返るとは思わなかったから
ほんのちょっとだけ範囲外かな
にじみでる程度の範囲だけどねぇ。」

「ネクロマンサーねぇ・・・」

ネクロマンサーとは、人形使いとか
死人使いだとか言われるやつらだ。

技術は口伝で伝えられているために
その技術を使える人間は少ない。

あのおっさんがネクロマンサーだったとは
実験が成功したとか何とか言ってたのが説明がつく。
いわゆる俺は都合のいいモルモットだったわけだ。

「ん～・・・で！どうやったの？」

「どうやったって、何が？」

「生き返った方法は？」

「なんかさ、良くわからん。
時間を戻して凍結させたとか。
魔道危惧やら永続唱魔やら
あと、エイドの法則とかロレンツなんたらとか。

まぁとにかく良くわからないが、生き返ったのは確かだ。」

「にゃるほどねぇ・・・」

腕を組んで天井を見上げ、
しばらく考えごとをする。
真剣な眼差しで
だが、こいつは天才だから
あれだけの情報をやれば、自分で答えを紡ぎ出すだろう。

「時空素、永続唱魔、それにロレンツ技術かぁ・・・
禁魔術に禁技術のオンパレードだねぇ」

どうやら、本当にあれだけの説明で内容は理解できたらしい。
さすが天才と言ったところだ。
有名大学院を最年少での首席卒業という経歴は伊達じゃない。

禁魔術と禁技術ってのが気になるが・・・
今となってはどうでもいいと俺は思う。

なぜかというと、禁止されている魔術ってことではなく
されていた魔術ってことだからだ。もちろん技術も同様の扱いで。

テクノバンクが壊れて以来。
法律自体があいまいになってしまったためか。
法そのものが機能していないのだ。
ボランティアで取り締まる機関とか
そういうやつらがいるから、無法状態になったわけではないが
禁魔術と禁技術に関しては問題ないはずだ。

きちんとした法律があったときは
禁の付く魔術や技術を使うと
法に基づき罰せられていたが今は違う。

禁魔術、禁技術共に使い放題。
最近は禁魔術とかいうと解禁魔術と認識されることが多くなってきたぐらいだ。

以前ならば、禁のオンパレードである俺は拘束され
魔力の補給が出来ない状態となり
時間が再生されて、脇腹の激痛と出血によって
無残な死に至っていただろう。今の時代バンザイである。

「で？なんで生き返ったのに血だらけなのぉ？ゾンビ？」

もっともな質問をしてきた
確かにこれは異様な光景だと思う。
生き返ったのを信じる要素としてはマイナス要因だ。

「いや、違う。これはさっきレナにやられた。
悪霊か何かと勘違いされたみたいでな。
悪霊退散と書かれた瓶を頭めがけてガシャンだ。
中身が赤かったし、それで赤い。
すこしなら血も混じってるとは思うが・・・」

「にゃは♪にゃるぅ～。レナ嫌いだからねぇ幽霊は。
あの娘の唯一の苦手分野。」

「だろうな。リアクションですぐ理解できたんだが
話を聞いてもらえなかった。

挙句の果てに気絶したし、いま仮眠室で寝かせてる。」

「そっかぁ。じゃぁさ。とりあえずシャワー浴びておいでよ。
その間に店で適当な服選んどくから。」

「おう。悪いな。あっそれとさ。
これミリアさんからのお土産。」

ドシンとありえない効果音を出し、机の上においてやる。大量の秋刀魚を。

「なにこれ・・・おお過ぎだよ。」

「だよな。」

とりあえずシャワー借りるわ。
そういって俺は奥にあるシャワー室へ向かう。
悪霊退散液で頭も手も足もベトベト。
いまだに頭は痛い。それに痒い。

レナの新たな一面を見た代償としては。
結構大きかった気がする。
いろいろな物を失った。
着ていた服とか、毛根の未来への可能性とか・・・

次回へつづく・・・・・・

第０１８話　『心配事』

温水により温まった俺の体からは白い蒸気が湧き出てくる。
シャワー室の目の前には脱衣所があり、
大きな鏡が俺のそれなりに引き締まった体を映していた。

蒸気が闘気の様に立ち上っているため
我ながらちょっと強そうだなと思う。
せっかくなのでポージングを・・・・・・
なかなか決まっている。のでは？

ポージングしながら
穴が開いていた脇腹に視線を落とす。
傷は完全に塞がっている。痕すら残っていない。
そのわき腹はどんな風に見渡しても
穴が空いていたことを想像させなかった。

時間を戻したのだから、傷があるわけないのだが
すごい技術だと関心させられる。

アリス曰く、禁魔術に禁技術のオンパレードということだが
その様子はまったく見ることはできない。

禁じられていたわけだから、よくないことが起きたり
起きていたということなわけだ。なにかしらの理由があるはず。

禁じられる理由は定かではないが
なにか聞いていないリスクが
俺の体には存在するのだと思う。

ブランジュは魔力の永続消費だけだと言っていたが
おそらく言えないような理由があるかと
そんな気がしてならない。

単純に永続消費だけならいいんだがなぁ・・・・・・。

「ゆうたん。着替え持ってきたよぉ」

脱衣所の入り口。白いカーテンがゆらっとゆれる。
白い指も現れ、なにか嫌な予感がしてきた。

「ちょ！まっ」

シャー。
俺の言葉も空しく乾いた音と共に
閉ざされていた脱衣所の熱気が外に漏れ出す。

もちろん。俺は真っ裸のままで。
周りには俺の大事な部分を隠すものはなく・・・・・・。
という状況だ。

着替えを持ってきてくれたアリスと見事に鉢合わせ。
配置はというと、俺はアリスの正面に前向きで
アリスも同様で俺の目の前で前向きだ。

アリスの視線は・・・・・・。
俺の物をしっかりとらえていた。

「ほへぇ・・・意外とゆうたん。

く・・・・・・
ん～、やっぱりなんでもない
これ着替えね。」

アリスの頬はほんのり赤く。
視線をそらしながら、見繕ってきた服を渡してくれた。

とたとたと、脱衣所の入り口へ小走りで出て行く。
くの後に続く言葉はなんだったんだ・・・・・・。

なんとなく想像はつくが
そんなことはないと思うぞ。
俺のはノーマルだ。とおもう。

「ごめんねぇ！まさかもうシャワー終わってるとは思わなくって。
てへぇ♪」

自分の右手を拳状にして、頭をポカンとたたいてみせる。
後ろを向いているから表情はわからないがおそらく笑顔だ。

「あっそれとぉ。レナがやったことだから。
服の代金はいらないし。サービスね♪」

ありがたい。店から取ってくるって聞いてたから
後で払う必要があると思ってたんだ。

今は無一文なわけで、払えることはできないし。
本当にありがたいと思う。

そんな台詞を放ってくれたアリスは、

慌てていたためか、重要な行動をせずにこの場を後にしてくれた。
見事にカーテンは開きっぱなしで、いつでも覗き放題なのだ。

「カーテンぐらい閉めていけよな。」

しぶしぶ自らカーテンを閉めに行く。
何事もなくカーテンを閉め終えた俺は
さきほどの光景を改めて思い浮かべた。

年上の女に裸をみられた。
なんとも言えない羞恥心が俺の心に沸いてくる。

「あの痴漢が・・・いや、女だから痴女だな。」

見繕ってくれた服はなかなかセンスが良く
俺の好みにあっていた。

全体的に黒を基調としたデザインだが
ところどころ黄色や赤やらで刺繍がほどこされている。
生地の素材も柔らかく、なかなかに着心地がいい。
結構高価な服だと思う。
サイズもばっちりで、これもアリスの鑑定眼のなせる技だろうか。

無料の衣類を手に入れた、手に入れたのはよかったが
悪霊退散液によって作られた赤い部分
想像していたとおり、赤い部分は完全には無くならなかった。

悪霊退散液はとれたんだが、予想通り頭から血が出ていたようだ。
正確には赤黒く。大きなかさぶたとなっていた。

やっぱり切れてたよなぁ。毛根は大丈夫なのか？

代々ハゲる家系の俺としては
傷より毛根の方が心配なのだ。

祖父は完全に無毛で、父は7割無毛。
しかも祖父も父も無駄な足掻きとわかっていながらもヅラを被っている。

それはバレバレなやつで、ぱっと見ヅラにしか見えないものだ。

ちょっと前までは人毛を使ったヅラではなく
あからさまに髪の毛には見えないものを使ってたから笑える。
そのヅラで、どうだかっこいいだろ？なんて聞いてきたこともあったな。

ちなみに、近所での俺の親父のあだ名は
『ふさふさ？親父』だ。
ふさふさの後に『？』を入れるのがポイントである。

まだ若い俺には前兆はないものの
今の内に気にしておく必要は大いにあるし
ヅラ生活は送りたくない。変なあだ名もいらない。

かさぶたのサイズは相当なもので
傷が治るころにはかさぶたと共に毛も取れるだろう。

毛根の復活を神に
いや髪に祈り脱衣所を後にした。

次回へつづく・・・・

第０１９話　『赤秋刀魚液パック』

「おっ！きたにゃぁ～」

「おう、秋刀魚うまいか？」

秋刀魚を箸でつつきながら、
骨と格闘しているアリス。

横にはレナもいる。
目があったが説明は済んでいたようで
口からは泡は出ていない。

変わりに恥ずかしそうな視線を向けてうつむいてしまう。
恥らったレナは新鮮味があってかわいい。

俺は秋刀魚が置かれたテーブルの
アリスの目の前にとりあえず座る。

「むぅ～美味しいけどぉ。骨がぁ」

「アリス。骨だけ取ってあげましょうか？」

「えっ？いいのぉ。じゃあお願い。」

「はい。」

優秀な用心棒だ。主の食まで補完するとは。

レナはアリスを護る立場であるが
どちらかというと家政婦と思った方がいいかもしれない。
戦える家政婦ってのもおかしな表現だが、それが合っていると思う。

アリス自体もかなりの強さだから
相当の実力者じゃないと、かなう筈は無いので
手を出す無謀な挑戦者はいないだろう。

レナは洗濯に料理。それに掃除まで。
あらゆる身の回りの家事をこなしている。

アリスもできないわけではない。
料理はかなり得意だし。レナが来るまでは自分でやっていた
料理に関してはご馳走になったこともあるが
プロ級の腕で、店を出しても良いんじゃないかと思えるほどだった。

最初のうちは分担してやっていたらしいが、
知らない間にレナが早めにやってしまっていたり
アリスがやり始めると、代わりますよなどと言って来て
途中で交代するということが続いたらしい。

そんなわけで今は全てをレナがこなしていた。

強くて、家事全般ができて、美人。
お嫁さんにしたい条件が全て揃っている。
強いってはいらないと思うけど。
幽霊が苦手っていうのも可愛いではないか。

「レナってさぁ」

「はい？」

「良いお嫁さんになるよねぇ。」

「へ？」

アリスも同じような事を考えていたようだ。
俺もそうだなとうなずいてやる。

「そんな。からかわないでください。」

バシン。グチャ。
背中をたたかれた音がバシン。
でグチャってのは？
・・・・・秋刀魚です。

勢い良く背中を叩かれた俺は
そのまま秋刀魚の山へ顔面をダイブ。
シャワーでさっぱりした顔を
秋刀魚パックでシットリヌメヌメ。
これで肌が潤うぜぇ～・・・って潤うのか？

「あっ。ごめんなさいすぐ拭きます。」

そういって取り出したのは
すぐ横に置いてあった布の塊。
俺が脱ぎ捨てた服達である。
言わずとしれて赤い布だ。まさかそれで？

ゴシゴシ。案の定だ。

その布で顔を親切に拭いてくれた。
親切なのは親切なんだが。
レナは今日は不調か？

「えっ？あれ？ごめんなさい！！」

秋刀魚パックの次は悪霊退散液パックで顔面が赤い。
生臭赤マンの完成だ。

「すぐ新しいタオル取ってきます。すみません。すみません」

そういって奥の部屋へダッシュ。
ものすごく早い。足に闘気まで宿して急いでくれている。

「レナ、不調だな。」

「だねぇ。」

アリスも不調だと思うらしい。
今日はめずらしい日だ。
きれいなタオルを探すのに手間取っているのか
レナはなかなか戻ってこない。

「ゆうたん？」

「ん？」

「生き返った報告だけってわけじゃないよね？」

「おう・・・。あいつら二人。なにかわかったか？」

「にゃ？遺跡のやつら？」

「そうだ。」

「う～ん、いろいろわかったのはわかったんだけどぉ・・・内容は微妙かも」

とりあえずわかる内容だけでも情報は欲しかった。

あいつら二人。遺跡の少女二人にはカリがある。
厳密には一人になるのかもしれないが
俺を殺してくれたやつらだからな。

人型兵器なわけだし兵器と名のつく物を
野放しにしておくこともできない。

「教えてくれ。」

「わかった。その前にまずは顔。なんとかしよっ！
シリアスな顔してても、笑っちゃうから」

いいタイミングでレナが戻ってきた。
新品のタオルを店から取ってきたらしい。
タグがついたままだ。

「すいません。勇人さん。これを。」

レナからタオルを受け取り、顔をふき取る。
これできれいさっぱりだ。

ふき取った後の肌はというと？
ん？意外によかったかも知れない。
いい感じに潤ってる。肌を触るとプルンプルンのつやつやだ。

「赤秋刀魚液パック・・・意外にいいかも。匂い意外はな。」

「ん～それはよかったね♪じゃあさ、ちょっと待ってて資料持ってくるから」

「おう。」

資料。おそらくは古代文明時代の資料だ。
よく見つかったと思う。

紙の資料は貴重で、購入するにはかなりの金がいる。
アリスはどこかから購入したのだろう
古代文明美術館とか、はたまた裏の世界の住人からとか
とにかく３００万以上はくだらないかと

その資料があるってことは
やはりアリスもあいつらのこと気にしていたってことだ。
アリスの性格上無視はできないし
気になったらとことん調べるやつなのでその辺は安心できる。

ただ、この情報を得るために必要な金がやばいかもしれない。
一応関係者だし、無償であることを祈ろう。

「勇人さん？」

「ん？」

「あの・・・」

人指し指を顔の前でちょんちょんと、
次の言葉をださずにもじもじしている。

なんだ？なにかいうことがあるのか？

「言いたいことがあるならはっきり言ってくれ。」

「じゃぁ・・・」

じょじょに近づいてくるレナ。
顔は至近距離で、目と目が合う。
その場所を超え、レナの唇は俺の耳に触れる寸前の位置まできた。

そこでボソボソっと

「幽霊苦手なのは秘密にしておいてください。
二人だけの秘密で」

二人だけの秘密か。悪くない。
けど、アリスも知っていた気が・・・

まぁ細かいことは気にしない方が良いか。
二人だけの秘密。・・・・・・
よし、二人だけだ。

言い聞かせ、アリスが知っていたことは

脳内で綺麗さっぱり掻き消してやった。
そして無言で俺は頷いてやる。

レナとよりいっそう親密になった。
そんな気が俺はした。
悪霊になったのも悪くなかったのかも？

次回へつづく・・・・・・

第０２０話　『情報』

「もってきたよぉ」

かなり古そうな物。一見ノートにも見える茶色い物だ。

「これはねぇ、あの二人の関係者のノートなの」

やはりノートだ。あっていた。
貴重な情報があることを期待する。

「あっ。そんなに期待しないでね。内容そんなにないから。」

「そうか。」

それでもだ。貴重な情報に違いはない。
存分に期待させていただこう。

「無償で教えられるところまで教えてくれ。」

「無償？だいじょぶだよ。お金取らないから」

「ほんとか？助かる。」

内心かなり喜んでいたが、表には出さない。
アリスは俺が金を持っていないことは理解してくれているようだ。
さて、どんな情報が聞けるか楽しみだ。しかも無償だし。

「じゃあ、とりあえず手に入れた情報全部言うね。途中で質問も受

け付けるからねぇ」

「わかった。」

「ん。まずあの二人
あれは古代文明の時の遺産だね。それは確定だよ。
ＣＰ３ってかかれてたり、もう一人。ゆうたんを刺した方。
あっちには首筋にＥＢ４ってかかれてた。
でぇ。何体あるかっていうとねぇ。
ノートには２５体ってなってるの。
全部人型だって。」

少し引っかかるな。実際見た柱の数は

「３５だ。矛盾してるな。」

「そう。それが引っかかるところの第一なんだよねぇ。」

３５と２５。さすがに差がありすぎるが。
あそこまで高性能の兵器だ。一気に３５体も作れるはずもないだろうから
後で追加作成されたんだろう。このノートは古いようだな。

「ん～それがさ。２５体目作ったところで
作れなくなったみたいだよぉ。
メインの研究員達が全員行方不明にでもなったのかな？
消息不明だって、ノートの最後に書いてたよ。
その後は５ページぐらいの間だけ真っ黒で。
それ以降は全部白紙だね。
黒いところは今分析中だよっ。」

じゃあ残りの１０体はなんなんだ?誰が作った?
そしてこいつらの目的は?

「作成目的?それも書いてたね。
それは、今でいう警察みたいなものだったみたいなんだよねぇ。」

「警察ってことは。犯罪者を取り締まったりとかそういうことか?」

「たぶんね。悪を防ぎ抑止する、秩序を乱す者を御する力。
って書いてあったからねぇ。」

なるほどね。だから高性能なわけか。
昔の時代。それは魔術を作った時代だといわれている。
魔術を作った。ということはまだまだ魔術については未知であったということ。
万人が使えるわけではないし、その威力に、力におぼれる人もいただろう。
魔術師相手では普通の人は到底敵わない。
魔術を利用した犯罪に対抗する手段として作られた。納得はできるな。

「しかし、ちと高性能すぎやしないか?」

「そうなんだよねぇ。だから私は戦争とか
そういうのに使われてたんじゃないかなぁと思うんだけど。
なんともいえないよねぇ」

「確かになぁ・・・」

「で、他は？」

「あとはねぇ。２５体のスペックの表示かな。
単位がわからないから役に立たないけど。
あとはねぇ・・・・・・無い。」

「えっ？マジか」

「マジです。」

「貸してくれ。」

「ほい。」

ひらひらさせているノートをアリスから受け取る。
表紙に何かかかれている。
上の方と下の方に分かれているために
別の文字だとは理解できるが
俺には古代文字のために理解はできなかった。

数ページめくるが、ページの構成はほぼ同じで
見開きで、２ページにわたってスペックの表示らしきものが書かれている。

ノートの左上には分かる文字でコードＮｏが書かれていて
いくつかは記憶に残っているものもあった。
一番巨大だった柱。ＪＺＡ－０８０の文字は見当たらないし
他にも見たことのある文字が見当たらないのもある。

「アリス。」

「ん？」

「これ、表紙には？」

「その文字？え～っとねぇ
上には真実の翼。
下にはエーテル・ハルマーだね。
人間兵器のプロジェクト名と
誰かの名前じゃないかなぁ。聞いたことはないけど。」

「真実の翼に、エーテル・ハルマーか」

なにか引っかかるぞ。聞いたことあるような。そんなかんじ。
脳の奥かなり深い部分にわだかまりを感じたが、答えは見つからない。
なんだろう。くそっ気になる。気になるがわかりはしない。

「あの。」

俺の耳元。レナが話しかけてきた。

「どした？」

「いえ、なにか外が静かではありませんか？
その・・・・・この時間なのに。」

「えっ？」

耳をすます。・・・・・。

確かになにも聞こえない。小鳥のさえずりさえも。

「なにかあったのかなぁ？私、ちょっと見てくる。」

わき腹のあたり、そこがズキンと痛む。
完治しているはずなのにだ。

「アリス！！ちょっとまて、なにか嫌な予感がする。」

こういうとき、俺の予感はあたるんだ。
良い予感はまったくあたらないが
悪い予感はだけよく当たる。
それに痛みを発する完治したはずのわき腹。
それが不安を上乗せし
悪い予感的中の可能性を示唆しているのだ。

「これは・・・・・・なにかあるな。」

次回へつづく・・・・・・・

第０２１話　『予感』

暫く考えた俺は、ひとつの保険を打つことにする。

「アリス。町の真上に時空のゲート開けるか。」

「うん、できるよ。開いてどぉするの？」

「様子を伺う。」

再度わき腹がズキンと痛む。くそっなんだってんだ。

「ゆんたん？もしかしてお腹・・・」

苦痛に顔をゆがめたため、アリスに感づかれたようだ。

「あぁ、完治したはずなんだがな。なぜか痛む。」

「ほへぇ。時間戻したからありえないよねぇ。」

「ああ。それのせいかすごく悪い予感がする。」

「だねぇ。じゃあ念のためゲート開くね。」

「頼む。」

アリスはこの間見た時と違う動きを行った。
手を広げられるだけ広げたのは同様だったが、
縦に振り下ろすはずの腕は

横、下、横、上の順に四角い形の軌跡をたどる。
額縁のような空間の奥の景色が
絵の具を混ぜたように歪曲し歪められ。
さらに右に左に回転、新たな絵を描き始めた。
視力が低下したときのようなそんな絵が描き出され
低下した視力が回復していくように
それは鮮明な絵と変わっていく。

描かれた絵は見慣れた景色だが、いつもは見ない角度。
見れない角度からの描写だった。
噴水の中、４本の大きな滝の出所。その隙間からの角度だ。
開いた側のゲートの視認性を考慮してくれたのだろう。
水しぶきでかなり見えずらいはずだ。なかなか抜け目が無い。

「じゃぁ～ん。時空ゲート。観覧ばーじょんだよぉ！！」

観覧バージョンか。確かにこの間より視認性はかなり向上している。

「さぁ、どうなってるか。」

「覗き込むのはいいけど落ちないでね。」

「おう、わかってる。」

椅子に座りながら、時空ゲートの先を見つめる。
俺の目に映る光景は、つい先ほどの店に入る前の様子とは違う。

これは、先ほど通ったところと同じところだろうか？
そんなことさえ考えされられる光景が映し出されている。

活気にあふれ、クレープ屋などの屋台もあった。
人も溢れかえるほどの居た。
そうだったのに、そこはまったく別の雰囲気に変貌している。

「まじかよ。」

「どしたの？」

「人が・・・・・・居ない。」

「へ？」

へ？というのは俺も言ってやりたい。
俺の脳へ送り出す視認情報は紛れも無く人は居ないし
ざっと見渡したが。まさに、へ？ってかんじだ。

アリスにも覗くように促し、景色を見せたがアリスの目にも
人影を捕らえることは出来なかったようだ。

「えぇ～なんでぇ？これ、こわすぎだよぉ」

「私にも見せてください。」

レナも覗く、覗いたが状況は理解しづらいようで首をかしげてしまう。

「気味が悪い・・・・・・。」

そういいながらも視線はゲートの方へ向いている。

真剣な表情で、視線が右へと左へと移動していて
なんとか人を探そうとしているのがわかる。

「えっ！・・・うそっ？」

幽霊でも見つけたか？驚きの表情をゲートに向けていて
視線は更に厳しいものになり、目の端はキリッとあがっている。
幽霊見たときは、眉は下に下がるんじゃなかったか？
ということは、いまのレナを見る限りは幽霊や亡霊の類ではない。

「勇人さん。保険打ってゲート開いたの正解でした。」

「ん？なにか見つかったのか？」

「あの屋台の、ベビーカステラの屋台の所。見て貰えますか。」

「ん。」

確かクレープ屋の三つ横に、その屋台はあったはず
結構すきなのでたまに買ってやってる屋台だ。
その屋台に何が？
悪い予感はまだつづいていて
レナの様子は拍車をかけていた。

「なっ！！」

悪い予感。それは当たっていた。

機動性を重視した服装。
袖は敗れていてワイルドな雰囲気を醸し出している。

髪は赤色で、身長はそれほどない。
ほんの数日まえに見た、見覚えのある姿だった。

そいつが屋台の商品をあさっている。
両手には数え切れないほどのカステラが握られていて
そのカステラ達は口に次々と運ばれていく。
あたりまえだが、店長の姿は見当たらない。

その横。たい焼きの屋台のところには
青い髪の人も立っていた。
服装は見たことないものを纏ってはいるが
腹部の痛みが増し、その人間に俺は関係したことがあると認識させられる。
返り血を浴び、服を着替えたのだろう。たぶんあいつだ。

他にもよく見ると、

帽子をかぶった小さい少年や
長い丈のコートを着た細身の男。
他にも童女と表現するべきだと思われる女もいて
その隣には対照的で大人の雰囲気が出ている美女もいた。

とたんに足が震えだし、あの時の記憶が蘇る。
死んだ瞬間。あの時の光景を。

次回へつづく・・・・・・

第０２２話　『集団』

震える足を止めようとするが、俺の意思に反して足の動きは止まらない。
ガクガクと震え、たっていることすらままならない状況だ。

我ながらなさけないとは思うが、恐怖とはそういうものだ。
一度殺された少女。それが目の前に、正確には時空ゲートの前だがそいつが視線の先にいるのだ。こみ上げる恐怖は表現のしようが無いほどで。
体の自由は奪われる。なんて様だ。

「ゆうたん。だいじょぶ？」

「なんとか・・・けど、震えが止まらない。」

何とか声を出したものの、同時に込み上げてきた嘔吐感。
制御は可能だったが、いつまた同じ状況になるかわからない。
秋刀魚を床に散りばめるのは嫌だ。アリスにも悪い。

視線を外し、椅子に倒れ掛かるように座る。
深呼吸を、いままでしたことないぐらい深く。心を落ち着けようと必死になる。
少し落ち着きはしたが、足はまだ小刻みに震えている。

なんで？なんであいつらがここに？何の目的で？
俺は死んだことはあいつらは知っているはずだ。
じゃあ目的はアリス達か？

見られたから問題ってわけじゃない。
それならこんな所にでてくるわけはないし

「なんであいつら・・・・・・。」

アリス達にもわからないようだ。
なんかしたのかおまえら?

「なにもしてないはずなんだけど。
ゆうたんが刺された後、すぐゲートが開いたから
入ろうとしたんだけどね。
私動けなくって、腰抜けちゃったんだよ。
ゆうたんの血をみて。」

「私は赤い髪の方と対峙してましたから
何もできませんでした。絶対絶命ってやつです。」

「なに?じゃあどうなったんだ?」

ミリアさんが何とかした。それは聞いていたが
まさかそこまでやばい状態だったとは

「そこでミリアさん登場か?」

「あっ!それは聞いたんだ。ミリアが助けてくれたって。
でもわからないんだよねぇ。聞いても教えてくれなかったし
それに、私達目の前が真っ白になって・・・ねぇ?」

「はい。目の前が真っ白になったと思ったら
すでにブランジュさんの家の前にいました。」

なんとかした。か・・・
助けてくれたのは確かだが
方法はよくわからないな。これだけの情報だと。

「ちなみに、追跡してたのバレバレだったやついたでしょ？
あれ、ミリアだったみたい。後で聞いたよ。」

「そうか。」

とりあえずそれは置いておこう。
今は目の前の状況を把握だ。
絶体絶命ではないものの。
すぐにでも崩れそうな、切り立った崖の先に立っているようなものだ。
あと一人の体重が追加されただけで
その崖は音をたてて崩れ去るだろう。

敵意はないってことは無いだろうし。
見つかれば絶体絶命に陥る。
逃げるが得策。どうにかしてこの場を去る必要があった。

「転移で逃げよう。」

「だね。ゲート開くにはこのゲート閉じないとダメだから
近くに新しい空けると、干渉しあって大変なことになるからねぇ
ちょっと待ってね。すぐ閉じるから。」

四角い額縁を小さく、丸めるようにするようだ。
開いたゲートは、開くときより閉じるのに時間がかかるらしく。

すぐ、といった割にはなかなか閉じることは出来ない。

「観覧バージョン、おっきくてたいへんだよぉ。」

「私も手伝います。」

「ほい。」

俺も、といいかけたが時空の仕組みはわからないので役に立たない。
それに、足の震えは完全には止まっておらず立ち上がれそうにもなかった。

「もうちょっとだよぉ。」

「はい。がんばりましょう。」

時空のゲートがＡ４サイズほどに縮小されている。
あと少しだ。がんばってくれ。

「でもなん・・・」

でもなんで。そう言おうとしたのだろう。
レナの台詞は途中で止まる。視線はゲートの先だ。

「まずいっ！！」

「ごふぅおわぁ！！」「ふえっあっ！？」

不意に体は中に浮く、ついでにアリスも
「ごふぅおわぁ！！」が俺で

「ふぇっあっ！？」がアリスだ。

勢い良くとんだため、倉庫の奥の壁に当り
壁のおかげで体は辛うじてとまる。
相当衝撃は強かったようで
その反動によって横の棚が倒れてきた。
半生き埋め状態である。

半生き埋めといっても
倒れ掛かった棚が人の形で止まったために
何とか隙間は確保されているが、なぜこんなことに？

横には同時に吹き飛ばされたアリスがいる。
アリスは目を回して倒れていたが、意識はあるようだ。
目をぱちぱちさせて、ふへぇ～とか言っている。

ちなみに、吹き飛ばした犯人はレナだ。

「ふえぇ。痛いなぁ。なんだよぉ」

「しっ！」

人差し指を口の前にやり、アリスを黙らせる。
倒れてきた棚で半生き埋めになっているものの
小さな隙間であちらの状況は見ることができた。
その隙間から見える光景で
一瞬でいまある状況を理解できたからだ。

レナが取った行動。用心棒としては最善の選択だろう。
主を隠し、ついでに動けなかった俺も隠す。

俺があそこにいても役に立ちそうにないし
足手まといになるのは確定だから。

アリス達がふさぎかけたゲート。
それは拳大まで狭まっていた。

そこには、先ほどとは違う景色が見て取れる。
拳大の穴に、文字通りの拳がひとつ。

震える足を押さえながらも、俺は見続ける。

グローブの先から見える細い指。
その奥では赤い髪が風に揺れている。
髪の隙間には端が釣りあがった挑戦的な目が一つ。
その目には見覚えがあった。

赤い髪の少女。
Ｃｏｄｅ－Ｎｏ：ＣＰ３

それが時空のゲートに手を掛けていたのだった。

次回へつづく・・・・・・

第０２３話　『鍵』

「もしかしたらと思ったんだけど・・・やっぱり」

挑戦的な目は、あからさまな笑顔を作り出した。
その理由は明確で、レナを視線の先に捕らえたから
ここに来た目的はやはりレナ達か。

「ちょっとそこで待ってなよ。
すぐこれ広げて行ってやるから。」

ゲートには両手が掛けられ、
観音扉を開ける要領で両サイドに陣取っている。
ゲートはまるで紙の様にやわらかく
豆腐のように脆く削られ広がっていく。
広がる速度は閉じる速度の比ではない。

すぐに赤毛の少女の全身が確認できる広さになり
宙に浮いた少女の体は、ゲートを通り移動してくる。
不敵な笑みは相変わらずで
遺跡で破れた服も以前のまま。

「みぃ～つけた♪むふふふふふ。」

とりあえずは、一人だけだ。
他が入ってくる様子はない。

「あれ？もう一人は。いるんだよねぇ。」

もう一人。アリスのことだろう。
レナのことだ。いないというはずだ。

「いまは・・・いない！！」

部屋の全体に風が巻き起こる。
レナの闘気によるものだ。

「もう。いきなり臨戦態勢なわけ？やんなっちゃう。
ちょっと教えてほしいことがあるだけなのにさぁ」

うんざり。そんなリアクションをとる。
確かに、遺跡の時に味わった殺気は感じられない。

その言葉を信じてやるには材料が足りなさ過ぎる。
こいつでは無いものの、一度殺されているし
信じることが出来ない材料のほうが多すぎた。

「ねぇ。鍵どこにやった？」

「鍵・・・？」

「そう。鍵」

鍵？なんだそれは。
そんなものはなかったはずだ。
アリスに視線を向けるが、アリスも知らないようだ。
レナもおそらく知らないだろう。

「鍵よ。メイが始末した。あの鍵。あれがいるの。」

「始末した？もしかして・・・」

俺か？おれ自身が鍵だと。
メイって言ったのが、あの少女なら
Ｃｏｄｅ－Ｎｏ：ＥＢ４なら確定だが

「あっ、メイってのは刺した娘ね。で、私はヒノ。
死体でも、生きてもどっちでもいい。あれが必要なの」

メイが刺した。刺したという動詞で確定だな。
俺が鍵だと。意味不明じゃないか。

「どういうこと？」

レナが疑問詞を投げかける。
できればそのまま教えてくれるとありがたいが
ヒノと名乗った少女は、首を傾げて
うんざり、そんな表情だ。教えてくれそうにはない。

「どうでもいいでしょ。私達にはアレが必要。
それに、死んだんじゃない？アレ。
もうあなた達には必要ないでしょ。
素直に話てくれたら危害は加えないでいてあげるから
鍵、どうしたか教えてくれないかなぁ」

「断る。といったら？」

「力づくかな？」

うそでもいい。
なにかあいつらに情報をあげてくれ。
それで帰ってくれるならいい。
無理であれば闘えばいいんだ。
火種をわざわざ生む必要はないんだぞ。

「鍵。あなたたちが鍵といっている人。
それは、例え死んでいたとしても・・・」

「死んでいたとしても?」

この展開は、まずいような。

「友人です。大切な友人。
知っている情報をあたえることはできません。」

「ふう~ん。ってことは。さっきの返答は?」

友人か。せっかくなら男性と言ってくれれば変な期待ができたのに
一番いいのは男性と書いて、ヒトと言ってくれることだが
俺達の関係は本当にただの友人で。それ以上でもそれ以下でもない。
しかしまずいぞ。非常にまずい。
このままだと・・・・・・。

「断る。です。」

次回へつづく・・・・・・。

第０２４話　『スクランブル作戦』

「あぁ～もぉ。レナのバカチン。」

横でアリスがうなり声を上げる。もちろん小さな声で。

「なにか気の利く嘘でも言えば、見逃して貰えたかもなのに。
ついでに変な誤解をさせるような台詞言うし。
もぉ・・・・・ばか、あほぉ」

「おいおい。言いすぎだ。」

それに、あの台詞はなかなかよかったぞ。心に染みた。
しかしこれはまずい状況だ。どうするか

「このままじゃやばいよな。」

「うん。」

「何か出来ないのか?例えばこのへんの怪しいもん使って。」

棚が倒れているので、周りには見たことの無い商品がずらり。
見るからに怪しそうな瓶に、銀色に自発光する鎖。
青色の宝石付き指輪なんかも落ちている。
俺には全ての物の使用用途は不明だが、
この怪しさ万点の道具達で、何かできるんじゃないか?

「う～ん。さっきから考えてるんだけどねぇ」

「どうだ？」

「無理だね。」

「そうか・・・。」

本当にどうしようも無いのか？本当になにも？

「あるにはあるんだけどぉ・・・気が進まない。」

あるんじゃないか。じゃあなぜそれをすぐ使わない。

やはり・・・・・・。

「なにかリスクが？」

「うん、私とレナにはリスクはほぼ０だと思う。

よほど変なことが起きなければね」

「じゃあ俺だけ？体の関係か？」

「あのね・・・・・・。」

ぼそぼそと内容を教えてくれた。

聞く内容によると本来ならばリスクはほぼ０だ。

しかし、俺の体がそうさせない。

魔力が枯渇することによって与えられる死。

それが俺への弊害となる内容だった。

だが、このままでも死ぬ可能性は高い

特にレナは。

やる、しかないな。

そんな覚悟を決め、アリスに声をかけようとしたのだが
アリスはそんな俺を横目に、棚をあさっている。
その捜索はエスカレートしはじめて
顔は棚の中に飲み込まれていく。

「あった！！これだよぉ
これでリスクはちょっと減るかもぉ」

捜索を終了したアリスの顔は、ほこりで真っ黒だ。
髪の毛にも細い繊維のような物が引っかかっている。
せっかくのかわいい顔が台無しだぞ。

「えへへぇ♪」

「で、なんなんだそれは？」

アリスの手に握られているものは
緑色の宝石付きの指輪と
中にどす黒い液体の入ったビンだ。

指輪は一見普通の指輪に見えるが
よく見るとわずかに淡い光を伴っていて。
それがとても高価なものだとわかる。

液体に関しては、粘度がかなり高い液体で
傾けて持っているにも関わらず
中身は重力に逆らって斜めの形を維持し続けている。

「これはねぇ。アリスちゃん特製魔法水とぉ

空気中に含まれている残留魔力を吸い取る指輪だね。」

まるで漫画かアニメのような展開だ。
魔法水をゲット、ついでに魔力回復指輪まで手に入れた。
こんないいタイミングで、こんな良いものが手に入るとは。

アリスの詳細説明によるとだ。
魔法水はアリス自体の魔力が練りこまれていて、かなりの濃度らしく。
推測では１０日分ほどの魔力を得るのだという。
見た目のせいで飲むのに勇気はいりそうだ。

だからだろうか？
瓶のラベルには『ブレイヴウォーター』と書かれていて
アリスにブライブウォーターか、なんて言ったら
『ヴ』の発音は下唇をかんでね♪なんて説明も付足された。
『ブ』ではダメらしい。
アリス特製と言うだけのこだわりはあるようだ。

それと、指輪の効果は説明のとおりで
空気中に含まれる残留魔力を己の魔力に変換する超便利なもの。
場所によっては、俺の消費魔力を超えて回復することもあるらしい
マジックスポットなんかがそうらしいが、そんな簡単にその場所は見つからない。
同じ場所にとどまれば、当たり前のように残留魔力は枯渇するため。
マジックスポットは期間限定なのだ。

マジックスポットの話で良く聞く話だと
戦争があった場所がその場所になりやすいという。
魔道兵器の使用や、魔道師による高位魔法の連発など。

魔力が大量に使われることによって発生するんだそうだ。

他には、樹齢１００年以上の樹の周り。
樹の幹に残留魔力を吸い取るための組織があるらしく。
樹齢１００年を超えると、その幹の太さでかなりの魔力をためているらしい。
神木なんて呼ばれてる樹が、神々しく見えたりするのは
残留魔力が影響しているという科学者もいるそうだ。

でもこれで俺の生き延びられる可能性がかなり増した。
鍵だと言われ、道具扱いにされた理由も探さないとだめだし。
やることはたんまりある。死ぬわけには行かない。

「魔法水はサービスするけど、指輪は高価なものだからレンタルねほしいんならまた今度、６０００万ゾル持ってきてくれたら売ってあげるね」

「マジか・・・高いな。俺には買えそうに無い。レンタルでたのむ」

「ほい。」

とりあえずは逃げ延びられる。そんな安堵感が沸いてくると同時に
今後のことがわからない不安にもかられ、何か複雑な心境である。
リスクはでかい。特に俺はな。

ブレイヴウォーターを一気に飲み干し
左手の人差し指に指輪を嵌める。

これで準備万端だ。
口の中はというと、準備万端ではないが・・・・・。

ヌルヌル、ヌメヌメ、ニュルニュルしている。

味はというと、蜂蜜に砂糖を入れて、ついでにザラメも投入
それをコトコト鍋で煮込んで、量が3分の1ぐらいになったところで
メープルシロップがたんまりかかったホットケーキにかける。
そんなレベルの甘さを誇る代物だ。

ヌメヌメ感のせいで、口の中は万全ではないものの。
とりあえず準備はできた。よしやろう。

「よぉし、スクランブル作戦始動ぉ」

アリスが小声で作戦名を発する。
スクランブル作戦。アリスらしいがチープな名前だ。
これから行うことを考えれば、あながち間違ってはいないが
スクランブルより俺はシャッフルのほうがあってると思う。
どっちだとしても作戦名を言うのは恥ずかしいが

まぁそんな感じで、作戦が始動した。

次回へつづく・・・・・。

第０２５話　『自由歪曲転換現象』

作戦名：スクランブル作戦
（俺の中ではシャッフル作戦）
が始動する。

内容は簡単だ。
ただ新しい時空のゲートを開くだけ。
それで逃げることが可能だ。

なんで逃げれるかってのは、これも簡単な原理らしい。
なんとなくはわかったが、なぜそうなるのかは専門知識の無い俺は
理解できない。

で、どんなことが起きるというとだ。
さきほどゲートを閉じてから、新しいゲートを開こうとしていた。
その行動に、これからやろうとしているヒントがある。

アリスは、時空の扉を近くに二つ開けることで
大変なことになると言っていた。
そう、その大変なことを利用してやるのだ。

大変なこととは。正式名称『自由歪曲転換現象』
これだけだと分からないので、内容を噛み砕いてみると
時空ゲートを二つ開けると、今の空間が不安定になる
密室だとそれが如実に現れるそうで、いまの状況は最良だといえる
だろう。

で、その不安定になる原理っていうのが説明は簡単。

ひとつの部屋をまずは想像して、窓をひとつだけあけるとしよう。
そうすると、部屋の空気はなかなか入れ替わらない。
風の通り道が無いので、当たり前だが
その道。もうひとつの窓を開けてやれば
風は勢い良く駆け抜け、空気はすぐに入れ替わり、外の空気と混ざり合う。

それと同じような動きを時空もするようで
二つゲートを空けてやると、時空の狭間が溢れ出し
一時的に部屋内が時空と同化し混ざり合う。

同化はすぐに元に戻るのだが、
一時的に不安定になった時空は
全ての不純物を異なる場所に吐き出すそうだ。
不純物とは、今回の場合、俺達人や人間兵器のヒノだ。

ということは。わけのわからない未知の地に吐き出される可能性もある。
空の上かも知れないし、海の中かもしれない。
もしかしたら地中に埋められるってこともあるかもしれない。

それも一種のリスクではあるのだが。
これの前例は何度もあるらしく。
今のところ地中に埋められたって話は無いらしいので安心だ。とは聞いた。
空ってのは何回かあったらしいんだが・・・・・。
対応は可能だ。と思う。

どこに跳ぶかわからないために、魔力の補給が出来ない可能性が高い。

だから、俺に対してはリスクがあると、そういうことなのである。

覚悟を決めた俺はその覚悟の視線をレナの方へ向ける。
ヒノとレナは両方とも微動だにしておらず、対峙しているままだ。
ヒノはあきれ顔をしていて、ついでに面倒そうな顔をしている。
レナはというと、闘気を開放し続けていて、今にも飛び掛りそうな勢いだ。
いつも持っている超大型の剣は持っていないので
構えはスタンダードなファイティングポーズだが。
すぐにでも闘いに発展しそうな状態だ
熟練者の闘いであれば最初の一撃で勝負が決まってしまうこともある。
急がないといけないな。

「まだ戦いには発展していない。早くやろう。」

「まかせて。」

3秒ほどの詠唱を行い。針の穴程度の時空ゲートを作り上げた。
穴の先に見えるものは確かに時空で、どこかにつながれた形跡もない。

「こんなサイズでいいのか？」

「うん、みてて。」

しばらくすると、その穴が呼吸を始める。
小さな風が発生してはいるが、隙間風程度のもの。
呼吸を進める時空は、走り出したランナーのごとく
呼吸を早め、風の強さを大きくしていく

風はどんどん大きくなり、次第には突風。さらには嵐と変貌を遂げる。

さきほどまで針の穴程度のゲートが、風の変化に比例して、時空の闇をさらけだす。

どこまでも深い闇。いまにも呑み込まれそうなそんな雰囲気。

結局のところ呑み込まれるのだが・・・・・・。そんな闇が広がっていく。

「なにこの風？」

「・・・・・・。」

「あそこから？」

鋭い視線が、乱雑に商品が転がっている棚のほうへ向けられる。バレたか？

冷たい汗が頬を伝い、首も超え、着ている服に吸い取られる。

まだ、時空はまだ混ざり合っていない。

穴の形は乱雑で、ひびが入り始めている。もう少しだ。

「もう一人の女。あそこ？」

唇の端がゆっくりと釣りあがる。ヒノは笑っていた。

「おい！アリスまだかっ」

「もうちょっと。もうちょっとなんだけどぉ・・・・・・。」

パリン。
ガラスが割れたような音。もう少し高音ではあるが、そんな音がした。

パリ、ピキ、パリン。パリパリパリ。続けざまに同じような音が発せられる。

「やたっ！！」

天井。壁。床。
全てにヒビが発生。そのヒビは拡大し、視界に収まる部分すべてにヒビが行き渡る。
その様子はまるでステンドグラスのようで、時空が織り成す神秘画の完成だ。

ステンドグラスの一片が、巻き起こる風によって剥がれ落ち
剥がれたそれは、自らの存在を否定するように薄れ消えていく。
崩壊していくステンドグラスの先には、時空の闇が存在していた。

その闇は、人以外の存在をを即刻否定し
目の前に倒れていた棚や、さきほどまで俺が踏んでいたはずの床。
赤い色で塗りつぶされていた天井なんかも全て呑み込まれてしまった。

深い闇の中、明かりもないはずの状況で４つの存在が照らされる。
それは３人の人間と、人間兵器。
全身は重く、床もないため身動きは取れない。

アリスやレナも同じようで
宙に浮きどうしようもなさそうだ。

もちろん、人間兵器のヒノも。
ヒノは、隠れていた俺とアリスを視線でがっちりとらえる。

「やられた・・・・・・。
まさかこんな手段があるとはね
それに、鍵。生きてたんだ。
でもどうやって？」

鍵とは俺のことだ。ヒノの視線もばっちり俺の顔に合っている。

「・・・説明する必要はない。」

「ふ～ん、嫌われたもんだねぇ。」

そりゃぁ嫌われるようなことしたもんなぁ。
お前の友人だか仲間だかしらないが。

こいつには、このくそやろうだとか、罵声を浴びせてやりたい。
よくも殺しやがったな！！とか
保険金詐欺するところだっただろうがっ！！とかな。
だが、今の状況。
俺に襲い掛かる嘔吐感がそれを許してくれなかった。

どんよりと覆いかかる闇は、とても気味が良いとは言えないもので
味の無いバリュームを大量に飲んだ時だとか
香りのまったく無い苦いだけのコーヒーを、それも大量に飲んだ時のような
そんな嘔吐感が俺を取り巻いているのだ。

ついでに言うと、眼球を親指で押さえつけられているような感覚と

耳に生暖かい綿棒を突っ込まれている感覚など、いろいろな不快感がある。
一番きついのはお尻で、とある部分が仲間を見つけたつもりなのか時空のゲートと仲良くしようとしている。穴仲間発見か？
正直この環境かなりきついぞ。

気絶できたらなぁ・・・・・。
そう思っていたら、目の前がどんどんと真っ白くなっていく。
その白さは純白のシーツのようで、ふかふかさは無いものの俺の今の感覚では十分にベッドのように見える代物だ。
もちろん、俺はこのベッドで寝てやることにする。かなり心地いいはずだ。

寝る前にアリスとレナには一言声をかけておこう。

「アリス。レナ。」

「なに？」「はい？」

「また会おう。」

そして俺は眠りに、もとい気絶した。

次回へつづく・・・・・。

第０２６話　『白い布団』

「まぶしい！！」

目の前で照らせるライトのような。
そんな眩しさによって俺は目を覚ました。

体はふかふかで真っ白なシーツの上に乗り
体の上には、これも純白の布団が掛けられている。
羽毛でも使われているのだろうか
重さはほとんど感じられない。

その光景はまさに
気絶するまえに想像した物とほぼ同期していて
脳へ送られる情報は正夢かと思えるほどの再現性だった。
ふかふかというオプションは追加されてはいるものの。
白い景色の中に白いシーツ、それに布団まで白いのだから
同じといってしまってもいいとは思う。

「これはどういうことだ？」

辺りを見回すと、真っ白な世界で
壁の存在は認識できたものの
その壁は淡く白く光っていて、自らの存在を薄く否定する。
床も同じような状況で、天井も同様に光っていた。
四方八方から浴びせられる白い光のせいで
この部屋は影の存在を許してはいない。

「おはようございます。勇人様。」

清楚な感じの声が、女の声が聞こえた。
脳に直接語りかけられるような。そんな声

だったら、自らの死を疑ったのだろうが
その声はあからさまに機械を通して発せられた声で
周りを見渡しても声の主は見当たらない
どこかにスピーカーが隠されているのだろう

「いまそちらに、朝食を配送致します。
お召し上がりになってください。」

同じ声だ。朝食ということは今は朝なのか？
スクランブル作戦が始動を始めたのが１５時ぐらいだから
すでに日が変わってしまっているようだ。
もしかしたら、数日経っている可能性もある。

ウイーンという音と共に正面の扉が開いた。
電車なんかでよく見る。弁当売りの台車
そんな台の上に所狭しと並んでいる料理の数々が現れる。
その料理が俺の食欲をかきたて・・・・・なかった。

空腹なのは確かだが、食欲は沸かない。
その理由はメニューにある。

まず真っ先に視線が捕らえたものは肉で
肉汁の滴る一目で高級な肉だと理解でき
霜が降りまくっている超脂っこそうなステーキ。

他にも丸々と太って香ばしい匂いを出す鳥の丸焼きが

内部に詰まった油の匂いを匂わせてくれているし。
さらには、目が動いていて新鮮さと
不気味さをだしている高級魚の刺身など。

いろいろありすぎて説明のしようがないほどで
そのメニューたちに一貫して言えることは
朝食に相応しくない料理だということ

晩餐会などでも開こうというのだろうか
全てはディナーに並びそうなものなのだ
超が着くほどの一級品であることは理解できる。
だが、朝食には相応しくないし、食べたいとは思えない。

豪華なのはわかる。
だが、朝っぱらから油をこんなに大量にとるのはいただけない。
この間食べた秋刀魚も油がたっぷりのっていたし
最近油物に縁があるのだろうか。

ちなみに、その脂っこさ万点の料理は自動で出てきたわけではない
人の手によって運ばれてきたのだ。
ベッドの横に立つ人物、それが声の主だろうか？

そう思って、確認するために料理から視線をはずしてみた。
だが、その予想は裏切られる。
なぜなら、人ではなかったから。

一見普通の人間にみえる女性だったが。
メイドの衣装の袖から
微かに見える不自然な関節

その部分が人の肌とは違う光沢を放っており
人間ではなく、ロボだと認識させてくれた。

本来ならば自立稼動の人型ロボなどかなりめずらしく
いままでならまじまじと見ていただろう

しかし、ヒノのような人間兵器を見た後となると話は別で
あの精巧な人間としか思えない物と比べると
目の前のロボはあきらかにロボなのである。

無言のまま。その少女は台を置いて後ろを向き歩き出す
発声機能はないのだろうか。扉の前で一礼だけして笑顔を向けてくれた。

ウイーンと扉がしまり、再び声がする。

「どうですか?私の作った自立稼動型ＡＩ搭載のロボットは
カレンちゃんっていいます。名前の通り可憐ではないですか?
まだ、味覚の分析が困難で料理機能は搭載しておりませんので
恥ずかしながら、その料理は私が作らさせていただきました。」

カレンちゃんねぇ。作ったってことは博士か何かか?
それに料理も、かなりの腕前だな。出す時刻を間違っている気はするが。

とりあえず、腹は減っているので脂っこいものはさけて
目が動き、身もピクピクしている
新鮮さばつぐんの刺身をいただこう。
魚だといっても油はかなりの量はあるだろうが・・・・・。

では、パクッと一口。

「・・・・・。うまいな。
新鮮だし、甘みもあって濃厚だ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

「ときに、勇人様？」

「なんだ？」

「この状況、やけにすんなり受け止めていただきましたね。」

「受け止めたつもりはないが・・・・・。」

受け止めたつもりは無い。確かに無いのだ。
真っ白な部屋でぽつんと一人。
そんな状況にいきなり陥って、内心焦っているんだぞ。

敵意が感じられないから、今は流れに身を任せるしかない。
そう思っているだけだ。けっして受け止めたつもりはない。
できることなら、今すぐ逃げ出してやりたいぐらいだ。

「そうですか、そんな心境のなか恐縮ですが
そちらに伺ってもよろしいでしょうか？」

「ああ。できれば今の俺の状況を説明してくれるとありがたい。」

「かしこまりました。」

「そうだ。あんた、名前は？」

「名前ですか。失礼致しました。
そのままでは、声で理解していただけないのですね」

なに、知り合いか？
いや・・・・・違うな。
機械を通してはいるものクリアな音声だし
知り合いの声ならわかるはずだ。
記憶と照合するが、このような声は聞いたことがない。

「で、名前はなんていうんだ？」

「私はＣｏｄｅ－Ｎｏ：ＪＺＡ－０７０こと
レクアでございます。
以後レクアとお呼びくださいませ。勇人様」

コードナンバーだと
まさか、人間兵器・・・・・・？

次回へつづく・・・・・・。

第０２７話　『レクア』

ＪＺＡ－０７０というコードナンバーを残し
通信の回線を切ってしまったようで
何を言ってもこちらの声はとどかない。

ＪＺＡ－０７０ということは
俺の知ってるコードＮｏ：ＪＺＡ－０８０と酷似しており
頭の三文字なんかはまったく同じで
その個体との関係性はありそうだ。

遺跡にもこの番号はあったはずで
声の主が人間兵器である可能性は
その事実により濃厚だと証明してくれる。

たしかＪＺＡ－０７０とかかれた柱は
５角形の柱だったと思う。
今その柱を見に行けば、最後に見た柱のように
綺麗に等分され、倒れていたりするんだろうか？
やはり、すべての封印は解かれてしまったのか？

ＪＺＡ－０７０、レクア・・・・・・か。
敵じゃないんだよな？
もしかしたら、また死ぬのか・・・・・・。

あの性能の兵器であれば
どうあがいても俺の力では太刀打ち不可能であり
一人ではどうすることも出来ない。
あの口ぶりからすれば、敵ではなさそうだが

ウィーン・・・・・・。

本日3度目の扉の空く音。

扉の奥の闇からでてくる人物が
この部屋の床からの光で照らされる。
そのシルエットは、さきほどのものとは違ったために
俺の心臓はドクンドクンと、急に活動速度を速めだす。
わき腹は痛くない。悪い予感も不思議としない
しかし、この緊張感はあまり続いてほしくない。

「はじめまして、というべきでしょうか？」

部屋に入り一礼し、笑顔を向けた女は
スピーカー越しに聞いた声を持っていた。
ＣｏｄｅＮｏ：ＪＺＡ－０７０
レクアが、宣言どおりここに現れた。

レクアという人物が知り合いだという可能性を
俺は捨てていなかったのだが
その姿を見て、即刻それを否定する。
その姿は記憶の隅っこにもない。
大人な雰囲気を持つ女性だったからだ。
こんな風貌の女性ならば忘れようがないだろう。

化粧のせいか
それなりに長い黒髪のせいか

魔性の女。

そんな雰囲気をかもし出していた。

目を強調するために延長された
濃い目のアイラインもそれに一役かっている。

服装は白衣だったが、肌は少し焼けていて
この部屋に溶け込みきれてはいない。
床からの光のせいか、レクアの色っぽさはかなりのものだ。

高めのヒールが光る床に当り、コツコツと音を立てる。
この壁は音を反響させやすいのか
音は幾重にも重なり俺の耳へと届けられ
何十回か音を出した後、俺の隣で停止した。

「そんなに緊張なさらないでください。
私は勇人様を襲ったり致しませんので」

信じられる。そんな声の持ち主だから困ってしまう。
台詞自体には殺気はまったく入っていないし
態度も非常にリラックスしていて
敵っぽさは微塵も無い。
それどころか俺を心配してくれるような
そんな優しさが声には含まれている気がする。
レクアは、信じていいのだろうか・・・・・・。

確かに襲ってくる気配は無いのだが・・・・・・。

よし、このまま黙っていても仕方ないし
何か聞いてみるか・・・・・・
まずは心配事を減らそう。

このまま疑っていても仕方ないしな。

「聞いていいか」

「何でしょうか？」

「まず一つ目、なぜ俺はここにいる？」

本来ならば自由歪曲転換現象によって見知らぬ所に飛ばされるはずだった。
でもなぜかこのような布団に俺は寝かされていてレクアと名乗った女がいるこの場所に飛ばされているしかもレクアは俺の名前を知っているのだ。

「ちょっとした細工をさせて頂きまして転移現象が起こる直前に、時空装置を使ってここに来ていただきました。
生憎と思索段階のマシンですから他の2名は転移させてしまいましたが。」

「時空魔装置だと？」

「はい。その装置で勇人様が転移される前にこちらに転移させていただいたとそういうことになります。」

詳しい意味はわからないがどうやらこのレクアという女は俺に用があったようだでないとわざわざ俺を転送させる必要がない

「なるほどね。じゃあもうひとつ・・・・・・。」

「なんでしょう?」

わずかに俺の心臓の鼓動が早くなる。
ここからが本題だ。生か死かこれが決定する瞬間でもある。

「レクアは・・・・・・。」

「私は?」

「あいつら・・・ヒノって名乗ったやつらと同じなのか?」

ある意味これが一番重要な質問である
俺がここに来た理由なんてどうでもいいのだ。

「ヒノ・・・・・・ですか?」

「あぁ、あいつらと同じなのか?」

「・・・・・・」

少しの間沈黙が続く
どう答えるべきか
そう考えているようにも見えなくはない

「少し目的は違いますが、私はヒノと同様に
人間に産み出された存在であるのは確かです。」

「産み出された？」

「はい。およそ１８００年前に産まれ
Ｃｏｄｅ－Ｎｏ：ＪＺＡ－０７０と名づけられました。
それから私は１８００年以上も生き続けており
今に至っております。」

１８００年前か。もっとも栄えていた古代文明と年号が一致する。
レクアは人間兵器なんだろうな。でも、なぜ襲ってこない？
俺が鍵だからだろうか？それとも別の何かが？

「勇人様？」

「なんだ？」

「勇人様は私の・・・・・・。
いえ、私達のことを
何か勘違いしておられるのではないですか？」

「勘違いだと・・・・・・・。」

次回へつづく・・・・・・・

第０２８話　『理』

勘違い？それってどういうことだ？
人間兵器と理解しているってことが間違っているのか
それとも、まったく別の勘違いだろうか
とにかく聞いてみないことにはわからないな。

「勘違いってどういうことだよ。」

少し考えごとをする仕草を行う。
頭の中で内容をまとめているのだろう
目を細め、天井を見上げて小さな声で

「どこから説明すべきでしょうか・・・・・・」

などと言っている。
基本、何も知らない俺は最初から全ての情報が知りたい。
余すことなく、予想ではない真実の情報を。

「わかりました。それでは最初から」

「頼む」

「私たちは、悪を防ぎ抑止するために生まれました。
それはご存知ですか？」

悪を防ぎ抑止する。秩序を乱す者を御する力。
それは確か見たことがあった。

「知ってる。ノートで見た。」

「では、悪とは？」

悪か、改めて言われるとちょっと戸惑うが
一般的な視点でみるとすれば

「犯罪者とかじゃないか、魔術使って悪いことしたり」

「わかり安い悪は、それですね。」

わかり安い悪？わかりにくい悪とかあるのか？

「例えばの話ですが、道端にはえている花。
それを採って髪飾りにする。これは悪ですか？」

「花を採るか・・・・・。悪じゃないかな」

花を採るだけ、誰にも迷惑かけてないし
誰かが育てた花なら悪な気もするが道端の花だ。
少なくとも俺は悪だとは思わない。
思ってないからこそ、妹に花の首飾りも作ってやれた。
妹も喜んでくれたんだ。

「では、花の立場から見ればどうでしょうか？」

花の立場？
それは考えたことは無かった。

花からすれば、動けないことをいいことに

首をもがれ、殺される。
一方的に死を与えられたことになる。
とするとだ

「花からすれば、悪だな。」

「はい、そうなります。
いろいろな観点から見れば
全ては悪になりうる可能性がある。」

「なるほど・・・・・。」

確かにそうだ
その考え方は今まで無かった。
それを引用するのであれば
悪を裁いた者ですら、悪人からみれば悪になる。
それのループがとめどなく続き
深く考えれば考えるほど、深みにはまるエンドレス思考。
改めて考えると悪の定義って難しいんだな。

「だからあいつらが?」

「はい。ヒノ達が生まれた時。
すでに法を取り締まる機関は存在しました。
魔術には魔術で対抗し
それらを取り締まるための力。
その力が彼らにはありました。」

「ほう。」

「その力はあまりにも強大で
自分たちこそ正義だ。他は全て悪とみなす。
そんな法が存在していた時代です。」

「じゃあ、あいつらの存在はそれを否定するために、か？」

「表向きは・・・・・・ですね。」

表向きはか、なにかと引っかかる言い方をする女だな。
つまりは、絶対政治を行っていた者達の対抗手段として
あいつらは産まれた。そして元の組織を抑止した。そういうことだろう

「で、その組織はどうなったんだよ。」

「ヒノ達が壊滅させました。その後はヒノ達の定める法で
すべての悪を処理してきたつもりです。」

「そうか・・・・・・。」

わかったような気がする。だが全容解明には至っていない。
レクアは敵じゃない。本来ならばヒノ達も
でもなんで俺は殺されたんだ？鍵ってなんだ？
封印されていたことも説明がつかない。
まだまだ、聞くことは沢山あるな。

「・・・・・・ですが。」

「ん？」

「私達は、人間なんです。機械ではないし、兵器でもない。
老化しないように、可能な限り戦闘力を高めた存在。
新しい人種だと思っていただきたいのですが・・・・・・。」

「人？だと。」

「はい、ベースとなる構成物質は勇人様とほぼ同様です。
機械の脳でもなければ、肌も無機物ではなく有機物です。
少し違う。それだけの存在。人なんです。
一部例外で、外部ライブラリから情報を仕入れたり
機械的な部分を持っているものはいますが・・・・・・。」

「人か・・・・・・」

人にしか見えない。それはあっていたのだ。
有機物でつくられ、ちょっと強化しただけの人
兵器っぽいところは微塵も無いはずだ。
不老不死という点だけみれば俺も同じだ。
俺はどちらかというと、人よりレクアよりかもしれないな。

「人、であれば過ちを犯すものですよね。」

人ならな。
気づかない内に犯罪を犯してることだってあるし
気づきながらもやめれない人だっている。
人とは弱いものだ。

「ヒノ達は悪を裁くと同時に、自らを悪だと認識するようになっていました。
ですが、ヒノも人です。悪を裁く、それは死と同様。自害は出来ま

せんでした。」

「自殺なんて、誰だって嫌だしな。怖いし、恐ろしい。」

「しかし、悪を裁く目的の存在であるヒノ達は、悪を否定することはできません。
ですから、悪を変換。違う形でとらえて処理することにしました。」

違う形か。自分に都合のいいように情報を書き換える。
それは簡単だが、機械の脳ではできないことだな。

「そこでヒノ達は大きな過ちを犯してしまいます。」

大きな過ち。人ならでは
都合のいい変換は、自らを救うことの出来る唯一の手段。
プログラムによる演算では出ない答え。
それを導きだしたということか

「変換の内容はこうです。自分が悪となった原因は自分を産んだ人間のせいだ。
その悪を抑止すれば、自分たちは悪じゃない、自由になれる・・・・・と。」

「じゃあ、あいつらは?
ヒノは、研究者達を・・・・・・。」

「殺しました。」

次回へ続く・・・・・・。

第０２９話　『真翼』

人間兵器の過ちか・・・・・・。
ノートに書いてあった消息不明ってのはこういうことだったんだな。
研究者は死んだ。自分たちが作った存在によって。
何か複雑な気分だ。ヒノ達の気分もわからないこともない。

「それで、その後はどうなんだ？」

「研究者達を殺したヒノ達は、悪を倒して自由の身となりました。
悪を討つことを辞め、思い思いの生活を送り始めます。」

自由の身か、悪を討つことだけに生きてきた。
俺にでは想像できない何かがあるんだろう。
初めて手に入れた自由は、楽しく、良かったことだろうな。

「だが、それだとまた・・・・・・。」

「そうです。悪が世界に満ち始めます。
ですが、ヒノ達は自分の意思で悪を討つことをためらいました。
本当の悪に、自分達がなってしまうから
逃れられようの無い悪となることを恐れたのです。」

以前は命令されたから自分の意思では無かった。
しかし、今度は自分の意思で
擦り付けようの無い悪がそこにはある。
人によっては善だと言ってくれる人もいるだろうが
少しでも悪だと思う”もの”がいれば悪と考えることもできるから。

「そこで新たなプロジェクトが始まります。」

「新たなプロジェクトだと？」

「ヒノ達、ファーストプロジェクトで生まれたのは２５体です。
その後、私たちのような存在を
産み出すことができなくなったわけではありませんでした。」

「研究者は死んだんじゃなかったのか？」

「はい、確かにメインの研究者は全員なくなりました。
ですが、研究者の資料を持っている人物が別にいたんです。
その資料から同性能の者やそれ以上の能力をもった
存在を産み出すことに成功しました。
それがセカンドプロジェクト。
私はセカンドタイプの”真翼”になります。」

ファースト・・・・・。
セカンド・・・・・・。
ファーストとセカンドは違ったのか
ファーストが２５体ってことは
セカンドは１０体か？
それと、真翼（しんよく）ってのは呼び名？
人間兵器じゃ味気がないし、兵器ではないと
レクアも言っていた。たぶんそうだろうな。

「その真翼が、新たな法になったと？」

「はい。以前の失敗を踏まえ
悪の定義を研究者達なりの考えで作ったのです。

それが、法律となってテクノバンクに収められていました。」

「なるほどな・・・・・・。」

「これが、私達が産まれた理由となりますね。」

だんだん分かって来たぞ。
おそらく、セカンドの真翼が
ファーストの真翼を封印したんだ。

対等な力を持っている存在同士が闘えば
どちらに勝利が与えられるかわからないし
一応は同胞なわけで、ちょっとした困惑もあったのかもしれない

研究者の資料を持っていたってことは
セカンドの産みの親は
ファーストの研究者に関係していたはずだし
恨みのような物もあったのかもしれない。
ファーストの真翼を討つ理由は沢山ある。

それと遺跡は、研究者の保険みたいなものだろう。
３５の柱があった説明がつく。
そして、ファーストの真翼はあそこに封印されていた。
なぜ封印がとかれたのかは分からないが・・・・・・。
鍵ってのもまだわからないな。

「レクア、鍵ってなんだかわかるか？」

「鍵、ですか？」

「あぁ」

腕を組み、顎に手をあてて何か考え事をしている様子だ。
今まで即答して来たのに、何を考える必要がある？
もしかして知らないのか？

「ヒノが言っていた鍵ですよね。」

「そうだ。まさか、わからないのか？」

「残念ながら・・・・・説明できません。」

説明できないだと、なぜだ。
知らないってことじゃないのか？

「いえ、知らないわけではないのですが
今は説明できません。」

「なんでだよ。」

「それも、詳しくは説明できません。」

くそっ。なんでここで説明を渋る必要がある。
何か重要なことでもあるのか？
俺が知ってはいけないなにかが

「今は、ってことは後で来たときには
説明してくれるのか？」

「時が満ちれば・・・・・・。」

「そうか。」

すっごく気になるぞ。
力づくで吐かせ・・・・・れるわけはないよな。
あきらめるしか無いか、悔しいけど

「そういや、トイレ、行きたいんだけど」

「トイレですか?扉を出て
まっすぐ入った突き当たりを右へ
その通路の右側にあります。
入り口にトイレの表記がされております
行っていただければ、その表札で理解していただけると思いますよ。
」

「わかった。ちょっと行って来る。」

う~ん。いろいろな情報を得て頭がパンクしそうだ。
１８００年前の存在が、今の時代にも残っていた。
その封印が解かれて、何か新しい動きを見せようとしている。
その動きとはなんなんだろうか。
悪を討つことが目的ならばまだいいんだがな・・・・・。

さて、これからどうしようかねぇ。
とりあえず、トイレ行ってそれから考えるとするか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ウィーン。本日四度目の扉の開く音。
レクアの視線の先には勇人の影が

シットリとした弾力のある唇が小さく動く。
そして勇人には聞こえない
とてもとても小さな声で

「目覚めていただくには、まだ早い。
もう暫くお待ちください・・・様。」

次回へつづく・・・・・・。

第０３０話　『第３の』

「ふぅ、スッキリした。」

俺はトイレを済ませ、改めて廊下の様子を伺ってみる。

白い部屋と同じで、廊下も白いのかと思っていたのだが
部屋とは違う雰囲気で廊下は作られていた。

黒を基調とした壁には、文字のような物が部屋に向かって書かれている。
その文字は白く淡い光を放っており
先ほどの部屋の壁と、同じような素材を使っていることが見て取れる。
文字の下には２０ｃｍほどのラインもあり
それも同じ光を放っていた。

「しかし、でかそうだな。この建物」

でかそうだ。そう思った理由はトイレの場所にあった。
まっすぐ行って突き当たりを右。
その廊下の右側だ。と説明は聞いていた。
たったそれだけ、それだけなのにだ。

トイレまでの所要時間１５分。

正直あせった。
いくら歩いてもなかなかトイレがみつからない。
第２３研究室やら、第３調理室

第5ガレージなど、やたら第なんとかって数字の多い部屋の数々。
調理室なんて、よっぽどの規模じゃないと3部屋もいらないだろうよ。

それに、歩いた距離もなかなかかのものだったのだが
トイレがあったその先、廊下はまだ続いていた
直進なのに、先が見えないほどに。

けど、これだけの規模なのに。
まだ二人しかあっていないのが不思議でならない。
レクアとカレン。
カレンは数に入れる必要ないかもしれないが
とにかく二人だ。

そろそろ他の人が見たいな。
そう思っていたときだった。

後ろから、カツン、カツンとだれかが走る音。
その音は徐々に近づいて来ている。
どうやら、第三の人に会える予感がしてきたぞ。
俺の思いが通じたのか?

カツン、カツン。乾いた音が廊下一面に広がり
その音は俺のすぐ後ろまでやってきた。
せっかく近くまで来たのだから振り返ろう。
そう思って、俺は回れ右を行った。

「ん? いない・・・・・・。」

カツン、カツン。まだ音はなっている。

場所はというと、俺の進行方向だった。
その音は知らない間に俺の場所を通り過ぎていたのだ。

振り向くタイミングが良すぎたのか？
しかし、わざわざ狭いスペースの左側を通っていくのか
せっかくの顔を拝むチャンスだったと言うのに、惜しいことをした気分だ
肩を落とし、俺はしぶしぶ回れ右を行う。

「は？」

回れ右を2回したのか？
いや、違うよな。合計2回ではあるものの3回はしていない。
俺は先ほどの進行方向を向いているはずだ。
証拠として、右のスペースは先ほどと同じぐらい開いているし。
後ろを振り向くと、デフォルメされた男性と女性の形をした絵が描いてあり
トイレがあることを証明させている。
じゃあなんで？

カツン、カツン。
音はまだなっていた。音のおかげで距離感はわかる。
数メートル先に単調的なリズムを刻んでいる者がいることはわかる。

なんとか状況を把握しようと、音の状況を分析はじめるが
単調なリズムは狂い始め、次の音を出すことを手間どうようにためらう様に、音の間隔は広くなっていく。

カツン、カツン・カツン・・カツン・・・カツン・・・・・。

音の間隔は広くなり、極限まで広がった間隔は
次の音を出さずに奇妙な沈黙を作りだした。
出所は止まっている。5メートルほど先で

「まさか・・・・・・。」

俺の視線の先には
ただ真っ直ぐな、先の見えない廊下が映るだけだった。

次回へつづく・・・・・・。

第０３１話　『消失』

俺は音がしていた方を注意深く入念に調べてみたが
どの様に見渡しても脳内に送られる映像情報は
ただ長いだけの廊下だけであり、
音を出せるようなものは見当たらない。

「あれれ？勇人さんじゃないですか？」

スピーカーを通した音ではなかった
ほんの５メートル先からリアルな女性の声がしたのだ。
しかも俺の名前を知っているし
なにか記憶にあるような声でもある。
だが俺の脳は記憶をサルベージできるところまでは至っていない。
それに、俺には幽霊の知り合いなんていないはずだ。

「勇人さん？もしかして私の姿、忘れました？」

忘れました？って
透明だから何も見えてないんだが
しゃがんで床を見てみたり
背伸びして天井を見てみたり
超至近距離で壁を見てみたり
といろいろしてみたのだが
俺の見える範囲に誰も存在しない。

「もぉ、何してるのです。ここですよここ。」

声の方向は間違いなく進行方向ではある。

声の出所もなんとなくわかるんだが・・・・・・。
これは、どうしたものかねぇ。

声の主の検討もついてきた。
幽霊ではなさそうだが、なぜ何も見えない？
たぶんこの辺りのはずなんだが・・・・・・。

「うわぁ！！危ないのですよぉ！！
もうちょっとで手が目に刺さる所なのです。」

「へ？」

俺は何もない空間に手を向けただけだったはずだが？
目なんてどこにもないし、なにいってるんだ。
なんのことかわからない。
俺は確かめるために再度手を伸ばす。

ムニュ・・・・・・。

なんとも言えない好感触。
突き立ての餅のような柔らかい感触が
俺の指先を通して伝わってきた
何も無いはずの虚の空間から
生み出される弾力ではない。
空気がこんな感触ならば
すでに俺の握力は相当の物になっているはずで
とまぁ、それほどに良い感触なわけだが。

「なんだこれ？」

ムニュ、ムニュ。

人肌の暖かさの餅の感触はまだ続いている。
なんとも心地いい感触ではあるし
いつまでも触っていたい。そんな気持ちにさせるものが
何も無い空間から生み出されている。

これは・・・・・もしかして
ふと、この間の妄想が俺の思考にもぐりこんでくる。
アリスの再会の際におこなったあの妄想。
想像ではあるものの、夢の詰まったマシュマロの感触。
それが答えだと、俺の脳は挙手して訴えているのだ。

「なに、してるのです？」

まただ。なにもない空間から同じ声がする。
今度の声は少し声のトーンを下げ、音量は大きくなっていて
ちょっと怒っている感じだ。
俺の想像どおりのところを触っているのならば
たたかれたり、殴られたりしてもおかしくない部分ではある。

とりあえずだ、おそらくこの声の主は多分あの人だ。
この人との関係はできれば崩したくはない。
定期的に会うことになる人物だからであって
言い訳はしておく必要がある。
言い訳の入り込む隙間も若干ではあるが残っている。

「なにしてるって・・・・・・
誰も見えないから、何をしてるのか俺にもわからない。
何かを触っているのは確かだが・・・・・。」

「ふぇ？・・・・・なるほどぉ！！
どぉりでそんなリアクションになるわけなのです。」

なるほどって。理解してなかったのか？
てか、もうこれ。
この口調。
なのです口調は多分じゃない、絶対あの人だ。
ドジそうな所も見た目のまんまで
この状況に陥ってしまうことも理解はできる。
ステルス魔術でも使ってるんだろう
高位魔法ではあるが、あの人なら使えそうだ。

「あぅ。失敗なのです。
ちょっと待ってください。」

待ってください。そういわれたから俺は待つんだ。
俺の手を長い間この弾力に包ませていたいから
そんなことは微塵も考えてはいない。
待てといわれたから待つ。
ただそれだけだ他意はないのだよ。他意は

そんな葛藤？にも負けずに忠実に支持を守る俺の前には
まだ人の姿は見当たらない。
序所にではあるが、足の先から順に姿を現せてくれている。

ピンク色のスニーカーが現れだし
順に紺色の靴下、白いムチムチな太もも
赤いスカート、ピンクのシャツ
鎖骨のくぼみが強調された首筋と

どんどん姿が現れだす。
その姿は、俺が以前見たことのある服装ではなかった。
けど、これはこれで♪

全ての姿を現した人物はやはり俺の想像していた人であった。
一部例外はあったものの・・・・・。

「もう。いい加減ほっぺた触るのやめないですぅ？」

そう、ほっぺただった。
俺の記録表の詳細記入欄に感触の詳細を書き込む予定だったのだが
書き加える項目は別だったわけだ。

というか冷静に考えればわかったはずなのだ
目の前の人物が持っている山の標高が
低いということは事前に理解していた。
残念ではあるが、あの山ではこの感触を生み出すことは無かったはずだ
うん、非常に残念だ。将来に期待するとしよう。

とまぁ、そんな俺の感想は置いておいて
なんでこの人がここにいるんだ？
アネツィアにいるはずじゃぁ。

「勇人さん。これで誰か理解できたです？」

俺の疑問は目の前の人物の質問によって打ち消される。
この人は知っている。見たこともある。
会話したことさえある。せっかくなので答えておこう。

「ミリアさん。」

「正解なのですよ！」

えへへっと天使のような笑みで答えの発表をしてくれる。

今まで見れてなかったからあの行動をとっていただけであってだ。

この女性は見ればわかる。

俺の脳に大きめの刃のついた彫刻等で削ったようなトラウマを

かなり濃い影ができるほどに深く刻んでくれた人物なわけだ。

このトラウマ。秋刀魚のトラウマはなかなか忘れようがない。

それに見た目は若いが美少女なわけで

俺の美少女フォルダに分類分けしてきっちり保存されているのだ。

因みに、最近あった女の人はほとんど全てが美女なので

美少女フォルダがどんどんと埋まってきている。

そろそろ美少女フォルダをさらに分けないとダメだと思えるほどだ。

まぁ脳内なので関係ないかもしれないけどな。

でも、なんでここにこの人が？

「私、レクアのところに交渉にいくのですが

勇人さんも行くのです？」

「あぁ。戻ろうとしてたところ

けど、ミリアさん、レクアと知り合いなのか？」

「そうなのですよ。

かなり前からの知り合いなのですよぉ。」

えへん。と胸を張り威張って見せるミリアさん。
胸をはることで山の標高がはっきりとわかる。
その標高は・・・・・・可愛そうだ数値にはしないでおこう。
それよりも会話だ会話。

「なるほど。じゃあ交渉ってなんだ?」

交渉という言葉を耳にした瞬間
ミリアさんは少し曇った顔をした。
そして俺に小さく耳打ちをしてくれる。

「マジ?アネツィアが?」

「マジなのですよ。」

「嘘だろ・・・・・・なくなったって?」

次回へつづく・・・・・・

第０３２話　『白い街』

レクアがいるところに着くには
歩いて１５分ほどかかる。
この間に俺はミリアさんから詳しい話を聞いた。
というより記憶を貰い受けたというほうが正しいか。
簡単な説明のあと、アリスが使ったことのある
記憶転移魔法を使って俺に当時の記憶を預けてくれた。

その記憶というのは

アネツィアの突然の崩壊。

あの大都市アネツィアが崩壊した。
巨大な、とても巨大なあの都市が
全て残らず灰と化し、跡形すらなくなった。

ミリアさんの曇った顔を見る限りは
この記憶はまぎれもなく真実の情報であり
灰と化したアネツィアは現時刻に存在しているはずだ

雄大にそびえ立っていた噴水は、すでに灰と化していて
そこから流れ出ていた水は枯渇し、乾きに乾いている状況の世界が
水の都であったあの街の。正反対の姿としてそこに存在しているのだという。

こんな話信じろっていうのが無理なことだと思わないか？
けどそれは真実であり、受け止めないといけない話なのだという。
なんせミリアさんからもらった記憶だからな。

では誰がこんなことを?
真っ先に頭に浮かぶのは真翼達の姿だ。
しかし、ミリアさんからもらった記憶を手繰ると
その答えはＮＯである。

真翼達はヒノがスクランブル作戦によって転移してしまったので
散り散りに霧散していったのだという
鍵である俺が生きていることは、おそらくしらないはずで
ヒノの探索にでも出たのだろう。それかアリス達の探索だ。

じゃあだれが?と思うだろう。
それは記憶を手繰れば答えがでてくる。

あの日、ミリアさんは俺を送りだした後
こっそり後をつけていた。
目的はアリスとの自然な会話だ。
隠れアリスファンであるミリアさんは
俺があのピンク一色の店に入ってから
しばらくして店に入り、俺の心配をしたような形で
自然に会話に入るつもりだったらしい。

しかし、それは突然現れた真翼の存在によって
儚いシャボン玉の如く淡い幻想と化した。

ミリアさんは真翼を確認している。
その存在が危険だということも。

突然噴水の中央に時空のゲートが開いたと思ったら
ヒノ、メイ、少年、青年、童女、女性の順にゲートから現れ

作り出した光景は異様なとしか言いようがなく
何が起こるかわからない。そんな空気を作り出していて。

あいつらは住人に危害をくわえる雰囲気では無かったものの
ミリアさんは危険だと判断し、最悪の状況をさけるため
噴水の周りから順に煙が広がるような速度で
できるだけ自然に強制転移魔法を住人に使ったのだ。

転移場所は無駄に広いこの研究所だ。
混乱を避けるために移動先の空間には
睡眠魔法を仕掛けておいて
住人全員が眠りにおちているらしい。
とっさの判断としてはかなり抜け目のない方法を取っていた。

あの時、街の静寂さを生み出したのはミリアさんだったのだ。

それで、レクアに合いに来たのは住処の確保。
危険を避けるためだとはいえ
住人全てを強制転移させたわけだから
住処の確保はミリアさんの責任だというわけだ。
本来ならば平穏を取り戻した水の都に、何事もなかったかのように
送りかえせばよかったのだが
真っ白な灰と化した今のあの町に戻すわけにもいかなかった。

なぜ住人に転移魔法を使ったのかというと
真翼には転移魔法を使うのは危険だと判断したらしい
もしマジックキャンセルでもされたら
その後太刀打ち出来なくなるだろうし
とにかく真翼に手出ししないほうが無難だと判断したのだ

それと、俺たちが転移されなかった理由だが
アリスの店。アリスのカウンター付近には
防衛のために防魔シールドが備えられており
魔法の類を受け付けなかったからだという。
そんなことはまったく知らず
その時俺はのんきにシャワーでも浴びていたのだろう。

全ての住人の転移を終えたミリアさんは
自らも転移して、街の様子を見ていたらしい。
住民を移動させたことを確認した後
戻るつもりだったらしいが
アリスがゲートを開いていたので
ゲートを開くことができずにいたのだという

その後は俺が体験したとおりで
なんとかスクランブル作戦のおかげで
事なきを得たわけだが

真翼達はというとスクランブル作戦の後
ヒノ達を探すためか散り散りに去っていったのだが
去って言った後、噴水の頂点に、新たな人影が現れたのだ。

その人影は6枚の翼によって天使に見えるような風貌で
翼は闇に染まっており、艶のある漆黒の黒い翼を持っていた。

金色の瞳が、噴水からの光りで照らされ
無垢な表情が硬質のガラスのような頑なさを出し
一つの強固な意志を持っていると想像できる。

いきなり現れた少女は、自らの翼をすばやく一振り。

翼からは羽が一本。鋭く風を切り飛び出してきて
噴水の頂点にサクッとささる。

それが悪夢の始まりだった。

見る見るうちに噴水の頂点は色を失い。
その進行は、まるで紙を燃やしたときのように進み
アネツィア全体を絹のような艶のある白い街へと変化させた。

それで仕事を終えたのだろうか。
少女はその変化を見届けた後。
漆黒の翼によって生み出される浮力で
優雅に羽ばたき飛び去った。

その後は言うまでも無い。
白いだけの街と化した街は
風によって崩れ、その後降った雨に流され
跡形も無くなった。

これが俺が見たミリアさんからの記憶だ。

ヒノ達だけでも手に負えないのに
街一つを消すほどの力を持った存在まで現れた。
今後この世界はどうなっていくんだろうか？

「終焉の時・・・・・・か？」

次回へつづく・・・・・・。

第０３３話　『再開』

ウィーン。
何度も聞いた聞きなれた音をだし扉が開く。
俺とミリアさんは長すぎる廊下を渡り
レクアがいるはずである白い部屋まで歩いてきた。
歩く道中にアネツィアの話を聞いて、ふと俺は思い出す。

『破壊の翼　英雄の手によりこの地に封ず
封印解くべからず　新たな世界を望まなければ
始まり　終わり　それは隣合わせで　とても近く　遠い存在
終焉の時は今では無い
悠久の時の中で　始まりと終わりは一つの意思に』

もしかしてこの石碑に刻まれた文字の
終焉の時が来たのかもしれない。
不吉ではあるが可能性は高いのだ。
柱だったものは開き、中にあったであろう”もの”は無かった。
封印がとかれてしまったと考えるのが道理である。

破壊の翼っていうのも今思えば納得が出来ないこともない。
アネツィアを一瞬にして灰と化した物は、翼から抜け落ちた羽であり
翼は黒く、破壊の翼を想像させるには材料が足りすぎている。
何の疑いも無く、その少女が持つ翼こそが破壊の翼だと理解できる
のだ。
いったい何が起きているんだ・・・・・。

自動ドアの扉をくぐり、レクアの大人びた姿を確認した。
どこからか持ってきたのか、木製の白い椅子に腰掛け
左足を上にして組み、リラックスモード。
片手で持つには重そうな分厚すぎる本を両手で持ち。
パラパラとページを捲っていた。

「あら？」

扉の音で気づいてくれたらしく俺たちのほうに視線を向ける。
あら？の『？』の部分は、ミリアさんに向けられているのだろう。
視線はすぐに俺から外れ。ミリアさんの小さすぎる体を映している。

「ミリア？ひさしぶりね。どうしたの？」

「レクア、お願いがあるのですよ！！」

レクアの口調は俺との会話で見せるものではなかった。
俺への敬語も取り繕っているものではなく
自然に出ている言葉ではあったのだが
ミリアさんに向ける言葉はさらに自然に紡がれた言葉で
レクアの素の言葉がミリアさんへ向けられていた。

ミリアさんはトタトタと小走りで
小動物のようにレクアのところへ走る。
途中なにも無いところでつまずいたりしていた
ミリアは見た目のとおりドジッ娘のようだ。

「３万人ぐらい収容できる部屋を貸してほしいのです！！」

「3万人も？ミリア、今度は何したの？」

「悪いことはしてないのです！！とにかくすぐ部屋を貸すのですよ！！」

「・・・・・もう少し良い頼み方できないのかしら？
もう内容は知ってるから使っていいわよ。
今開いてたのは、第1から5番だから。
そのドックを貸してあげる。」

「ありがとうですっ！」

「その代わり・・・・・・わかってるわね？」

「例のやつですか？」

「そう♪」

「わかったです。またブランジュに頼んでおきます。」

「助かるわ♪」

そんなやり取りが行われた。
交渉といっていたが、レクアはすぐに了承してくれた。
ブランジュの名前が出てきたことが気になるが。
交渉なのだから、変えのものは必要なわけで。
何か変なものでも作らせるんだろう
あのおっさんのことだから、いろいろやりそうだしな。

さぁて、俺はこれからどうしようか・・・・・。

「そぉだ。勇人さん。今暇です？」

「暇ってこともないとは思うが・・・・・・なんだ？」

「えっと、できれば住人達に説明をして回ってほしいのです。
すんなり貸してもらえると思っていたので
開いていた1から5番ドックに、あらかじめ住人は眠らせてます。
そろそろ起きるころですから・・・・・・。」

「混乱を防ぐ意味でも・・・・・・か」

「そういうことです。」

「わかった。」

「ありがとうです。」

一番近いのは一番ドックだ。
場所を聞いてミリアさんと一緒にそこに向かう。

扉を開けるとそこはとんでもない広さの部屋だった。
３万人を５つの部屋で収容できるぐらいだから
ある程度の広さは覚悟していたものの
想像を絶する広さで、ひとつの部屋で３万人ぐらいなら
収まるのではないかと思えるほどの広さだ。

その部屋の鉄製の冷たい床には
眠っている住人達が寝そべっていた
すでに起きている人も、状況の把握に戸惑っている。

おきている人は少ないが
まずは優先して起きている人に説明しよう。

けど、最悪の状況になっていなくて良かった。
住人全員がヒノ達に消されてしまった可能性だってあったのだ
ミリアさんのずば抜けた魔力の総量と咄嗟の判断のおかげだ。
ドジな面もあるがこういうとき役に立つタイプなのだろう。

「そういえば、アリスとレナ。あいつらどうなった？」

「えっアリスさんたちですか？わからないです。
自由歪曲転換現象で飛ばされた人たちは
どこに行くのか検討がつきませんので・・・・・・。
勇人さんに会えたのも偶然ですし。」

「そうか。もしかしたら、ここにいるのかと思ったんだが」

「すいません。私の力不足です。」

「いや、そんなことないと思う。３万人を救えたのはミリアさんの
おかげだ。
自信を持っていいと思うぞ。」

「そうです？」

「ああ。」

「なら良かったです。・・・・・・
あっ、そういえば勇人さん？」

「なんだ？」

「なんでアリスさん達のことは呼び捨てなのに
私のことはさん付けなんです？」

改めて言われると確かに俺はさん付けをしていた。
特に理由はないし、無意識でのさん付けだ。

「無意識・・・・・・だな。」

「じゃあ、私のことはミリアって呼んでもらってかまいませんよ
なんならちゃん付けでもいいのですっ！！」

「おう。わかった。」

「じゃあ呼んでください。ほらっ！今すぐです」

「・・・・・今？」

「はいっ！くるのですよっ！！」

「ミリア。」

「はいです。」

身長さのおかげで、上目使いな笑顔だ
その大きな瞳が細くなり
その瞳には天井のライトが反射されてキラキラしている。
ほんのり頬も赤い気がするが、気のせいだろうか？

「じゃぁ、引き続き説明開始です！」

「おう。」

アリスやレナも心配だが、あいつらならなんとかやっているはずだ
別の真翼にさえ見つかってなければいいのだが・・・・・。
心配ばかりしても仕方が無いし、目の前の仕事をこなそう。

しばらくしてかなりの人数に声をかけることができた。
声をかけた人にも協力してもらい
この人数の割には簡単に説明が終わりそうだ。

すでに起きた人のにはほぼ説明し終わっている。
後はあの角に立っている少女ぐらいだ。

「あれ？あの娘は・・・」

アネツィアも広いので
これまで見たことがある人はいなかったのだが
その少女には見覚えがあった。

濡れてはいなかったものの
背中が大きく開いた服装は同じで
床に着きそうなぐらい長いツインテールの髪は
天井からのライトを反射し、銀色の光沢を強くしていた。
その少女は、噴水の目の前にいたあの少女だ。

かなり印象にも残っているから間違いない。

少し遠いが、周りの人には説明が終わっていたので
その少女にいまの状況を伝えるために
俺は寝転んでいる人達を避けて少女のところへ歩き出した。

次回へつづく・・・・・。

第０３４話　『イヴ』

「よぉ」

特に知り合いということでもないのだが
なんだかんだで顔見知りではあるので
少しなれなれしい雰囲気で
目の前の銀髪の少女に話しかける。

「・・・なに？」

少女は、少し不機嫌そうな雰囲気で
俺の挨拶に返事をしてくれた。

この間あったときと同じで
目の前の少女の瞳は吸い込まれそうな金色の瞳だ。

ただ違うのは笑顔ではないということ
なれなれしくいったのは失敗だったか？

まぁ気を取り直して本来の目的を遂行するとするか

「あのさ・・・いきなりこんなこと言うとびっくりするだろうが・・・・・」

「なに？」

先ほどと同じような声のトーンで
もう一度内容を聞き返してくる。

一瞬の沈黙の後。
普通ならば驚くであろう
アネツィアが無くなったという
衝撃的な事実を告げることにする。

「アネツィアが無くなった。」

「そう。」

そう。たったそれだけの返事だった。

いままで声をかけた人は
百発百中で驚きの表情か疑いの表情を向けてくれたというのに
目の前の少女は『そう』の一言だけ発して
特に興味もない様子だ。

興味がない。

どうでもいい。

そんな感じが全身から放たれている。

「なぁ、普通さ、もっと驚かないか？」

「なんで？」

「いや、だって無くなったんだぞ。
あのでかすぎる噴水都市のアネツィアが」

「それで？」

本当にどうでもいいらしい。

まぁ少女のリアクションはどうであれ
内容は伝えたわけだし
俺の任務はあと少しで終了だ。

とりあえずこの少女に
寝泊りする場所はここを使っていいと
それだけを告げてその場を去るとしよう。

「・・・・・知ってたから。」

「えっ？」

「なくなったの」

「まじかっ！？」

「まじ・・・・・。」

びっくりさせるどころか
逆にびっくりさせられてしまった。

どういうことだ？
もしかしてもう他の人に聞いたのか？

「俺以外の人に？」

「違う。」

「じゃあ？」

「見てたから」

「はっ？」

「見てたの・・・・・・。」

見てただって？
遠方閲覧魔法でもつかったのか？
結構な高等魔法なはずだが
どう考えてもこんな幼い少女に扱える魔法ではない。

見た目は１０～１３歳ほどの少女に見えるが
もしかしてアリスと同じように
ただの童顔で年齢はそこそこいっている
と、いうことなのだろうか。
ん～わからん。ヒントがなさ過ぎる。

「勇人さぁ～ん！！次のドックいくですよぉ！！」

「おぉ～う！！」

考え事をしている間に
ミリアが痺れを切らしたようだ
入り口の近くで小さな体に見合わない
大きな声で俺を呼んでいる

「勇人さん！！はやくっ！！はやくです！！」

「わかったっ！！すぐいくっ！！」

どうやら長居は無用の用だ
少女もすでに話を終えたという感じで
天井の大きなライトを
特に興味もない雰囲気で見つめているし
入り口近くでがんばって声をだしている
ミリアさんの俺を呼ぶ声は止みそうにない

俺は、というと
もう少しこの少女と話をしたかったのだが
今のこの状況下におかれていては
そういうわけにはいかなさそうだ。

遠くのほうで
はやくっ、はやくっ、はぁやぁくぅと
リズムを刻みながら歌いだしている人がいるので
必要な情報だけを手短に説明を終わらして
名残惜しいその少女との出会いを断つとしよう。

簡単に、手短に、必要な知識だけを与えてやる。
どういうことかアネツィアがなくなったのは知っているみたいなので
説明はこの施設についてのことばかりだ。

因みに、説明している間は
そう、の繰り返しだけで
少女の視線は天井のライトへ向けたままだった。

ある意味俺。悲しすぎる。

「まっ、そういうことだから」

半分涙目になりそうな感覚を振り払い。回れ右
そして、少女を背にしてふと考えてみた。

そういえば、この少女の名前を聞いていなかった。

実際どうやって知ったのか
見てたとはどういうことか
そのことも気にはなる。

それにこんな美少女の名前を知らずに
この場所をさるのはあまりにももったいなさ過ぎる

こんなレアな出会いめったにない。

うん。ない。

よし、せっかくなので少女の名前だけでも入手しておこう

そう考えた俺は
もう一度回れ右をして
視線を少女の目へ向ける。

少女はというと、視線は天井へ向けたまま

「あのさ。もしよかったらでいいんだが
名前教えてくれないか？」

聞こえていなかったのか？
それとも無視したのか？
そう思えるぐらいの沈黙。
もしよかったらなんていったからか
よくなかったのだろうか。

「・・・・・イヴ
わたしの名前はイヴ
そう呼ばれてた。」

かなりの沈黙のあと
かなり小さな声でやっとのことで答えてくれた。

因みに『わたしの・・・』あたりから
俺の視線を金色の瞳ががっちりとらえていた

話が終わった後も
金色の瞳は俺を見つめている

だが、少し表情はかたい

というよりほんの少しではあるが
『悲しい』と思っている表情にも見えないことはない

いつまでそうしていただろうか
視線が交差している状態が
かなりの間つづいていた。

実際の時間にすれば5秒程度だろうが

体感的には２０秒は続いていたようにも思える。

見つめ終えた少女は
また天井を見上げ
それがデフォルトの姿勢なのかっ！！
とそろそろ突っ込みたくなるような
まったく同じ姿勢で天井のライトを見上げている

とりあえずは、少女の名前をゲットしたので
後ろ髪を引かれる思いの中
この部屋を離れることとしよう

だがその前に、せっかくなので俺の名前も
少女に覚えてもらうべく公開しておくことにする。

「俺は勇人だ。また機会があったら話でもしよう」

「そう。」

それだけを告げて
この大きすぎる部屋に見合わない
小さすぎる未練を残し
次のドックへ向かうことにした。

次回へつづく・・・・・・。

第０３５話　『次の目的』

「さぁて・・・これからどうしようか・・・・・・」

とりあえず全員に説明は終わったし
次は何をすべきか、それを考えていた

アリスやレナ達ことも気掛かりだし
無くなったアネツィアのことも気になる
真翼のことも気にはなるし
俺自身のこと、魔力の残量も気にはなる

全てのことが気掛かりで
すぐに取り掛かりたいことではあったが
何をするにもまず必要な
己自身の生命の確保
魔力の補給を最優先とさせていただくことにしよう
死んでしまっては何もできなくなるしな

まず、目指すべきはブランジュの下へ
そこで魔力水を入手する必要がある
大きな街に向かうという手もあるが
魔力水は意外に加工が困難で取り扱っていない店も多い

そのため、ほぼ確実にありそうな
ブランジュ宅に向かうのが手っ取り早いだろう
丁度ミリアもいることだし時空転移で送ってもらえそうだしな

「なぁ、ミリア」

「なんです？」

大量の人達に説明を終え
笑顔ではあるものの少し疲れている感じの表情で
首を傾げて大きな瞳を俺に向けてくれる

「ちょっと頼みがあるんだが・・・」

「頼みですか？いろいろ手伝ってくれましたし
エッチィこと以外ならなんでもいいのですよ」

少し頬を赤らめながら冗談を言ってくる
両手を胸の前に持ってきて
うつむいている表情からさりげない上目づかいをしてきたのだが
それは俺の男心に対してかなりの破壊力を持った武器として通用する

「エッチィって・・・俺をどんなやつだとおもってるんだよ・・・」

「エヘヘ、男は皆、獣っていうですからね！保険なのです」　？

自分ではわかっていないのだろう
先程の台詞と表情が男どもを獣の道へ向かわせるということを
そのうち見知らぬ男に襲われるんじゃないか？
そんなことを心配させてくれる台詞だ

「保険って・・・まぁいい、頼みってのはな
ブランジュの家に転移で送ってほしいってことなんだが」

「そんなことですか？おやすい御用なのです

私もそろそろ一回は戻ろうと思っていたところですし」

「本当か？助かる！じゃあ早速送ってもらえると助かるんだが」

疲れているミリアには悪いが
早めに魔力の補給は済ませておきたかった
あいにくお金がない為に魔力水の購入は
ツケになりそうではあるが

「いまからですか？いいですよぉ
けどその前にレクアに挨拶だけいくのですよ」

「ん？そうだな。助けてもらった御礼もまともに言ってないし
さすがにそのままにして置くわけにはいかないしな」

「そういうことです。では、さっきの部屋にもっどりぃましょぉ！」

そう言ったミリアは、大きく手を振り
先ほどの白いだけの部屋、中央に俺が寝ていたベッドがあるだけの
あの白く輝く部屋へ向かい歩き出した

第０３６話　『施設』

「あらためて思うけどさ・・・」

「なんです？」

「ここって広すぎないか？」

まったくもって率直な感想である。
もうすでになくなってしまった
あのアネツィアの街全体の面積よりひろいのでは？
そう思えるほどの広さである。

「ん～いろいろな統合施設になってますし
島全体を施設にしちゃってますから
無駄に広いのは当然なのですよ」

「統合施設？そういやぁ、ここって何する所なんだ？」

「ここですか？ほとんどの考えられる施設が入ってると思いますよぉ」

「ほとんどだと？」

「はいです。病院や書店、武器屋に、レストラン、道場もありますねぇ
面白いところでは闘技場なんてものありますよぉ」

「はぁ？マジか？」

俺は疑いの表情を向ける

「マジです。」

真顔で返される

「ほんとのほんと？」

念のためもう一度疑いの表情を向ける。
さらに疑いの密度を自らの目に移し濃くして
しかしミリアが返す返答は

「ほんとのほんとです。」

また、真顔だった。

ということは本当なわけだ。
まぁ、ミリアがわざわざ嘘を付くとは思えないし
無駄に広いってわかっているからそれほどは驚かないが
変な疑問が浮かんでくる。

「従業員とかどうなってるんだ？」

今のところレクアしかみていない。
カレンを入れたとしても
この施設の関係者は見た限りでは二人だ。

「ここは地下施設の研究施設や倉庫などがメインですから
あまり上の人たちはおりてこないんです。

島の上にはたくさんの店があって
たくさんの人が住んでますよ」

「それはすごいな。てことはブランジュの所行かなくても
魔法水なんて手に入るんじゃないか？」

あらゆる施設があるのであれば
魔法水なんてありそうなもの
仮に無かったとしても魔法具店に行く価値はありそうだ

しかし、ミリアの表情は俺の質問に対して
あまりいい表情とはいえない表情をしている
下を向きうつむいて考えているようだ。

「魔法水ですかぁ・・・むずかしいとおもうですが」

「えっ？だって、大概の施設があるんだろ？
魔法具店なんてのもありそうなもんだが」

「あるにはあるのですけど・・・」

ミリアの表情は険しいままだ
うつむきいたまま話すべきか話さないべきか
悩んでいるようにも見える
どうやら何か問題があるようだ。
俺の体の問題だろうか？
マジックキャンセルでも設置されているのか？

「なにか問題が？もしかして俺の体のせいか」

「いえ違いますよぉ、勇人さんの体のことは関係ないです。
むしろ条件的にはその状態のほうが有利ですし
けど多分・・・今の勇人さんでは店に入れないです
というよりはたどり着けないって言ったほうが正解かもですが。」

「たどり着けないだって？」

「この施設はちょっと特殊なのですよ
詳細を調べていないのでまだなんともいえないですが
ある一定の強さ以上でないと施設を利用できないのです」

「強さが条件ってことか・・・」

「はい、施設自体はこの島のいたるところに設置されてます。
お店もお金さえあれば普通のお店のように利用できます
価格も相場とほとんど同じですよぉ
ですが、おそらく今の勇人さんでは・・・」

「今の俺では？」

「地上に出て数分で・・・」

「数分で？」

「死にます。」

第037話　『地獄の影島』

「死ぬだって？どういうことだ」

「この島の名前ってレクアから聞きました？」

「いや、聞いてない」

「じゃあ、聞いたらなんとなく理由がわかるです。
なんと！！この島の名前は！！！！！」

左手は腰の辺りに
右手は俺の顔の前で
人差し指は俺の顔を指している

「この島の名前は？」

「地獄の影島です。」

「地獄の影島？また物々しい名前で」

地獄ってことで想像できるのは
血生臭そうなイメージだ
瘴気のようなものが一面に広がっていて
もちろん悪魔のようなとんでもない化け物がいて
だけど、そんなところに店を構えるようなやつっているのか？
あんまり想像できないんだが・・・。

「由来はですねぇ。地獄の影武者的存在であっても

まったく疑問が浮かばないぐらいほぼ地獄だからってことらしいです。」

「ほぼ地獄って、具体的には？」

「えっとですねぇ。空気はきれいなんです。
空も澄み渡るぐらいきれいな青空が
ほぼ毎日広がってます」

「ほほう」

「けど、魔物がとんでもないんですよぉ」

「あぁなるほどな・・・竜族とか大翼族でもいるのか」

「はい、具体的に言うとですねぇ
アルティメットドラゴンや
アークベルゼバブ
イミテーションフェニックス・・・」

ミリアが口にした数々の魔物の名前
あのレナであっても勝てるかどうかわからない魔物達の名前がずらり

アルティメットドラゴンは確認されている竜族の中では最強の竜
魔法が効かないのは竜族共通で
電撃、炎、冷気、を操り
鱗に至っては、ダイヤモンドですら豆腐のように切れる剣でも
傷ひとつつけることができないと言われている。

アークベルゼバブなんかも真闇族の最強クラス

島ひとつぐらいなら軽く消滅できるぐらいの魔力をあやつり
移動速度はマッハを超えるとか・・・

イミテーションフェニックスも同様で最強クラスの大翼族
名前のとおり不死鳥のような姿をしていて
全身から放たれる炎の温度はあらゆるものを溶かしつくすそうだ

「おいおい、どれも危険度Sクラス越えじゃないか！」

アリスとレナが同時に戦ってなんとか勝てるレベル
それがSクラスだと聞いている
俺なんかが遭遇すれば死確定だ

「そうです。しかも・・・」

「しかも？」

「群れで出ます。」

「あはは、群れって・・・・・群れっ！！？」

一瞬聞き間違えかと思ってしまった
けど確かに群れとミリアは言っている

「蒸れじゃなくて群れ？」

「群れです。」

「やばいな・・・・・。」

「・・・ヤバいですぅ。」

地獄の影島。まさにその名の通りなようだ。
俺はおとなしく島の地下に隠れて
魔法水はブランジュの家に取りにいくことにしよう

「けどさ、店主とか従業員ってどうしてるんだよ？
そんなところで仕事とかできないじゃないか」

「それがですねぇ、できるんですよぉ
人によっては頭を使って店を見えないようにしたり
結界なんかで守ってたりしますけど
それだと、お客さんもなかなかこないですよね？」

「まぁ、そもそも普通の人は行けないが
仮に行けるとしたら、店には入りづらくなるよなぁ」

「だからですねぇ。ほとんどのお店の店主はがんばってるんですよ」

「がんばってるって何を？」

「縄張り争い。」

「は？」

「魔物との縄張り争いです」

「危険度Ｓクラス相手に？」

「はい」

「それも群れに？」

「はい」

「マジかっ！？」

「マジです。」

視線と表情はいつものようで
真顔と俺の視線にがっちり合っている
疑う余地もない本当のことらしい

「ちなみに、地上に出るには
あそこの扉から出られますよ
くれぐれも間違えて外に出ないようにです。
暗証番号が必要なので簡単には出れないですが」

くるっと回ってすでに過ぎ去っていた
左後ろの鉄扉を指差す。
扉の中央には赤いランプが点滅していて
その横には入力キーが見て取れる
あれに暗証番号を入力するんだろう

「暗証番号知りたいですか？」

「・・・必要ない。まだ死にたくないし」

「はい♪それが賢明だと思います。
いろんな伝説とかがあったりするので

この島のネタには尽きないのですが
あとちょっとであの部屋につくですので
話はこれぐらいにしておくです。」

「まあいいさ。また落ち着いたら聞かせてもらう」

「はいです♪」

第０３８話　『絶対絶命？』

「たしかこの部屋でしたです？」

「あぁ、あってる。この部屋だ」

「じゃあ開けるですよぉ」

「おぉ」

白い手が伸び
ミリアの人差し指が
赤いボタンをおした

その瞬間だった

『ドォォン！！』

おそらくこの部屋の真上での爆発音
尋常ではないほどの大きさの爆発
扉の開くウィーンという音を掻き消し
施設を揺らし、響かせる

「なっ！？なんだこの音」

「ちょっとやばそうですぅ・・・」

さらに追い討ちのように
天井のライトが白から赤に切り替わり

同時に警告音のようなものも鳴り出した

「おいおい、大丈夫かこれ？」

「と・・・とりあえず、レクアに聞くですよ
レクアぁ、なんなんですこれ？」

椅子に座り本を左手に持ちながら
部屋に入ったミリアを出迎えるレクア

見た感じの様子では
思いのほかレクアは落ち着いているように見える

「あらミリア？これって・・・この音のこと？」

「そうですぅ、なんかやばそうですよぉ」

またも落ち着いた口調で
あたかも良くあることだ
そんな雰囲気をかもし出している

左手に持った本を閉じ
ベッドの上におく
動作はいたって普通の速度で
急ぐ様子はまったくといってない

ヒールの先が床に当たり音を鳴らしながら
壁に向かってゆっくりとレクアは歩き出す

右手をその白い壁にかざし

今にも触れそうなところで止めて
長い黒髪を揺らしながら振り向き
青い瞳をミリアに向けてくる

「みてみる?」

「みる?ですか?」

「そう、たぶん面白いものが見れるわよ」

レクアはそういうとそのまま壁に触れる
触れられた壁はそこを中心として
何も無い白から絵を描き出した

描かれた絵は緑に覆われた霧深い森で
その絵は動きリアルタイムで変化する
どうやら施設の上の状況を見せてくれる装置のようだ

その描かれた景色の中心には
ドラゴンが3匹
その内の一匹が特にでかい

そのでかすぎる竜は
濃い紺色の、黒とも見えそうな体で
太い手の先には漆黒の爪を携え
頭には金色の角を二本持ち
両眼は銀色に怪しく光る

口からは鮮血のような赤い煙がにじみ出て
その潜在魔力の高さをしらしめていた

アルティメットドラゴン

危険度ＳＳクラス

ちなみに最強の魔物とされる魔物は
ＳＳＳクラスであり、ＳＳクラスということは
準最強ということである
すなわち、超々々危険な竜なのだ

その横には
赤い体を持った紅竜がいて
さらにその横には
青い体を持った蒼竜がいた

紅竜と蒼竜も
危険度Ｓクラスである

その危険すぎる三匹の配置は
ちょうど三角形の形で
それぞれがその形の角を成していた

それだけを見る限りは
竜同士が縄張り争いをしているようにも見えるが
壁に描かれた絵はそれを否定していた

「やはり、そろそろ来るころだと思ってたんです。行商人さん」

「行商人だと？」

「そうです。私がいつもお世話になってるところの女の子ですよ
ほら、ここに立ってます」

そういったレクアは
人差し指をドラゴントライアングルの中心にむける
そこには小さな光がひとつ
黄金の光を放っていた

全身から黄金の光を放ち
元の服の色が何かさえわからないほどの
濃く練られた闘気を使ってたたずんでいる

使っている武器は
自分の身長の2倍以上で
太さはウエストとほぼ同じで
厚みは１０センチは超えるだろう
そんな大きな剣である

金色のシルエットを見るかぎり
その形は確かに女性の形をしている
映像が少し遠いためか顔は認識することはできないが
サイズを見る限りはどう見ても少女だ

「おいおい。この状況やばいんじゃないか？」

竜３匹ＶＳ行商人の女の子
そんな状況がやばくないはずはない
俺なら間違いなく絶対絶命である
レナやアリスでも勝てるかどうか
そんな状況である

だが、レクアを見る限りはまったく問題なさそうで
実際聞いてみても大丈夫の一点張りなので
本当に問題は無いのだろう

あの重そうな大剣を
片手で持っている所と
闘気の濃さを見れば
レナ相当かそれ以上の実力者だということはわかる
だが・・・

「ほんとうに大丈夫なのか？」

「はい。そんなに心配なさらずとも問題ありません
準備は終わっているようなので
もうそろそろ決着がつきますよ」

「そうか・・・それならいいんだが・・・」

この後思いもよらない映像が
目に飛び込んでくることを
このときの俺はまだ知らなかった・・・・・・

第０３９話　『ＶＳ紅竜』

俺が見た印象この映像の印象は
本当にこれって現実なのか？
まさにこれのみであった

１５０センチ程度の少女が
紅竜、蒼竜、極竜と
３匹の竜と３対１
それも危険度ＳＳクラスとＳクラス２匹だ

絶体絶命

そのはずであった

だが、映像を見る限りは
少女が絶体絶命

ではなく

竜が絶対絶命だった

少女が相手にするのはまずは紅竜
先手を打つのは紅竜だ

口から溢れだす炎が咆哮とともに
一直線に少女に向かう

赤や青、黄色の炎が

少女の目の前まで迫るが
炎は綺麗にかき消されることとなった

剣が青くひかり
炎の中心に向かうと
青い光は紅竜の口にめがけて伸びる
口まで到達したとたん
その光は弾けて消えた

少女がよけていれば
この霧深い森は炎に包まれていただろう
その行動によって
炎は跡形も無く消えていた
それと同時に
発射口である紅竜の口を氷でふさいでいる

どうやら氷系の魔法を付加していたようで
青かった剣はもとの黒へと戻っていた

「おぉ・・・すげぇなこの娘・・・・・・
まじで問題なさそうだ」

まさに率直な感想であった。
かき消された炎はざっと3メートルほどの幅があり
普通であれば避けるはずの攻撃
それを森のことを考えて
わざわざ炎を受け止めるのだ

「せっかくですから音も聞きましょう」

「おう。そうしてくれ」

スイッチがはいり
竜達のどすのきいた太い声
少女の黄金色の闘気によって巻き起こる風の音など
さまざまな音が部屋全体に広がる

少女は剣を地面に刺し
紅竜にとどめをさす体制に入るようだ

「舞い踊るは氷結の舞姫
その舞は時すらも止め
氷の宴は終わることなき悠久の舞
氷れ、凍れ、凍えて詠え・・・」

少女による氷魔法と思える詠唱が終わる
俺が聞いたことの無い詠唱だった。
おそらく超高位魔法の詠唱である

右手に青い魔力が灯り
その魔力は大きな球体となり
新たな風を巻き起こす

青い球は少女の体のサイズを超えるが
まだまだ大きくなっていく

それと同時に少女の体は
闘気によって宙に浮かび
その高さはすでに紅竜の頭を超えている

「・・・エタニティ・・・アイス」

氷の球は少女の手を離れ
ゆっくりと紅竜の顔を目指す

確か竜族の鱗には特殊な魔法障壁が
常時展開されていて魔法が効かなかったはずだが
とどめは魔法で行うようだ

紅い角に触れた球体は
まばゆい光を一面に放ち
紅竜を飲み込んだ

紅竜はというとその光を振り解こうと
暴れ叫ぶが光は離れそうに無い
光は徐々に氷と化して
足元から自由を奪われる

「まずは一匹・・・・・・」

紅い竜は氷に包まれて
生きた標本となる

魔法障壁は無効だったのか?
そう思えたが障壁は有効なようで
氷で自由を奪われているだけのようだ
鋭い眼光は動き
ゆっくり空から降りてくる
少女の体を捕らえていた

強固な氷で動きを止めた
そういうことらしい

「次はあなたです・・・・・・」

次の相手は鱗が青い竜
さすがに知能の高い竜相手に
同じ手は通用しないとは思うが

「強すぎだなこいつ・・・・・・」

強すぎ、確かにそうだった
次の蒼竜はどのように始末されるのか
ただそれだけを考えるようになっていた

さきほどの心配はいったいどこにいったんだろうな

第０４０話　『ＶＳ蒼竜』

強すぎる少女の視線の先には蒼竜がいた

蒼竜はいまにも襲い掛かって来そうな状態で
翼を大きく羽ばたかせ、長い首をうねらせて
迫力の重低音で緑色の魔力を吐き出しながらうなり声をあげている

少女の方はいたって冷静で
冷たい視線を送り続けていた

暫くの間沈黙は続く

最初に動きを見せたのは少女の方だった

少し深呼吸を行い集中力を高めている

「・・・ふぅ・・・はっ！！」

掛け声と共に闘気の色がどんどん変わって行く
神々しかった黄金色の闘気が黒色に変わる
禍禍しく澱んだ黒色へと

その様子はとても健全な闘気には見えず
なぜか赤く光る瞳が禍禍しさに拍車をかけていた

「おぉ、すげぇ黒色かよ・・・」

俺は生まれて初めて黒色の闘気を操る人間を見る事となった

まさかこんな雰囲気になるとは思いもよらなかったが
この色を見ることとなった興奮がこの見た目のインパクトを消し去っていた

なぜかというとだ
黒い闘気は強さの証
最強の代名詞と言われているからだ

黒い闘気は、黄金の闘気の更に上に位置する粘度の闘気で
黄金色の闘気の更に上のレベルまで練り上げる力と総量がないとなし得ない闘気の色である

闘気の色は基本的に練り上げる総量により変わり
通常ならば白色で更に濃く練り上げると
青、黄、緑、赤、黄金、黒
の順番で闘気のレベルと色が変わる

専門家によると更に上の色も存在するらしいが
まず、黒色に到達できる人間がほとんどおらず
今だその上に到達できる人間はいないとされているのだ

黄金色ですら一生修行したとしても
凡人では到達できないレベルにあるわけで
黒色の闘気を扱う凄さというものをわかってもらえるだろうか

まさに、最強の証なのである

因みに、俺が本気を出して闘気を練り上げたとしても
その色は限界までやって黄色止まりで
緑、赤ですら俺の強さでは到達できるかどうか怪しい

そんな困難な道のりなのだ

ゆえにそんな貴重な黒い闘気を見せられては
少女の強さを認めざるおえない状況ではある
これからあの少女は何を見せてくれるのだろうか
それがものすごく楽しみになって来た

だが、俺のそんな心境は無視して
少女からは動く気配を感じない
様子でも伺っているのだろうか
闘気の色が変化しただけで
次の動きはまったくの皆無だ

そうしている間にも蒼竜は攻撃するための機会を伺っている
直立不動の少女はモニターごしに見れば
あきらかに隙だらけなのだが
蒼竜は攻撃に移ろうとはしない

また、暫くの間沈黙が続く

「・・・こないの？」

沈黙を破ったのは少女の一声
赤く光る視線を蒼い竜に向け
首を傾げ、薄く笑う

「こないなら、こっちから行くよ」

ゆっくりと
かなり遅い速度で

右脚を少しだけ前に出す

「うがぁぁぁぁぁ！！」

首を天に向け、空気を揺らす大きな咆哮
モニターごしで無くても聞こえそうな
そんな激しい咆哮である

それと同時に蒼竜は決死の攻撃に移る

魔力を注いだ大きな太い尻尾を
自らの後ろに大きく振りかぶり
体ごと回転を加えて尻尾の先を
目の前の少女に向けて振りかぶる

周りの木々をなぎ倒しながら
かなりの速度で少女に襲い掛かる
太い幹などに遮られているにもかかわらず
尻尾の先は速度を上げ少女へ向かう
俺が食らえば間違い無く即死だろう
そう思える程の渾身の一撃

速度が限界に経っそうとしたころ
尻尾は少女の真横に迫る
すぐ横に尻尾があるにもかかわらず
未だに少女は動こうとしない

もろに食らう気か？

そう思っていた俺の予想は正にその通りとなった

蒼い尻尾が少女に当たり、更には魔力の爆発のおまけ付きで
蒼竜の攻撃は完璧にヒットした

そう、ヒットしたのだ

だが

少女は無傷だった

というよりも微動だにしていない

「なんか、もうチート級だなあの強さ」

「ですねぇ、強すぎなのです」

ミリアも俺も初めて見るはずだ
これ程に強い人間は
正直、人間かどうかも疑わしい強さだ

あの攻撃をモロに受けて無傷
服すらも傷一つ無い
というよりも汚れ一つ無い状況だ

黒闘気の強さは半端ではないようだ

「ここからはわたしのターンでいいのかな?」

また少女が薄く笑う

蒼竜はもう諦めたのか

攻撃を終えてからまったく動かない
震えている様にも見えないことも無い

まだ少女の右側に触れている尻尾
そこに少女の細い人差し指がのびる
目的地は鱗と鱗の隙間
強固な魔法障壁を抜けた先だ

「迅雷、紫電、紅き稲妻
罪多き者に裁きを！！」

「トリニティレイン！！」

人差し指から
白、蒼、紅の雷が出て光りと化す
その光は一瞬の間に全身へと広がり
辺り一面を明るく照らす

蒼竜からは白い煙が立ち上り
翼はたれ落ち、目は白くなり
腕にも力が入っている様子は無い

たったの一撃

またもやSランクの魔物を瞬時に倒してしまった

「楽勝ですね？」

少女は見た目とのギャップがある明るい声をだし
赤く光る視線を最後の獲物へと向ける

「最後になっちゃいましたね」

「ふっふっふっ、こうで無くてはいかんっ
久々に狩りを楽しめそうだ」

「そう簡単にわたしは狩れないよ？」

次はＳＳランクのアルティメットドラゴン
人の言葉を操れる程の知能の高さを持ち
とんでもない魔力を操る手強い敵だ

次はどんな壮絶な闘いが見れるのだろうか

第０４１話　『ＶＳ極竜』

アルティメットドラゴン

別名皇竜や極竜と呼ばれる
竜族の中で最強の種族

知能も高く、人の言葉も操り
膨大な魔力も優位に扱う
魔物の中でもかなり高位の存在

使える魔法は
時空魔法に雷魔法、炎や氷など
ほぼ全ての属性を扱うことができるため
個体ごとに闘い方が変わってくる
そういう所もあり極竜の攻略は一筋縄ではいかないとされていた

今まで極竜が少女に手を出さなかったのは
紅竜や蒼竜が極竜の下位の存在であるからで
基本的にはあの二匹がやられない限りは
極竜の出番は無いのだ
だが、あの二匹がやられてしまった今では
極竜が直接相手をするしかない

その相手をつとめる少女には
先ほどまでの余裕は無いだろう
そう思っていたのだが
ここから見た様子ではまだまだ余裕な様に見える

「君は強いからなぁ・・・どうしよっか・・・」

そんな台詞をいいながら
人差し指を頬に当てて
首を傾げているのだ

黒い闘気は現状のままで
台詞と見た目はまったく合わない
どうせなら
ふっふっふっとか
死ぬがいい！！
など無気味な台詞や
迫力重視の台詞を言ってくれた方が
見た目的には合致するわけだが
特に見た目以外が変わるわけではないので
この雰囲気があの少女のデフォルトなのだろう

「小娘、そんな余裕を持っていていいのか？」

「別にだいじょ！ってうわぁっ！！」

極竜は賢い

まさにそう思える光景が知らない間に
出来上がっていた

少女の周りに紅い玉が３０個ほど
円を描いて浮遊していた
それ一つ一つが炎の塊
炎属性の中位クラスの魔法で

俺も扱うことのできる
スフィアフレアという魔法だ

玉のサイズは1メートル程度だが
通常サイズが20センチ程度だということを考えると
極竜の魔力の高さがそのサイズから伺える

「あぁ～あ、もったいないなぁ」

少女は特にピンチという雰囲気も見せず
もったいないという言葉を口にしていた
どういうことだろうか？
魔力がもったい無い？
それとも教えたことがもったいないのか？

いずれにせよもうすぐその内容があきらかになる
俺が見た光景はなかなかの不思議な光景であった

少女が右手を上にあげると先ほど紅竜相手に使っていた
大きすぎる大剣が空中を飛んで自動で少女の手元に戻る

この程度であれば基本的な戦法の内だったのだが
その次の動作がなんとも不思議な
いや、無気味な光景だった

少女が纏う黒い闘気が剣を手にしたことによって
剣全体をさらに濃い黒色に染める
その黒さは徐々に密度を濃くしていき
それに反比例する形で少女の体からは
闘気が失われ本来の色を取り戻して来ている

「小娘、まさかとはおもうが・・・」

「多分、そのまさかだよ」

ほんの数秒のできごとではあったが
少女が纏っていた闘気のすべてが
剣に吸い取られる様な形で
一箇所に集まってしまった

そして、さらに数秒たつと
信じられない光景が目の前に広がり出す

剣の形をなしていたそれの先端
そこにはあからさまな敵意を剥き出しにした
牙が形成されていた
つい先ほどまではなかった形状である

しかもその牙は生々しく動き
息づかいまで聞こえる様な煙を吐き出していて
なんとも無気味な雰囲気である

「魔剣か・・・しかも吸収形の」

「御名答!!」

牙付きとなったその剣が
大きく口を開く
そして、できる限り腕を伸ばして
ジャイアントスイングのようにその場で一回転

丁度一回転を終える所でピタッと止まると
辺りには先ほどとはまた違う景色が広がっていた

なんと、一メートルを超えていたはずの
紅い球が一瞬で無くなってしまったのだ
消えたわけではない
無気味な形とかした剣によって吸収された
そういう風に俺には見えた

回転させている間
牙は全て球の方へ向き
剣が通る一瞬で球の一部が鋭い牙で喰いちぎられる
それを一回転の間に何度も繰り返し
大きく、数があったあの球を全て吸収してしまった

吸収を終えた牙付きの剣だったものには
すでに牙は無くなっていて
何事も無かったかのように
以前と同じ形をしている

ただ少し違うのは
黒い闘気に他の色が混じっていること
ほんの少しではあるが
赤みを帯びた闘気に変化していた

そして暫くすると
先ほどと逆の動きが始まり
闘気がどんどんと少女の元へと戻って行く
それも、赤みを帯びた黒い闘気が

また暫くすると
剣からは全ての闘気が無くなり
通常の黒い剣へともとの姿をとりもどす
少女も同じように戻るのかと思っていたが
少しばかりかってが違うようで
吸収したスフィアフレアを見事に取り込んでいた

全身から黒い闘気が発しているのは前回と同様だが
あきらかに違う部分ができている
それは長い髪の毛だ

炎魔法を吸収したからだろうか
紅い深紅の髪へと色が変わり
髪の先端は燃え盛る炎のようになっていて
あたかも炎の精霊のような
そんな容姿へと変化していた

「ねっ、もったい無かったでしょ」

「めずらしいな、人間のくせに魔剣を従えているとは
本来ならば御すること無く、手することもできぬはずだが」

「ちょっとわけありでね、細かいことは気にしない！！」

剣を前に突き刺し
またもや手ぶらになり
極竜の威嚇を始める少女

相手の魔力を吸収とか

それの再利用とか
魔剣の使用とか

完全に人間のなすことを超えている少女
もしかして悪魔とかなのかなぁとさえ思えてきた

もう、なんでもありなんだろうな・・・

第042話　『イレギュラー』

素手で闘う少女

それに対向し、いろいろな方法を試す極竜だが
素早い少女にはなかなか攻撃が当たらない
当たったとしても黒い闘気に阻まれ
致命的な一撃を与えるには至っていない

少女の方も同様で
なかなか良い手が浮かばないのか
極竜へのダメージは加えられていない

両者いろいろ試す中で
なかなか決着がつかず
すでに最初の攻防から
５分が経とうとしていた

状況はというと
極竜から吸い取った魔力のおかげか
はたまた彼女の実力のおかげか
ほんの少し少女のほうが優勢にみえる

だが、ほんの少しの均衡が崩れるだけで
決着がつきそうな、そんな緊迫した攻防が
最初から継続し続けていた

時空の狭間へと飛ばそうとしてみたり
紅竜のように凍らせようとしてみたり

直接殴りつけ、ダメージを与えられるか試してみたり
尻尾を振り上げ、叩きつけたり
口から魔力の塊をだしてぶつけてみたり
竜族しか使えない高域魔法を使ってみたり

様々な攻撃を試し
それを防ぎあってきている

「なかなか、決着がつきそうにないなぁ・・・
レクア、手助けとかできないのか？
真翼だし強いんだろ？」

「あいにくですが、私は戦闘タイプでは無いので
それほど強く無いんです・・・申し訳ございません
さすがにあの中に混じるのは難しいかと」

「そっか・・・ミリアは無理か？」

「ムリムリっ！ムリですよぉ！！」

全力で手をふって、全身全霊の無理っぷりを発揮してくれる
ただ聞いてみただけなのに、ほんの少し涙目にもなっていた

「冗談だって、普通の人間には無理だよなぁ
当然俺にも無理だし・・・どうするか」

いろいろ考えては見るものの
なかなか良い手は浮かばない
その間にも上では激しい闘いが繰り広げられている

ほおっておいても、そのうち少女の勝利で終わりそうだが
闘いが長引くとどうなるかもわからない
黒い闘気でかなりの長い間戦っているので
いつ闘気がそこをつくかもわからないし

「なにかないかなぁ・・・」

「そうですねぇ・・・」

俺と同じ格好をしながら
ミリアも考えてくれてはいるが
この限られた状況の中でできることはそうそうないのだ

『ブィィン！ブィィン！』

今度はなんだ？
またサイレンか何かかと思ったが
この部屋に入るときに聞いた音とは違う音だった
何が起きたんだ

「あら？これは・・・」

レクアは少し不思議そうな顔をしながら隣の壁へと歩き出す
急いでいるような様子は無いので対した事柄では無いのだろうか
隣の壁にそっと触れると、またもやその壁はモニターと化した
映った画像は見覚えがある扉で
ミリアから聞いた話だと外へ出ることのできる扉だ

「・・・これは、少しまずいですね」

「まずいってなにがだよ?」

「これ、このランプ、点滅してますよね」

「赤いランプだろ、それがどうしたんだ?」

「この状態って施錠前なんです
点灯していれば施錠後なんですけど・・・」

鍵がかかっていないただそれだけのこと
特に問題はなさそうだが
なにやら他に問題がありそうだ
竜が入って来るってことはないから問題ない
ということは考えられることはその逆か

「まさか?誰か通ったのか」

「はい」

「やはりか・・・」

レクアの説明によると
先ほどの音は誰かが外に出た時になるようになっている音だという
施錠もされてはいないし
だれかが、おそらくはアネツィアの住人のだれか
完全な一般人があの戦場へと出たということだ

確かにこの状況はまずいな

「とりあえず、誰が出たか見てみましょう」

そう言ったレクアは、また右手で壁を触る
壁には外の扉が映し出され
扉の前には1人の影がうつる

映像をずらすと、その外に出た人物の後姿が現れた

背丈は控えめで
肩幅や雰囲気、服装を見る限りは少女だ
しかも、この姿には見覚えがあった

つい先程話していた
もう少し会話していたかった
吸い込まれそうな金色の瞳をもち
長い、艶のある髪は銀色で
後姿でもはっきりわかるその姿
あの少女は間違い無くあの娘だ

「イヴ・・・」

なぜこんな状況のなか外に出たんだ?

第043話　『ガンマ』

「あれは、イヴだ」

「イヴ？知り合いですか？」

「知り合いってほど親しい感じじゃないが、とにかく知ってる」

ただでさえ大きい瞳を普段より大きくさせる
瞬きしていれば見逃していそうな
そんな短時間の出来事だ
驚きの表情はほんの一瞬
わざと、あえて、真顔へと戻す
それが俺にはかなり違和感があった
おそらくはミリアもイヴを知っている
それをあえて隠した
そういう風に見えてしまう

「・・・強いんです？」

「・・・わからない、ちょっとした会話しかしてないからな」

「そう、ですか」

うつむき、考え事をしているようだ
やはり、ミリアの行動は少しおかしい

合わせてレクアの行動も
俺のそれとは明らかに違う

何か考え事をしているようなそんな雰囲気なのだが
あの子を助けようとか、それに対して考えているような
そんな雰囲気ではない

なぜ？どうして？

そんな雰囲気を全面に押し出している
さらには不可思議なこの会話が
違和感をさらに濃厚な物にしていた

「ねぇ、レクア・・・」

「なに？」

「もしかしてあの子・・・」

「・・・多分」

「やっぱりですか」

なんて会話

あの子とか、多分とか
俺にはわからないようなそんな会話だが
あきらかにこの二人はイヴを知っている

でもいまはそんなことどうでもいい
とにかくイヴに中に入ってもらう必要があるわけで
その優先順位はもっとも先のはずだ

「おい、レクア」

「なんでしょうか？」

「なにか変な状況なのは2人を見ればなんとなくわかる
だが、今はイヴを連れ戻すのが先だ。違うか？」

少し回答に間が空く
モニターごしのイヴを見て
右手でイヴを映しているところにそっと触れる
少し表情が暗く、寂しそうにも見え、悲しそうにも見える

「・・・本来ならば・・・この子でなければ・・・・・・ですね」

本来ならば、この子でなければだと
またちょっと考えないと答えが出ないようなそんな回答だ
レクアはこの様な含みを持たせた会話が多い

「なんだって？あの子ってイヴのことか？」

「はい」

わけがわからない
なぜイヴだとだめなんだ？

「なんでだ？ただのアネッィアに住んでる一般人だぞ！！
助けるのが普通だろ！！」

少し声を大きくして苛立ちを少しレクアに向ける

少し困ったようなそんな表情
眉毛に間にシワを寄せ、うつむき
右手は顎の部分に添えられている
しばらく考えていたようだが
視線をミリアの方に向けて
ミリアは軽く首を縦に振る

「・・・ミリア・・・？」

「・・・しかたない・・・ですね」

しぶしぶ説明をしなくてはならないような状況らしい
しかも何故かミリアの許可がいる様な内容
ミリアは俺に視線を合わせるが少ししてからすぐそらした
そんなに説明したくないのだろうか

「あの子、イヴと呼ばれるあの娘」

少し間を開けてどう説明すべきか考えているような
そんな状態でレクアの決意のこもった視線を俺の方に向ける

「信じられないかもしれませんが
多分、いや、間違い無くあの行商人の女の子より強いんです
それもはるかに上を行くレベルだと思って下さい」

そんな答えが帰ってきた
それが答えだとしたら説明を渋る理由は特にない
それどころか真っ先に言ってくれた方がありがたかった
そんなような情報である
まだこの先に説明は続きそうだ

「なぜ勇人様があの子と、イヴと知り合いなのかは知りませんできれば、知り合いでない方が嬉しかったのですが」

「どういう事だ？」

？

「少し早すぎる・・・」

「早すぎる？」

早いもなにもたまたま見かけて声をかけてちょっとした会話をしたぐらいまだ、知り合いって言えるかどうかそれすらもあやしいぐらいのそんな関係早すぎるとか意味がわからん

「・・・少し説明に困るのですが私が予想していたよりも早かったそういうことです」

「遅かれ早かれ俺が、イヴに合うってわかっていたというのか？」

「必然・・・ですので」

「はぁ・・・？」

含みを持たせすぎだまったく意味がわからん俺がイヴには間違い無く合うってことがレクアにはわかっていた

そんなことがあるはずがないだろうよ

「因みに・・・私とミリア
この二人もあの娘を知っています
それも、かなり昔から」

「えっ？ミリアもか？なるほど・・・」

なんとなくわかって来た
ミリアもというところに違和感がある
レクアだけなら答えはあってそうではあるが
いまいちピンと来る答えではない

強引にピースを嵌めれば
この難解なパズルも解けるのだが
嵌める作業には不可解な点が多すぎる
嵌めるための作業に使えそうな道具は
芋づる式に色々な所に影響を与えるような
そんな道具と答えでしかない

答え合わせのためミリアに視線を合わせようとしても
横を向いているために視線が合わない
だが、この行動が用意した答えが正解であると
そう思えさせてくれるような行動でもあった

「まさか、ミリアも？」

「・・・はい、です」

「そうか・・・だからイヴと『呼ばれていた』って言ってたんだな」

過去形だったのが気になっていたんだが
まさかこんな所で答えが分かるとは
普通の女の子にしか見えなかったんだが
見た目に関してはイヴだけではなく
レクアやミリアに関しても一緒だ

「ということはだ、イヴではあるが呼び名が他にあるよな」

「はい、察しのとおりです、あの子・・・
イヴの正式名称は・・・」

「コードＮｏ．ＪＺＡ－０８０Ｖｅｒ．γ（ガンマ）です」

第０４４話　『五月蠅い』

「バージョン、ガンマ？」

「はい」

俺が遺跡で見た文字は
『ＪＺＡ－０８０』だけだったはずだ
アルファ、ベータ、ガンマなんて
そんな記号は無かったはず
さらに気になるのは
アルファではなくガンマだということ
普通に考えれば少なくともよく似た仕様というかほぼ同じような者があと２人はいる
そういう風に考えるのが普通だ
アルファ、ベータが・・・
まあ、そんなこと考えても仕方がない
どーせ考えても答えはでないし
それよりも、なぜイブがここに出てきたのか
何をする気なのかが気になっていた

モニターごしに写るイヴの視線は極竜に向いている
笑顔でもなく、怒っているような表情でもなく
真顔で極竜の顔を見つめていた

しっとりとした唇が動き
小さな、とても小さな声で
短い言葉が告げられた

「うるさい」

そんな言葉をイヴが発した

イヴが外に出てきた理由
この言葉を聞くかぎり想像できる答えは一つ

うるさかったから

これである

上で激しいバトルを繰り広げられているために
この建物にはかなりの振動と音が伝わっていた

造り自体は強固なために
壊れそうな振動、とまでにはいかないが
かなりの音と振動は伝わってくる
おまけに警報音が定期的になり
その音がうるささに拍車をかけていた

「ちょっと君、危ないから中に入っておいたほうがいいよぉ」

闘気によって宙を浮いている行商人の女が
もっともらしいことをいう
イヴは見た目だけではいたって普通の女の子で
どう考えてもこの場所にはいるべきではない存在だ
見た目だけでいえばこの女自体も不自然ではあるものの
さきほどまでに見せていたバトルを見た後では
ここに居るのが普通と思えてくる

「うるさい」

真顔での二回目のうるさいである
今度の視線の先は行商人の女の子
うるささの対象、産みの親は一人ではない
極竜とこの娘だ
当然、イヴの
『うるさい』
はこの少女にも向けられることとなる

「ちょ、うるさいって・・・危ないから早く戻りなよ」

「うるさい」

「うっ・・・もうちょっとで決着がつきそうなんだよぉ」

「うるさい」

「ねっ、早く戻りなって危ないんだからさ」

「うるさい」

「君がいると気が散って闘えないんだよぉ！！」

「うるさい」

「もう！！早く！！危ないって」

「うるさい」

「もうもうもうもう！！うるさい、うるさいってそれ以外いえないのっ！？」

「うるさい」

「あぁ～、もう！！しらないよ！！」

「うるさい」

うるさいの一点張り
イヴはうるさいとしかいわなかった
俺のときの『そう』と同じで
同じ言葉を繰り返すことが
イヴにとっての普通なのだろうか
それとも真翼であるイヴは言語機能が制限されていたり
そんなことでもあるのだろうか？

しばらくの間行商人の女とイヴの会話が続くが
イヴは『うるさい』
行商人の女は『危ない』
それの繰り返しで次の動作につながる気配は一切しなかった

極竜はというと
大きな翼を羽ばたかせながら
そのやりとりを静かに見つめている
竜の顔なのでわかりづらいが
おそらく呆れ顔である

「あぁ！！もう！！わかった！！怪我してもしらないからねっ！！」

「うるさい」

かなりの時間がたったとはおもうが
二人のやりとりはまだ続いていた
呆れ顔の極竜と
困り顔の行商人
そして真顔のイヴ

ついさきほどまで
壮絶なバトルが繰り広げられていた
そんな場所であるのだが
いまではちょっとした漫才の舞台のような
そんな雰囲気になってしまっていた

イヴが作り出す独特の雰囲気
それが極竜の戦意すら奪ってしまっているようだ

「う～ん、ほんとにほんとに怪我しても知らないんだから！！
それとも、あなたが変わりに闘う！？」

なんてそんな台詞すら飛び出す始末である
突拍子も無い、そんなつもりもなかった台詞ではあったのだが
行商人の女の子の予想に反して
イヴからうるさいという言葉が返ってこなかった

すこし間を起き
すこし首をかしげ
すこし目を瞑る

「・・・それもいいかも」

「へっ！？」

第０４５話　『天使？』

「えっ！？　いまなんて？」

「代わりに戦う・・・」

そう言ったイヴの視線は
行商人の女から極竜に向いていた
代わりに戦うなんて
まさかの選択である

「意味わかっていってるの？
極竜だよ。アルティメットドラゴンだよ
強いんだよぉ。竜族最強だよ？」

「関係ない」

静かに目を閉じると
背中から淡い光が灯る
頭を少し下にさげ
かがんだような状態になった
両手は双方の肘を抱えていて
寒そうな、凍えている時にするような
そんな形になる

淡い光は徐々に朝日のように大きく広がり
その白い光は、球状の光となって集まる
イヴの背中に数えきれないほどの
光の塊が集まって来た

「えっ？えっ！？天使？」

行商人の女の子が驚くのも無理はない
だれもがここにいれば
天使という言葉を連想していただろう
それほどまでに天使に見える

集った光は徐々に輝きを増して
幻想的な白い翼の形となって現れる
見た目はまさに天使の羽で
それ以外を連想することは無理だと言いたいぐらいの
完璧な再現性である

翼は片方だけでもイヴの身長を超えるサイズで
後ろから見たら羽根しか見えなさそうなぐらいの
圧倒的存在感だ

大きな真っ白い羽根を
背中に具現化したイヴは
体全体が光っていて
とても美しく幻想的な雰囲気を出していた

このシーンだけをくり抜けば
天使が降臨したような
そんな場面であり
俺は見惚れていて言葉を失っている

イヴは閉じていた瞳を開き
金色の瞳を極竜に向けながら

その大きな翼を羽ばたかせ
極竜と同じ視線
同じ高さの位置へと移動する

「なんだ？今度は貴様が相手になるのか？」

「そう」

先ほどまでおそらくはあきれ顔だった極竜は
イヴと行商人の女の子との話が終わるとすぐに
臨戦体制に入っていた

どちらが相手でも
両方が相手でもいい
そんな余裕すら伺える

「貴様、人間か？」

翼のせいか
イヴが持つ独特の雰囲気のせいか
極竜はなにかしらの違和感を感じたのだろう

「わたしは、そのつもり」

「ほほう」

今の回答で答えは出たのだろうか
納得したようなそんな表情に見えなくも無い

「貴様とやり合うのは

得策ではないな」

やはり、なにか答えを見つけたのだろう
もしくは長寿の竜族であるからの経験から
危険を感じ取ったのだろうか

サイズからして圧倒的に不利なのはイヴだ
だが、行商人の女の前例があるために
サイズに関しては戦力を測る物差しにはならない

「ちょっと、きみ、ほんとにやるきなの？」

すでに戦う意思を削がれてしまっていた少女は
纏っていた闘気を解放していて
見た目は普通に戻っていた
意図的に解放したのか
解除せざるを得なかったのかはわからないが
とにかくもとの普通の少女の容姿に戻っている
イヴのただならぬ容姿を見て大丈夫だと判断したのかもしれない

イヴは先ほどの少女の質問に対して
首を小さく縦におろし
少女に笑顔を見せた
ただし、見るからに作り笑顔といった感じで
違和感を隠しきれてはいないが

ゆっくりと視線を前にやり
作り笑顔をそのまま極竜に向ける

「得策じゃなかったらどうする？

逃げる?それとも・・・」

唇の先が少しつり上がり
金色の瞳は細くなり
声の高さは低くなる

そして

「シ・ヌ?」

その言葉には
モニターごしにいる俺にでさえ伝わる殺気があり
俺の背中には感じたことのないほどの悪寒が走った

第０４６話　『最強の盾、最強の矛』

「逃げる、死ぬだと
我を何だと思っているのだ？」

「竜」

「そうだ！しかも最上位の
高貴なる存在であるぞ」

「それで？」

「逃げぬ！死なぬ！
仮に相手が神であろうともだ」

「だから？」

「我に後退は無い、あるのは前進勝利のみ！」

極竜がついに攻撃に移るようだ
先ほどの会話と状況によってか
会話の内容からするとと
イヴが何者でどれほど強いのか
わかっている様で最初から全開の力を出し
全身は赤い魔力があふれていて
翼は黄色く光っている
かなりやばそうな雰囲気だ

「受けて見よ！我が全身全霊の技を！！」

翼に集っていた魔力と
前進からあふれていた魔力が交じり
顔の前辺りに集まり出す
青や赤、黄色に黒と
様々な色の魔力が回転し
螺旋状の球が出来上がる

サイズはイヴの全身を全て飲み込んでも
余裕がある大きさで
まだまだ大きくなっていく
極竜の体の半分程度まで大きくなったと思うと
低く大きな音と共に
徐々に凝縮され、１メートル程度の
球が出来上がった

それは空を引き裂き
森をはるか遠くから切り刻み
時空すらも歪め
ゆっくりとイヴに向かって行く

このまま地面に着弾すれば
この島なんて跡形もなく吹き飛ぶだろう
空を揺らす振動はそれほどまでの威力を鮮明にして伝えていた

「これが本気？」

右手をそっと手前にやると
そこから動こうとしない
まさか、受け止める気か？

「魔力制御プログラム展開」
「プログラム名、ＡＥＧＩＳ、起動」
「認証キー、ガンマ」
「セキュリティ解除完了」
「右翼、左翼の動作正常」
「魔力拡散機能正常」
「青、黄、赤、黒、魔力解析完了」
「ＡＥＧＩＳ、展開準備オールグリーン」
「目標、前方の混合魔力体」

何をする気だ？
イヴが何かを喋ってはいるが
何をする気かまったくわからない
そうしている間にも少しずつイヴに迫って行く

「あれは・・・」
「何かしってるのか？」
「イージスの盾」

「イージスの・・・盾？」

レクアの説明によると
どんな攻撃でも防ぐ最強の盾らしい
防ぐという表現には合わないかもしれないが
魔力などで作られた物を無効化する様だ
今回の場合はあの螺旋状の球で
あれを無効化するきらしい

「シールド展開」

その言葉とほぼ同時
イブの前に出した手に
極竜の技が着弾する

着弾してすぐ閃光がはしり
モニターには白い光しかうつらない

強い振動と鳴り止まない警告音が
何か上でおこっているということを
明確にさせてはくれているが
振動が止まってもモニターが復活する様子はなかった

「あまりの衝撃で壊れたのかもしれないですね
強力な魔法壁も装備してあるのですが
突き破ったのかもしれません」

「予備のカメラとかないのか？」

「残念ながら

壊れる事を想定していないので」

「そうか」

しばらく待っては見たが
やはり、カメラは復活する気配を見せない
それどころか
なっていた警告音も
絶え間なく続いていた振動も
全て無くなってしまっていた

「決着・・・ついたのか？」

「おそらく」

カメラが壊れてからもう十分以上は立っている
何も変化が起きずに十分だ

「確認しに、いくですか？」

「そうだなぁ」

何も起きないとなると
現場に行く以外は選択肢は無い
水晶があったり
アリスでもいれば話は別なのだが
レクアがモニターを介して見ていた事と
ミリアの残存魔力を考えると
この選択肢しか残っていなかった

「いくか、イヴやあの女の子のことも気になるし」

「でも、他に魔物がいるかもしれませんよぉ」

「それでも、いく。逃げ足には自信があるんだ」

逃げる事前提の会話が情けないが
先ほどのバトルを見て
別次元の戦いとしか思えなかった
俺の実力ではどうにもならない世界が
上には広がっている

なら行くな
と思うだろうが
どうしてもあの二人の安否が気になる
特にイヴの安否が

「そう、ですか。ならわたしも行くです」

「助かる。レクアは？」

「はい、もちろん行きますよ
念のため認識阻害魔法も使いましょう」

「それはかなり心強いな」

「勇人様は私が護ります。
あの子ほどでは無いですが
防衛力には自信がありますので」

女の子?にこんな台詞を言われるとは
情けなさすぎだな俺

「じゃあさっそく行こう」

「はい」「はいです」

修行しよう
強くなろうと
心に決めながら
この真っ白い部屋を後にする

強くなるためには
強い人に弟子入りか
強さの秘訣を聞くしか
方法は無いだろう
そもそも俺に強くなれるキャパシティがあるのか
それすらわからない状況だ

長い廊下を歩き
赤い点滅ランプの扉を潜り
地上へ続く階段を登りながら考え
とりあえずの案を練り出す

練り出したのだが
目の前の光景に唖然とし
何を決めたのか
真っ白になってしまった

地上への扉

イヴの手によってすでに解放されていて
地上の眩しい光を取り込んで
白い光の扉と化している扉を潜った先には
思いもよらない光景が拡がっていた

「同じだ。あれと」

第０４７話　『白い森』

「なんで、何でこんな！！」

「どうしたです？」

「ミリア見て見てくれ！！」

「はいです」

「へ？うそ？」

俺が見た光景
そして、ミリアが見た世界
それは

真っ白な大陸だった
ただただ真っ白な世界が広がるだけ
白い大地に蒼い空があるのみの
二色構成の景色を両の目でとらえる

鬱蒼と生い茂っていた木々や
栄養をたくさん含んでそうだった泥っぽい地面
氷づけにされていた紅竜
戦っていた筈の極竜とイヴ
そして、行商人の少女
全てが無くなっていた

「なっ！おかしいだろっ」

おかしいの一言でまとめるのもどうかと思うが
予想だにしていない事象がそこにはある
実際見た訳では無いので
知識としては中途半端ではあるが
俺はこの光景と同じような景色に心当たりがあった

「というかなんで、こんなことに
イージスの盾ってこんな状態になるものなのか？」

「イージスの盾の効果とは考えにくいですね
おそらくあの後、何者かが現れたと考えるのが妥当かと」

この一言でさらに俺の脳内の記憶が
あれと同じだと挙手して訴えてくる

「これって、あれだよな・・・アネツィアと同じ」

漆黒の翼を持つ物の手によって
白い街と化した水の都アネツィア
まさにあれと同じ状況にしか見えなかった

「おそらく」

「やったやつは同じやつか？」

「どうでしょうか？」

「わからないか？」

「・・・はい」

「そうか、じゃあちょっとあっちの方見てくる」

「はい、あまり遠くに行きすぎないようにしてくださいね
このような状況でも周りは危険な魔物がたくさんいると思いますし」

「わかった」

今の会話に違和感があった
だからこそ離れる

何の違和感かというと
レクアの返答に切れが無い
今まで聞いたことに対して妙な含みを持たせたことはあったが
曖昧な回答はあまりなかった

やったやつは同じか？
と聞けば

はい
と回答するか

わかりません
と答えてくると思っていたが

どうでしょうか？
と来たもんだ

念押しして聞いて見ても
返答に時間がかかっていた

おそらく
レクアは何か知っている

だからこそ一旦離れる
もちろん、遠くからも動向を探れるように
盗聴魔法の置き土産ありだ

この手のイタズラは昔流行っていたから
レクアや、ミリアにばれない自信はある
白い地面による太陽の日の照り返しが
さらに視認性を悪くしてくれているから
ほぼ間違いなくばれることは無い

少し離れ、お互いが見えはするが
声は聞こえないような距離まで歩く
何かを探すようなそんな仕草を忘れずに
盗聴魔法からの漏れてくる二人の会話の盗み聞きを行う

ミリアの声が聞こえ
次いでレクアの声も入ってくる
少しながら聞き取りづらいが
会話は聞き取ることのできるレベルであった

「アルファだ・・・やっぱりアルファなんだよ」

「ミリア！！」

「あっ・・・で、でもっ」

「ダメ!!まだダメ!!」

「けど、このままじゃぁ!!」

「展開が早すぎる、まだ、まだなのよ」

「あっちはもう次のステップに入るかも
もしかしたら手遅れなのかもしれないんだよ」

「わかってる、でも、暴走する可能性の方が高い」

「それでもっ」

「あと一歩進めれば、その兆しさえあれば」

「じゃあ、パターンBにするべきなんじゃ?」

「それかCね。でも、それでも・・・」

「もう!!迷ってる暇は無いんだよ!!」

「くっ・・・」

「しかたないわね、パターンCに移行しましょう」

「Cで良いんだね?」

「こちらの方が成功率が高い。多少は残酷ではありますが」

「できればBが良かったんですが・・・仕方無いです」

「代わりにヤりましょうか？」

「イイですよ。この仕事は私のです。ちゃんとヤりますです」

「・・・まかせたわ」

なんていう会話が聞こえた

何のことだ？

第０４８話　『考察』

先ほどの会話
やはり、ミリアやレクアは
この事象の発生原因について
なんらかの心当たりがあるようだ
なかなか興味深い話である

中でも一番気になる言葉は
最後の方に出てきたあの言葉

『ヤる』だ

文字になって出ていれば意味合いがわかったようなもんだが
ヤるという一言のみだとなかなか意味がわからない

ざっとわかるだけでも
演る、遣る、飲る、犯る、殺るだ

漢字に基づき考えてみると
なんとなく答えは見えてくる

演じる、となるとそれらしい意味は通るのだが
演じてなんになるかだ
時間が無さそうな雰囲気を汲み取れば
これはなさそうだが
パターンCだとかパターンがあるのだとすれば
これの可能性はある

遣える、となると会話からすれば違うだろう
何に?ってのが先に出てきそうなもんだ

飲むも違う
これなら飲むとか普通に言うだろうし
ヤるという表現として使うには
あまり一般的ではない

犯すってのもなんだかよく分からないが
残酷という一言によってなんとなく意味は通る
しかし、俺の直感では違う様な気がする

残ったヤるは
殺す

この中では選択肢から真っ先に消し去りたい言葉だ
だがこれが一番しっくりくる
残酷というキーワードがあるが為に

しかしだ

殺すって誰をだ?

アルファか?
イヴか?
それとも俺?

そもそもアルファってなんだ
イヴがガンマという型式ということを考えれば
アルファ、ベータもいるんだろうと思ってはいたが

まさかこんなに早くその可能性のある言葉を聞けるとは思わなかった

「アルファ・・・調べる必要があるな」

第０４９話　『異変』

「とりあえず戻るか・・・」

盗聴魔法を解除し
ミリアとレクアの所に戻る

なんだかんだで話しが長かったこともあり
結構な距離まで歩いてきていた

一面真っ白である景色は距離感を損なう
振り返って見ても俺が踏みしめた地面の靴の形だけを残すのみで
白いキャンパスにこれを描くのであれば
その部分にできた影のみを描けば事足りるぐらいの
そんな景色が拡がっているのだ

相当離れた所にミリアとレクアが見えたので軽く手を振った
するとあちらも手を振り返してきたので
胸の前で手をクロスを作ってダメだという意思表示をする
どうやら意味を分かってくれたようで
手招きをしてから施設の入り口を指差して
戻ろうというジェスチャーをしてくれた

少し早歩きで施設の入り口を目指して歩く
頭の中はいろいろな考えを巡らせてはいたが
答えが見つかるわけもなく
悩みを増やすだけだった

悩みというキーワードでふと昔の記憶がよみがえる

「悩みを増やせば増やすほどに
それに比例して髪の毛っていうのは
儚い桜の花びらのごとく散って行くものだ」

という親父のどうでもいい名言を

念のため手グシで前髪を直してみたが
指の間には桜の花びらのかけらもなくひとまずは安心なようだ

とまあそんなことは本当にどうでもいい
まずはそれとなくアルファについて聞き出す事を考えねばならない
俺の魔力の枯渇についてもそろそろ真面目に考えないといけないし
まだまだ忙しくなりそうだ

とりあえず考えても仕方が無さそうだったので
視線を地面から施設の入り口方面に向ける
すると、まさかの新情報を得ることになった
ミリア達を見ていた時には気づかなかったが
あからさまな違和感がある場所が一ヶ所ある

前方の入り口を通り越してその先
かなり遠くではあるものの
木が見えるのだ
いや、林と表現すべきか
それほどの木々が残っていた
しかも一部分のみだ

どう考えてもそこに何かある
その場所に行く価値はありそうだ

鬼が出るか蛇が出るか
まずは二人の所に戻り作戦会議でも行うとするか

第０５０話　『再会』

「お帰りなのです」

「おう、ただいま」

二人の所に戻る間
林の状況を確認してみた

木の本数はおおよそ１０本程度で
それぞれがかなり樹齢もあり
俺の腰回りの四倍以上の太さはありそうだ

地面はある一定の場所で
白色から普通の地面の色に戻っている
グラデーションなどがかかるのではなく
寸断された様に不意に戻っており
かなり不自然な変わり方だ

二人にその場所について聞いて見ると
意外な答えが返って来た

「あれ？あんなのなかったですが
だよねぇ、レクア？」

「そうですね。少なくとも
ここに出てきた直後には有りませんでした」

「マジか？」

確かに、俺の記憶でも無かったように思える
見落としていたと思っていたのだが
二人も気付いていなかったのであれば
間違いない

もともと存在していなかった
もしくは認識できないような作用が働いていた
そういうことになる

「あれ、なんなんだ？」

「なんでしょう？
あの地面の様子を見る限りでは
地面もろとも転移して来た様にも見えますが」

「空間ごと切り抜いて転移したのか？」

「転移でなったのであれば、ですが
エマージェンシー用として
そのような道具があると聞いた事があります」

誰かが、その道具を使ったということか？
それとも同様の効果のある魔法を使ったか

「強力な魔法障壁とか
マジックキャンセルの可能性はないのか？」

「ない、とは言い切れませんが
あそこまでくっきり分かれていることと

残っている所が綺麗な円形であることを考えると
転移の可能性がかなり高いかと」

「なるほどな」

ということはだ
あそこにイヴか行商人の少女が居るかもしれない
それか全く関係ない場所からの来訪者だ

「レクア、念のためステルス魔法頼む」

「はい」

認識阻害魔法をかけて貰い
林の方向へ進む
距離はおおよそ１００メートルほど
それほど遠くはないが
何が居るか分かったもんじゃないから
用心しておく必要はある

距離が近づき林の状況がさらに明確に認識できた
特に変わった様子もなくいたって普通の木で
争いの後とかそういった物は無い

ということはだ
これはもともとここにあった木では無い可能性が高い
少なくとも直前の木ということは否定された
極竜のあの技の影響で
森の木々のほぼ全てが傷付いている筈だから

じゃあ、何がここにいるんだ？
それとも何もいないのか？

木々の隙間を抜けて
林の中心に恐る恐る歩を進める

ブランジュのおかげで
魔力さえ尽きなければ死なない体になった俺だが
未知の領域へと向かうのはやはり怖いものだ

しかも、この白い大陸の中での特異点に向かって進む
何かあることはほぼ間違いない
それが害をなさないモノとは思えないから

ある程度進むと広めの空間が現れた
といっても木がはえていないだけであって
特に違和感の無いただの林だ

ただ、やはりというか
森野中心であるその場所には異物が存在していた

「あれ、人だよな？」

「そう、ですね」

広めの空間のど真ん中
さらにはこの林のど真ん中だ
そこにそれは存在していた

ただし、居るという表現は合わない

ある
がただしそうだ

今にも動き出しそう・・・
でもなく
攻撃して来そうな雰囲気・・・
でもなく
ただ単にそこに『ある』のだ

近づいてみてもそれは同様で
後姿ではあるものの
人には見えるが人ではない
そういうモノがここにあった

「これ?金属?それとも石か?」

「有機金属、ですね」

「有機だと?」

「はい、もっと正確に言えば
有機金属化した元人間です」

「元人間・・・」

この目の前の物体、これが人間だというのか?
確かに質感以外は人間のそれで
色合いなんかもリアルにフルカラーだ
紺色の服、というよりもローブだろうか
背面から見ることのできる部分は

硬質な金属で出来た服と言える様な物だが
紺色の糸を縫い合わせてできたようなそんな網目が
もともと普通の服であったと教えてくれる
さすがにこの金属レベルの硬度の物を縫い合わせるのは難しいだろう

それと栗色の髪の毛も
同様の質感を再現しており
金属でごく自然な髪の毛の形を作り出している

髪の隙間から見える首もとの肌や
袖から伸びる華奢な腕など
肌の質感も色以外は完全に金属だ

「なんでこうなったんだ？」

「道具の作用ではないでしょうか
体への負担をできる限り下げるために
金属化した。
そう考えるのが妥当かと思われます」

「自然に治るのか？」

「調べて見ないことにはわかりません」

「そうか」

とりあえずは害は無さそうなのでほっとした
この目の前の有機金属化した人間が
いますぐに脅威になるとは思えない
仮に、すぐ動いたとしても

後姿を見る限りは少女なので
特に問題は無さそうな気がする
行商人の少女や、イヴなどは例外ではあるが
俺の実力でなんとかなりそうだ

「この娘どうするですか？」

ミリアも先ほどまで警戒していたが
今は特に警戒している様でもなく
スキップしながら俺の正面まで来て
首を傾げてくる

「まずは運び出そう
さすがにこのままにしておくわけにはいかないし
なぜここに転移してきたかということにも興味がある」

「ですかぁ、じゃあ運ぶですよぉ」

またスキップをしながら
少女の正面に向かって歩き出す

「さぁて、どんな娘なんですかねぇ」

正面へ到達したミリアは
覗き込む様に少女の顔を確認した
その瞬間ミリアは困惑の表場を浮かべる
みるに耐えない顔だったのだろうか
なぁんて、そんな筈はない
後姿を見る限り素敵な美少女の筈だ
俺の勝手な想像ではあるがな

「あれ？あれれ？」

「どうした？」

「まさかのまさかですよぉ」

本当に見るに耐えない顔だったのだろうか
もしそうであれば
脳内での美少女フォルダーに作成しかけていた
新規ファイルを削除する必要があるぞ

「わぁい♪」

そういいながらミリアは
目の前の少女であった物に抱きつく
ということは見るに耐えない顔というわけではなさそうだ
このリアクションであれば
逆に超美少女の可能性が高まった

「勇人様、鼻の下が伸びてますよ」

「え！？」

「冗談です」

一瞬ドキっとするではないか
というよりも本当に鼻の下が伸びていたのかもしれない
レクアが冗談を言う性格とは思えない
妄想だけで鼻の下が伸びるとは

無駄に能力の高い俺の妄想力がなせる技だな

「で、ミリアはなんでそんなにはしゃいでるんだ？」

「だって、これ、見てください」

そう促された俺はミリアと同じ場所に回り
少女の顔をできるかぎり妄想しながら
ちかそうな顔を想像して
想像と合致しているかどうかを確認する

確認をした
したはいいが
予想外の展開が待っていた

とんでもないブサイクというわけではない
想像した顔と完全に一致
というわけでもない
美少女でなかった
というわけでもないのだ

だが、この展開は予想外すぎる
目の前にいる少女
その少女には見覚えがあった
というよりもよく考えさえすれば
後姿でもこの答えに至った筈だ

目の前にいる少女は
男性であれば誰だって視線を送りたくなるような
そんな物質を鎖骨のした辺りに持ち合わせており

その物質を紺色を基調とした
魔女っ子ルックで身を固めて谷間を強調させる
栗色の短めの髪の上に乗っかっていてしかるべき
如何にも魔女だと言わしめる三角帽子も
少女のこだわりで背中の方に位置しているし
間違い無くこの少女は俺の知りあいだ

でも、なんでこんな所に現れたんだ
とにかくこのままにしておくわけにはいかない
知り合いとなれば尚更だ

「ミリア、運ぶぞ」

「はいです」

二人で持ったにもかかわらずなかなかの重さだ
さすが金属ということもあり
重量が少女の本来の重さを超えている

「重いな・・・」

本人に聞かれたら
間違い無くおこられるグチをはきながら
金属化した知り合いであるこの少女
世界９大商人であるこの少女
アリス
を施設内に運ぶことにした

第０５１話　『金属化』

金属化したアリスを施設内の部屋へ運び出した俺たちは
自然回復で治るものなのか
それとも、何かしてやらないと治らないものなのかを調べていた
もちろんそんな作業に関して俺の知識が役に立つ訳も無く
レクアとミリアに任せっぱなしだ

「で、どうだレクア、何かわかりそうか」

「ある程度は解析が完了しました
ですが、自然回復となるとかなりの時間がかかりそうです」

「どれくらいだ？」

「おおよそ４０年」

「なにっ！」

４０年とは、なかなかに素敵な時間ではないか
その時になれば俺は既に５０歳を超えている
さすがにこの長すぎる時間の経過を待ってやる訳にもいかない
それに、有機金属だからアリスも同様に歳をとるのだ
ピチピチの２０代を飛び越え一気に４０も歳をとれば
さすがのアリスもどうしようもなくなるだろう

「自然回復以外ですと
おそらくこの道具がキーになっているようですね
魔力の残留が感じとれます」

「これか」

アリスの首にネックレスとしてかかっていた物が
どうやらこの現象の原因らしい
もともと金属製だと思われるチェーンの先に
ブロック型の物がぶら下がっている
正方形で一面のみ鍵穴だろうか
そんな雰囲気の穴が空いていた

「これですかぁ」

「形状のみを見れば鍵がありそうな
そんな道具にみえませんか？」

「だな」

レクアも同じ事を考えていたようで
この四角い道具の中心にある
鍵穴がどう考えても怪しい

アリスの店にその鍵があれば
もう既に入手不可能で
アリスの時空倉庫にあった場合でも
本人以外にはアクセスできないので
これまた入手不可能だ

「アリスさん、いつもこのネックレスつけてたですよ
こんなレアな効果の道具だったのですね」

確かにいつもこのネックレスは付けていたな
あまり気にはして居なかったが
こんな効果があるとは思ってもいなかった

アリスはこの道具を使わないといけないような
そんな状況になっていたのだろう

真翼達に襲われた状況でも使わなかったこの道具を
あの遺跡で俺が死んだ時にも使わなかった
店で襲われたときもの使わなかった
そんな道具を使わないといけない状況だったということだ

「レナ大丈夫かな・・・」

俺はレクアに救われてここにいる
アリスは緊急の道具を使わざるを得なかった
レナは今どうしているだろうか

金髪のポニーテールの少女は武器を持っていなかった
いつも抱えているはずの大きすぎる剣を
武器が無くても相当強いが
アリスも相当な手練なので
武器が無ければほぼ同等の強さなのだ
遠距離であればレナよりアリスの方が有利だろう
そんなアリスがこの状況だということを考えると
レナがかなり心配になってきた

頭の中でレナの姿を想像する
風になびく金色の長い髪
軽々と持ち上げる身の丈を超えたでかすぎる剣

黒色の機動性の高そうな服
そんなレナには夜景が似合う
月灯の下で笑顔を俺に向けてくれた

あくまでも俺の想像上だが
月の背景とレナの間には
竜族の巨体が横たわっていた
強い風が吹いて
月夜の灯で怪しく光る髪が大きく乱れる
それと同時にいつも付けていたネックレスも
髪と一緒に横になびかれる
銀製のチェーンの先には
アリスとお揃いだと喜んでいた・・・

「あっ!!」

そうだ、そうだ、そうだった
鍵穴はアリス、鍵はレナだ
この答えに行き着く過程が長過ぎる気もするが
鍵はレナが持っている
持っているはずだ

「どうしたです?」

「レナだっ!!鍵はレナが持ってる」

「何か思い出したのですか?」

先ほど思い出した情報を二人に伝える
同じ時期に付け出したこと

お揃い、というキーワード
これらを結べば答えは簡単に出てくる

「なるほど、如何にもという感じですね」

「だろ？」

「でも、どうするです？レナさんの居場所？」

「そうなんだよなぁ」
？

「それなら問題無さそうです」

「ん？なんでだ？」

装置から位置情報が発信されている
そうレクアは教えてくれた
ということはその情報の受信先は
レナである可能性が高い
レナが無事であればすぐ迎えにくる筈だ

「ですが・・・」

「レナさんももしかしたら」

もしかしたらってなんだ？
レクアにしてはなかなか説明を渋っているではないか

「その、言いにくいのですが
この装置、発信と同時に受信もしています」

「レナの場所をだろ？」

「はい、その位置情報、レナさんの居場所ですが」

「さきほどから微動だにしておりません
さらにはその場所が悪い」

「どういうことだ？」

「おそらくは、同じように金属化しているか
誰かに拘束されています
もしくはその両方です」

「へっ？マジか」

どちらもかなり面倒なことになってきた
レナの実力を考えると
拘束のみってことはないだろう
金属化して放置
それか拘束プラス金属化だ

「それと場所ですが
これがもっとも懸念される情報です」

「どこなんだ？この島より最悪なところなんてないだろ？」

「それがあるんです
レナさん、美少女ですよね」

「え？あぁ本人にはまったくその気はなさそうだが
俺がその件に関しては太鼓判を押してやる」

「それが最悪なんです」

美少女だったら最悪
もしかして、もしかして、もしかして？
最悪だ
俺の想像どおりであれば
レナにとっては最悪の所だ

「もしかして、美の楽園城か？」

「はい」

「やっぱりか」

よりによってあいつの城か
美の探求者ジューダス
世界でも屈指の実力者である魔法剣士
それだけじゃない
美しい物は何としてでも手に入れる
その対象が人であろうともだ

第052話　『ジューダス』

「さぁて、どおするかな」

美の楽園城、ジューダスの城
城自体に面識は無いが
ジューダス本人とは面識があった
たまたまアリスの店に来た時に見て
ちょっとしたトラブルがあっただけ
という程度ではあるのものの
強烈なインパクトを与え
俺の脳裏にその存在は深く刻まれている

おそらくはあいつも俺のことを覚えているだろう
それなりの事をあいつにしてやったからな
逆に覚えて居ないのであれば
かなり穏便な人間かあるいはただのバカだ
バカっぽいというのは否定はできない気もするが
覚えてはいるだろう
できれば忘れていてくれると嬉しいんだが

せっかくなので
その当時何があったか思い出してみるとしよう
もしかしたら今後の傾向と対策が練られるかもしれないし

たしか、まず最初
店に入って来てあいつが言った言葉はこうだったはず

「美しいぃぃぃ！！」

だれもが振り向いてくれそうな
店の外にもあきらかに漏れているほどの大音量でだ
視線の先にあるものはアリスである

「美し過ぎる。君はなんて罪な存在なんだ
この美しい私に美しいと言わせるなんて」

が第二声である
声を発しながら早歩きでアリスに近づいて来る様は
かなりの変人オーラ満載だった

第一印象としては
変なやつというのが最初で
その次にナルシストだと思い
できれば関わりたくないと思った
でもそうはいかない行動をとるのがやつだ

「にゃに？わたしのこと？」

「そうさ、そうだよ！！」

「ありがと♪」

なんてアリスがなかなかに普通に返してしまったのが悪かった
ここであいつに変なスイッチが入ったのか
それとも最初からスイッチはオンのままだったかもしれないが
この後なかなか素敵な事が起こった

「じゃあ、行こうか」

「へっ？」

ジューダスが右の指でパチンと鳴らすと
ほんの一瞬ではあるが
アリスの身に纏っていた
ほぼ紺色のみの衣類が消える
その後すぐに代替えの服が現れたため
ちょっとした幸福タイムは一瞬で終わってしまった
俺の脳裏に淡く儚く残った記憶は
心のシャッターを切り遅れたため
モザイク修正されたような
画質の悪い記憶でしかない
滅多にないチャンスを棒に振ってしまって
今でも思い出すと深く後悔させられるできごとの一つだ

「はわわわ」

慌てふためくアリスだったが
まさに刹那のできごとだったために
アリス自体も隠す時間すらなかった
ようやく判断力が追いつき
隠すべき所に手をやった頃には
純白のドレスを着ていて
隠す必要すらも無くなっていた

どうせなら
もう少し長い時間をかけて変えてくれたら良かったのにと
男ならだれでも思うだろうが
そんなにうまくいかないのがこの世の中である

「君にはこっちの方が似合うよ」

これがジューダスの好みだろうか
これから結婚式でもするのか
と言いたくなるような衣装で
全身まっ白の所どころに宝石が散りばめられているそれは
一目みただけで高価なドレスだということがわかる
似合っているかどうかといえば
似合っているとしか言い用が無く
アリスの童顔の顔
そして身長の低さ
さらには豊満な部分も
活かしに活かしきった衣装だった

「・・・・・・」

一方アリスはというと
声がでないほど動揺していた
理由はおそらく二つの異質なことが原因だ
まず一つはアリスに魔法が効いたこと
そしてもう一つは全く反応できなかった
魔法速度の速さに

この二点を取ってみても
ジューダス自身が相当の手練だということがわかる
少なくともアリスと同等か
それ以上の実力だと思われる

なぜかというと

まず一つ目のアリスへの魔法による関与がおかしい

アリス自身に常にかかっている魔法障壁
物理攻撃は通るが魔法関係はほぼ全ての属性において
無力化するか、遅延化するか、反射するか
どれかに当てはまるはずなのだ
だが、結果としては障壁すら発動せず
そのまましっかりと効いている
服のみへの魔法関与かと少し考えたが
魔法障壁は服の外で展開されているはずだから
すんなり効く事事態がまずおかしい

そしてもう一つの速度についても
アリスの障壁を通した事から
複雑な魔法に違い無いはずだが
無詠唱で遅延無しときたもんだ
相当の魔法的知識の高い人物としか思え無かった

「服・・・お気に入りのふくぅ」

動揺していたはずのアリスだが
気持ちの切り替えはさすがに早い
お気に入りでこだわりのある
ほぼ紺色の魔女っ子ルック
この服が一式無くなったのだ
声は少し震えていて
泣きそうでもあり怒っているようでもあった

「あんな服はダメ、ダメ、ダァメだ
その服を着れば完璧な美しさが映えるってもんだよ」

ジューダスが少し長めに垂らしている
左右非対称の右前髪を掻き分けながら
左手をヒラヒラとちらつかせる

「むぅっ！！ダメじゃないもん！！」

どうやら先ほどの震えは怒りだったようで
お気に入りの服をダメだといわれた事も拍車をかけてか
怒りレベルは相当な物になっているようだ

大きな瞳がクッと釣り上がり
右手には詠唱を終えた
雷魔法がスタンバイされている
しかも見た感じでは中級以上の魔法らしく
解放待ちの状態でも電撃が迸っているぐらいだ

このままアリスが魔法を使えばこの辺り一体の景色が
みるも無惨な形になるのは目に見えていた
ジューダスが受け止め切る可能性は十分にありそうだが
アネツィアを破壊されるのは無しでお願いしたい
仮に受けきれなくてもアリスの財力によって
街はすぐに元通りになるだろうが
わざわざこの街を壊す必要は無いだろうから
面倒だと思いながらも止めに入る事にした

「アリス、ちょっと待て」

「ゆうたん？」

雷の無い方の手
ダイヤと思われる宝石も付いた
高級感溢れる純白の手袋ごと手を握る

触れた事によって意識が散ったのだろう
右手の雷は自然に掻き消えるように消えていったため
ひとまずは安心である

「なんだい君は？」

鬱陶しそうな目付きで
俺のことを見てくるが
そんなこと俺は気にしない
こいつにどう思われようがどうでもいいし
アリスのようにうつくしいなんて言われる方が
面倒だし鬱陶しい

「アリスをどうする気だ？」

おそらくバトルになればこいつにはかなわない
それほどの実力者だということはわかる
だが、俺も男だ
こんな変なやつにアリスをどうにかさせる訳にはいかない
不意打ちであれば俺にも分があるかもしれないし
いろんな意味で危険な香りがするからな

「持って帰るんだよ
美しいモノは美しい者の場所にあるべきだ」

「は？今なんていった？」

わざと言っているのかどうか知らないが
言葉の使い方を間違っている
アリスを標的にしているのなら
表現が変わってくるはずだ

「聞こえなかったのかい
目の前にいる美しいモノ
その娘を持って帰るんだ」

また同じだった
発音が違う
しかしその娘と言っていることから
標的が違うということも考えにくい

「モノの発音がおかしいだろ?
それに持ってじゃなくて連れてだし
あるじゃなくているだ」

「モノはモノだよ
物理のモノ、物体のモノ
モノは物だ」

「そうかい・・・」

上を見ながらまた右前髪を掻き分ける
こいつはアリスを人として見ていなかった
ただ単に美しい物質としての認識でしかない

アリスが美しいというのは間違ってはいない

どちらかと言えば可愛いと表現すべきな気もするが
街角アンケートなんかで
この娘の事を美少女だと思いますか？
なんて事を聞いたら
９０パーセント以上の確率で
イエスと答えるだろう
変なやつに聞かずに
普通の感性の持ち主のみを選んで聞けば
１００パーセントも夢では無いぐらいの美少女ではある

だが、あくまでも美少女であり
少女、女、人なのだ
決して物扱いされて言い訳が無い

「いいかい、美しいということは・・・」

なんていきなり訳のわからない美しさについての講義が始まり
後ろを向いて長々と色々語りだし始めたので
その間に小声でアリスとやりとりをする

「アリス、だんだん俺もムカついて来た
さり気なく身体速度アップする魔法を使えるか？」

「ん？できるけど、どぉするの？」

「ぶん殴る」

「そっか、じゃあわたしの分も一緒に、ね♪」

「おう」

ねの部分に被せて満面の笑みをくれた
とりあえず二発殴っておくことを決める
避けられたり、障壁で拒がれたりする可能性もあるが
頭の中で攻撃が当たっている所のイメージ
ボディ一発に顔面一発が見事にクリーンヒットする事を
想像しながら速度アップ魔法をかけてもらう
おまけとして障壁貫通効果を上げる魔法付きなので
最初の一発は捉える事さえできれば当たるだろう
二発目はどうなるかわからないから
最初の一撃にアリスの苛立ちも乗せて殴る事も決めておいた

「おい」

「ん、なんだい？」

台詞と同時に
後ろを向いていたジューダスはこちらに振り向く
右の足、肩の順で徐々にこちら側が正面になりつつあったが
丁度半分ほど振り向いたタイミングを見計らって
ジューダスに襲い掛かる

「なっ！？」

少しばかり反応が遅い
さすがというかアリスの魔法は効きすぎていた
俺自身が速度のアップ量を予測できないほどの速さだ
ジューダスとの距離は5メートル以上は離れていたが
瞬きしていれば見失うほどの速さで
攻撃の射程範囲内に来れている

まずは右手でボディを狙う
大きく振りかぶった拳は
幾重にも張られた障壁を突き破りながらも
徐々に狙いを定めた所へと向かう

「うぐっ！」

見事にみぞおち辺りにヒット
通常であれば数メートルは吹き飛ぶほどの
俺の右ボディだったが
クリーンヒットしたにもかかわらず
前屈みになる程度の威力に下がっていた

次いで俺の左拳だ
前屈みになったことも手伝って
かなり狙いやすい所にある
アリスの障壁貫通魔法は先ほどの攻撃で消えているので
自前での展開でそれを補うが
アリスの魔力と俺の魔力は天と地ほどの差があるため
攻撃が通る可能性は低い
だが、やる価値はある

左の頬へ目掛け左ストレート
今度も障壁を次々と破りながらいくのかと思っていたが
予想に反して攻撃はすんなり通り
ファンデーションが塗られた頬に見事にヒットする

攻撃が当たりジューダスは大股を開きながら
床に倒れた、店の床だから綺麗だとはいいづらいが

受身も取れずにいて殴られていない右頬が床にベッタリとひっつき
茶色かった床がファンデーションで少しばかり肌色になった

「殴ったね！父上にも殴られたことも無いのに
？しかも、二度も・・・二度もぶった！！」

ゆっくり起き上がり
どこかで聞いたことのあるような台詞をはいてくる
しっかり殴れたので俺の気分はかなり晴れていた
アリスも同様で俺に笑顔を向けてくる

「なぜ、殴られたかわかるか？」

「・・・わかるかっ！！」

「ふん・・・・・・」

どうやら本当にわかっていないようで
立ち上がり殴られた所を治癒魔法で治して
垂れた前髪の隙間から俺を睨みつける

「まぁいい、どうせその娘は持って帰るんだ
君が居ようが居まいが関係ない
邪魔になるなら排除すればいいし
こんな、ふうに、ね！！」

また無詠唱だった
眼前に目に見えるレベルの風の塊ができあがる
認識はできた、対処の方法も知っている
だが、間に合わなかった、俺は

まともに食らうことになることを半ば諦めていたが
日頃の行いが良いせいか爆風には巻き込まれなかった
正確には爆風は起きなかったわけだが
現在俺は無傷だということをお知らせしておく

どうして助かったかというと
爆風と化す瞬間
ほんの十分の一秒程度前
右側から白い純白の手袋が飛んで来て
甲高い音とともに
風の塊と手袋が掻き消えたのだ

「およよ?やっぱり効いたっ!!」
ということは・・・・・・」

純白の手袋を飛ばした犯人はもちろんアリスで
助けたのか助けて無いのか
よくわから無い状態になっていた
というよりたまたま助かっただけのようらしい
台詞からしてそうだしな

「何のはなしだ?」

「障壁だよ、しょぉへき!」

アリスは手袋に自分とほぼ同様の障壁を作っていたらしく
俺を助けたのはついでであって
主の目的はそちらにあったようだ
内容としては障壁効果の確認

及び、分析のための情報の取得だ

「にゃるほどぉ
常時展開式は通して
リミット式は効くのかぁ
たぶん、魔導器具の一種で
禁魔法付きの多重魔器同時解放だよね
こんな使い方があったんだねぇ
これは使えるぅ♪」

という台詞が出たから分析は終わったんだろう

「君、凄いね。美しい上に知識もあるのか
確実に捉えたと思ったんだけど
さすがだね
それにいかに私であっても
このままだと3対1
正直、きびしいかな」

傷が完全に癒えたジューダスは
ファンデーションを塗りながら
奥の扉の先から送られて来ている
レナの殺気を感じ取る
レナ本人はまだ姿を表しては居ないため
喋りながら周りに気を配りつつ
うっとりした眼でアリスを見てくる

「やっぱり、あってる?
ラミアの宴とドナウ雷轟とかも関係あるよね
それにその真ん中にひびのあるハートのネックレスも」

「すごいな、ほぼあってるよ、ほぼね
ますます君が欲しくなった」

「それ、ちょうだい！！」

「これかい？」

「うん♪」

「別に構わないけど、条件がある」

アリスが欲しがっているのは
ジューダスがはめているハート型のネックレスだ
中央にひびがあり、二つで一つのハートが出来るようになっていた
今は合わさっており一つのハートになっている

左側と右側の両方のかけらに宝石が7つずつあしらわれていた
それぞれ宝石自体の色が違っており材質の違いが見てわかる
それに宝石はほんのり光っていて
左側は5つのみ、そして右側は2つのみの点灯に見えるが
この光が意味する所をアリスは解読できたのだろう

宝石のみの価値だけを考えたとしても
価値はかなりの物だろうし
魔法のトリガー的要素を持っているというならば
アリスにとってかなり価値のある存在だと思う
その対価の条件となると浮かんでくる内容は
嫌な予感しかしないような内容ばかりだ

しかし、予想に反して簡単な条件を提示して来た

「これを、くれないか？」

とても対価とは思えない
そんな物を要求して来たのだ

第０５３話　『取り引き』

ジューダスが欲しがった物は
意外な物で
店にある高価な魔法具や薬品などには
視線すらも送らず
ただ一点、その物を見つめていた

「こんなのでいいの？」

「あぁ、これがいいんだ」

手に取って見つめていたのは
先ほどまでは無かった物だ
正確には消えていた物ではあるが
確かに先程までは無く
ジューダスが要求して来るまで
見えていなかった代物だ

ジューダスが要求して来たもの

それは

アリスが着ていた服だった
もっと細かく言えば帽子である

お気に入りでこだわりのある
紺色ほぼ一色のローブやマント
さらには帽子をジューダスが持っていたのだ

おそらくは魔法で取り替えた時の
数分前アリスが身に纏っていたはずの物で
左手にはローブとマント
右手には帽子が握られており
視線の先も帽子に向いていることから
要求物は一式ではなく帽子なのだということがわかる

「帽子だけでいいの？」

「そうだよ。これだけならいいだろう？」

「べつにかまわにゃいけどぉ」

そう言ったアリスは
無意識なのか視線を俺に送って来た
答えを俺に出せということか？

アリスの帽子がジューダスに渡ろうが渡ろまいが
俺にとってなんの損益や収益を生むことはないので
正直な所興味は無かったんだが
ふと思考を巡らせて見る
帽子を持ち帰ったジューダスが一体何のために持ちかえるのか
その後の行動を・・・・・・

俺的な偏見と今までの行動を分析し
持ち帰り後にやりそうなことの回答を出す
その回答はというと最悪にもキモい発想で思わず鳥肌がたった

どんなことを考えてしまったかというとだ

まず最初にすることは
帽子をうっとりとした眼で見つめること

そしてその次には
おもむろに自分の頭に乗せる
乗せるぐらいであれば
普通の思考回路の持ち主でもするだろうさ

さらにその次には
帽子の裏側を顔に近づけて匂いをかいだり
なぁんてことをしそうだ
これはこれでギリギリアウト
という気もしないこともないし
ギリギリセーフと言えない事もない

極め付けとして考えてしまった
俺の想像上でのやつの行動は
その帽子に舌を・・・・・・
って流石にそれはアウトだろっ！！
けどやりそうな気もするしなぁ

とにかくだ
いろいろな想像をしてしまい
キモさマックスのやつではあるが
何に使うのかどうしても知りたくなってしまった

どう答えようか考えているうちに
俺の口から自然と確認の言葉が出てしまっていた

「なんに使うんだよ」

「何にって、別に君に言う必要はないだろう」

「まぁそうだが・・・」

渋る所がますます怪しい
初見ではあるがこいつは変態であることは間違いない
俺の脳はそう考えているし
ほぼ間違いのない事実であるはず

そうなると自ずと答えは出てくるのだ
帽子であろうがなんであろうが
アリスが身に付けていた物であれば
こいつに渡さない方がいいと

「アリス、やめておいた方がいいんじゃないか
何に使われるかわかったもんじゃないぞ」

「でもでもぉ、アレ欲しいんだよねぇ」

「大体の構造はわかったんだろ
アリスにも作れるんじゃないか？」

「う～ん、そればかりはやって見ない事にはわかんにゃい」

そう来たか
アリスはあれが欲しくて
ジューダスも帽子がほしい
利害的には一致しているわけだが

どうしたものか

「いいじゃないか帽子ぐらいくれたって
これには宝石も付いているし
一から作るとすれば１００万ゾル以上は必要だ
そっちの方が圧倒的に有利な交渉じゃないか」

「それはわかってるんだけどぉ
どぉしよっかなぁ」

顎に手を当てて目を瞑り
首を傾げて考えてはいるが
先ほどの目の輝きと
アリスの好奇心の抑制力を考えれば
この後に紡ぎ出される言葉はわかる

「まぁいっかっ」

である

「交渉成立ってことでいいかな？」

「いいよ♪」

結局俺の意見は無視されてしまった
もともと俺の意見を聞く気なんて無かった気もするが
どうも不に落ちない

アリス自体が喜んでいるからいいんだが
結局のところ

あの帽子がなにに使われるのかはわからない
アリスに害があるということは無さそうだが
見えない所でどうなるかはわかりはしないし
出来れば断っておいたほうが良かった気がする

「じゃぁ、これ」

「ありがとう♪」

ハート型のアクセサリーと
ローブとマントなど他の衣類は
アリスのもとに帰ってきた

「それと、そのドレスは君にあげるよ
その服だって君に着てもらえる方が喜ぶと思うし」

「この服？ん～折角だから貰っとくねぇ」

スカートを指でつまんで上にあげる
表情を見る限りはそれほど嬉しそうには見えない

「そうそう、わすれるところだったよ
私の名前はジューダスだ。覚えておいてくれ」

「ジューダス？りょおかぁい」

これもそれほど興味は無さそうだ
というよりもはやくネックレスを解析したくてたまらないのであろう
さらにいうと
ジューダスという名前に心の当たりがあったようで

そちらの調査もしたいのだと思う

「それと」

言葉と同時に俺に視線を向けて来る
うっとうしそうに前髪を掻き分けながらの動作で
邪魔ならその髪型をやめればいいじゃないかと思ってしまう

「私を殴ってしまった君も・・・覚えておけ
必ず、何か別の形でお返ししてあげるから」

「そりゃどうも」

さっさと帰れよという意思を全面に出して
右手で払うような動きを返してやる

「じゃあね」

そういいながら
アリスの店の扉を開ける
店を出てからすぐに転移魔法を使ったのか
いろんな意味で圧倒的な存在感を放っていた
ジューダスのそれが消えた

「変な人だったねぇ」

「だな」

第０５４話　『決意』

「さぁて、どうしたものかな」

いろいろ考えては見たが
あいつの能力の高さ、変態度など
思い出すだけで俺には手の打ちようが無くなるだけだった
ただの変態という認識を色濃くしただけ
それだけだった

「どうしたですか？」

ミリアが俺の考える仕草や声に反応して
首を傾げながら見上げてくる

「ジューダスに会った時のこと考えてたんだが
なかなかいい対処法が浮かばない」

というふうにそのまま今のありのままを伝えた
特に間を置いたわけで無く至って普通に

「へっ！？会ったことあるんです？」

しかし、ミリアの反応は普通では無かった
会ったことに対しての違和感だけの驚きで無い様に見えてしまった
左右を見てそのあとレクアに視線を送る
先ほどの盗聴の内容もあるためだろうか
俺には普通のリアクションとは到底思えない

「ちょっと一悶着あってな」

できる限り間を置かないように
自然に会話を続ける
ミリアの不自然な部分を嗅ぎ取りながら

「そう、ですか」

今度もわざとらし過ぎる違和感がある
さてさて、どうしたものかな？

このまま盗聴していた内容に感して聞いて見るのもいいだろう
あえて普通に会話を続けるだけでもいい
ミリアは味方のはずだ
選択肢はどっちでもいいと思うが
とりあえずノンリスクの無難な方でいくか

「どうした？」
「・・・・・・なんでもないです」

無難な方は失敗だったか？
それとも俺に何かしらを感づいて欲しいのだろうか
うつ向いて背を向けて明らかな考え事をする仕草
なんでもない訳がないじゃないか

とりあえず俺の中でも考えてみよう
材料はミリアとレクア、ジューダスそして俺
違和感の発生原因はおそらく俺とジューダスが接触していたという
事実

ミリアは俺とジューダスが未接触だと思っていた
そう仮定するとしようか
視線をレクアに送ったことから
これによってミリアとレクアに何かしら影響が出る
そういうことだろう

この三人の共通点は特に思い浮かばない
ミリアとレクアの二人のみであれば幾つか共通点はある
女性だということ、それにもう一つ根本的な部分でだ

もしかしたらジューダスも

「勇人さん」
「ん？」

考え事をしている間に俺はミリアに背を向けていたようだ
後ろから声がして振り向こうとする
考え事をする時の癖で目を閉じていたので同時に開く

開いたはずだった

振り向いたはずだった

しかし、目蓋は重く目の前は真っ黒で
感覚的には身体を動かせたように感じ取れない
どこかで感じたことのある感覚

「ごめんなさいです」

何故かミリアが謝る

悲しそうな今にも泣き出しそうな声で

「何がだよ」

口は動いた。
喉も動く、声も出る
しかし、他は動かない

この感覚は
ブランジュの所で味ったことのあるあれだ
生き返る少し前
ベッドの上で寝かされ目に映る物は何もなく
音は聞こえ、体は動かない
あの感覚に酷似している

「予定が変わり過ぎました。」

声は震えたまま少し低くなる

「もう少し待とうと思っていました」

さらに、暗くなる

「できればヤりたくなかったですし
違うパターンも沢山考えました」

ほぼ棒読みに近く

「ですが」

感情も押し殺し

「ゼロ2はダメ、アルファ側だから」

憤りも封じ込め

「もう手遅れかも」

哀愁も封じ込め

「でも、可能性があるなら」

希望をあらわにし

「手を打たなくてはならないです」

決意を決めて、俺の方に歩を進める

靴の音と同時に金属が床に擦れる音もしていた

「なっ!?おい、ミリア・・・・・・?」

慌てるが俺には何も出来ない

どうしようも無かった

「お休みなさい。」

『ゴトっ』

俺は不老不死だ。

不死、のはずだ。

この場合はどうなるんだろうか
不死になってからも感じていた痛みは
なぜか今は感じない

音は、俺の頭に何かが当たった音だった
すぐ耳の上だから音だけでもすぐわかる
目も自然と開くことができた
当たった物は、白と赤の色が混じった床

切り離された相方は
真紅のぬるま湯を撒き散らしながら
膝を付いて顔の上に覆いかぶさる

こんな状況にもかかわらず
意外にも冷静でいられた
鋭利な紅い刃をもつミリアと
動じない目で見てくるレクア
この2人を最後に下からの視線で確認することができた

ああ、まただ

抗い様のない睡魔が
俺に襲いかかってくる

俺、死ぬのかな?

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6656i/

破壊の翼、癒しの瞳

2011年12月7日01時45分発行